

令和6年度指定

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム

構築支援事業

活動報告書

令和7年3月

学校法人 東北工業大学

仙台城南高等学校

令和6年度 WWL コンソーシアム構築支援事業 活動報告書 巻頭言

今年の冬は、東北地方日本海側や内陸部では局地的に大雪の被害に見舞われました。一方太平洋側の地域では降水量が極端に少なく、大船渡では大規模な火災が発生しています。三陸沖の海水温の上昇が原因で水産物の水揚げ量の減少も見られます。一方で、インバウンドにより多くの外国人観光客が東北地方を訪れ、各地に経済効果をもたらすと共にオーバーツーリズムも問題になっています。一筋縄では解決できない、今すぐに対応しなければならない課題を抱えています。

高校生が課題に向き合い、それらを解決できるような力を身に付け、未来の東北を牽引できる人材づくりが本事業のねらいです。デジタル技術を活用し、協力を得ながら落としどころを見つけて前に進む力を育てて頂きたいと思います。

2年目のコンソーシアムでは、生徒の実行委員会が主体となり「みらい東北プレサミット」を実施し、昨年以上の発表とワークショップを体験してもらいました。カリキュラム開発では、「グローバルコンピテンスプログラム」を実施すると共に、探究活動と教科科目との横断的な実践に取組み、東北工業大学の「グリーンテクノロジー」の先取り履修を実施しました。台湾研修旅行や米国デラウェア州のスタディーツアーなど、海外研修の充実を図りました。

伊達藩は藩政時代の400年前、遣欧使節団をメキシコ経由でスペインに派遣しました。我国で初めて太平洋・大西洋を横断し、ヨーロッパに到達して最先端技術の導入をめざしました。東北の先人達は時代のパイオニアとして、チャレンジしたのです。私達もWWLを通じて、未来の輝く東北をめざしましょう。

最後になりますが、ご指導いただいた先生方、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

仙台城南高等学校 校長 伊藤 俊

目 次

【1】 本校概要	1
【2】 研究開発概要	2
【3】 概念図	5
【4】 令和6年度活動内容	6
(1) 令和6年度探究ミニ・カレッジ開始（総合進学コース2学年探究Ⅰ）	
(2) 探究Ⅰ フィールドワーク①開始	
(3) アメリカ デラウェア州 ポリテック高校とのオンライン交流	
(4) SDGs DAY（2年生）	
(5) SDGs DAY（1年生）	
(6) 広瀬川1万人プロジェクト全員参加	
(7) サステナブルブランド国際会議 東北大会	
(8) 探究Ⅰ フィールドワーク②開始（1月まで）	
(9) アメリカ合衆国 デラウェア州 ドーバー高校とのオンライン交流	
(10) 総合進学コース2学年 研修旅行（台湾）	
(11) バナナペーパー作成	
(12) WWL 全国高校生フォーラム 参加	
(13) International Student Forum 参加	
(14) 台南市私立南光高級中学校 来校 交流	
(15) 探究ポスター発表会	
(16) 令和6年度第2回みらい東北高校生プレサミット 開催	
(17) アメリカ合衆国 デラウェア州 スタディツアー 参加	
【5】 高大連携公開講座（先取り履修	20
【6】 令和6年度第2回みらい東北高校生プレサミット	22
【7】 令和6年度WWLに関するアンケート結果	75
【8】 みらい東北 AL ネットワーク会議	85
【9】 連携校 探究活動報告	90
【10】 カリキュラムアドバイザーより	137
【11】 次年度に向けて	138
【12】 御礼	139

1. 本校概要

本校は、昭和 36 年に「東北電子工業高等学校（電子工学科・無線通信科）」として創立されてから 50 有余年、この間に「東北工業大学電子工業高等学校（電子科・普通科）」、「東北工業大学高等学校」と改名し、その伝統を引き継ぎ、平成 25 年度に特進科・探究科（普通科）と科学技術科（工業科）に改編、校名も「仙台城南高等学校」へと改名した。その基本理念は、『大学と接続した新しい学びの創造』。持続可能な社会づくりに対する課題意識と学習動機を喚起し、また個々の学習進度・理解度に応じた学習機会を提供するために、グローバル教育と ICT 教育を推進し、国際競争社会と知識基盤社会を生き抜く人材を育成することを目指す。

普通科

- ・特別進学コース（スーパーコース：25 名×1 学級、アクティブコース：25 名×1 学級）

大学入試を意識したハイレベルな授業等で、国公私立の難関大学や国公立大学への現役合格を目指す。スーパーコースでは、平日 7 時間授業を行い、土曜日や夏期・冬期・春期休業中には、1 日 6 時間の授業を実施し進度を早め、3 年次での入試問題演習を豊富に行う。アクティブコースでは、土曜日や休業中には課外講習を実施するが部活動参加を認め、両立を目指す。平日は 7 時間授業を実施。

両コースともに、朝と放課後に小テストを実施し日々知識の定着をはかり、また、定期的な二者面談により、一人ひとりの進路実現に向けたきめ細やかな指導を行う。

- ・総合進学コース（35 名×5 学級）

大学進学を目標とした教科指導を行いながら、各教科で学んだ知識・技能を活用し、自ら見つけた社会課題の解決に向けて主体的・協働的に取り組む「探究型学習」に重点を置くコースである。タブレット端末（iPad）を活用した ICT 教育やグローバル教育にも力を入れており、3 年次から選択する「サイエンス系」「生活デザイン系」「健康・福祉系」「教育・地域系」の 4 つの系では大学の学びを先行した授業も展開する。これらを通して「自ら学びに向かう姿勢」「人と人をつなぐ力」「将来への高い志」を育み、世界と未来をイメージしながら、地域でみんなのために活躍できる人材を目指す。

科学技術科

工業科として大学への進学に加え、公務員試験や民間就職にも対応している。カリキュラムは、7 年間の学びを意識して組まれており、東北工業大学の教員・施設と接続した多様な教育実践は、最先端の科学技術の基盤となる実力を身に付けられる内容になっている。そして、大学進学後の学びの幅を大きく広げることができる。2 年次から選択する「電子機器」「情報通信」「デザイン」「電気エネルギー」の 4 コースでは、専門的な技術の修得と資格の取得を可能にし、理工系に限らず、幅広い分野の大学進学と就職の両面を支援している。

2. 研究開発概要

(1) イノベティブなグローバル人材像

今、地球社会では、気候変動に象徴されるように人類の持続可能性が危機に瀕しており、科学技術の発展の成果をいかにして地球社会の持続可能性の回復につなげていけるかが、国家や地域の枠組みを越えた喫緊の共通課題となっている。加えて、私たちの住む東北地方では、東日本大震災からの復興や超高齢社会への対応など、地域レベルにおける持続可能性の危機にも直面している。これらの諸課題に対して、とくに科学技術やデータサイエンスの活用により、それぞれの地域を持続可能な社会へと近づけていくことが、県の枠を超えた東北地方全体に共通する目指すべき方向性となっている。

本事業は、管理機関及び拠点校を中心に、東北地域で持続可能な社会を見据えた先進的な学びを実践している高校や、持続可能性について情報交換できる海外の高校・大学などと連携し、『みらい東北ALネットワーク』を構築し、東北から世界へ、自分なりの持続可能な社会へ向けた考えを発信できる人材の育成を目的とする。また、その人材育成に向けて具体的に以下に掲げた3つの力を養う。

- ① サステナブルな視点から社会の課題を見つけ、解決に向けて協働し、未来の創造者として社会に貢献し続ける力
- ② 人工知能やデータサイエンスの基礎的な素養を身につけ使いこなす力
- ③ 東北に根ざした豊かなアイデンティティとグローバルな視野で新しい価値を創造し、世界に発信する力

(2) ALネットワークの目的と役割

事業拠点校では、事業協働機関である東北工業大学との連携によって高校段階から生徒にデータサイエンスの基礎に触れさせ、またSDGsと結びつけた探究活動と教科学習の双方により社会の課題改善に対する考察を深めさせたうえで、東北地方の各高校とともに、将来における東北地方の持続可能な発展を担える人材育成を目指す。その際、異なる学校や組織が「サステナブルな東北の実現」というビジョンを共有し、互いに触発し合いながら緩やかなネットワークをつくり、連携の過程を通してつながりを強化していく Social Capital（社会資本）の理念を基盤にしたい。

以上の目的から、以下の3つのネットワークで構成される『みらい東北ALネットワーク』を構築する。

(2)－1 東北地方の高等学校との連携（School Social Capital）

【目的：探究成果報告会による連携校の探究活動の充実】

「みらい東北のサステナビリティ」をテーマとして設定し、各連携校と共有したうえで、連携校それぞれの地域性や特色を生かした課題設定と持続可能な解決に向けた探究学習を進める。その際、とくにデータサイエンスの成果を東北地方の諸課題の改善につなげていけるようなアイディアを生かした探究活動も追究する。さらに、各校の探究活動の成果をプレゼンテーションする機会として、県内・県外の連携校との合同による探究成果報告会を実施する。

(2)ー2 海外の高校・大学との連携 (Global Social Capital)

【目的1：オンラインでの意見交流】

D Xが推進されている台湾の高校生との議論を通し、探究活動の成果を深める。

【目的2：高校生国際会議『みらい東北高校生国際サミット』の開催】

3年後を目標として、研究成果を意見交換する『みらい東北高校生国際サミット』を開催する。拠点校からは課題解決のアプローチとして、D Xの視点を重視したアイデアを提言し、全参加校による共同宣言の発信を目指す。

(2)ー3 地域社会（企業、行政等）との連携 (Local Social Capital)

【目的1：先進的な企業・大学等からの探究活動への助言】

県内においてすでに持続可能性やD Xを追究している企業や大学、行政機関等から、『SDGs DAY』の企画や探究活動発表会において直接指導を受ける。また、探究のフィールドワークにおける取材を通して、生徒に先進的な取り組みを直接学ばせる。

【目的2：高校生国際会議『みらい東北高校生国際サミット』への参加】

連携する地域企業にも『みらい東北高校生国際サミット』への参加を依頼し、学校と企業がともに持続可能な社会を目指す「Local Social Capital」の形成を目指す。

(3) 短期的、中期的及び長期的な目標

『みらい東北ALネットワーク』の形成と管理運営、カリキュラム開発等に関する事業期間（3年間）の主な計画と短期・中期・長期的な目標は以下の通りである。

(3)ー1 事業期間の主な計画と短期的目標

1年目	2年目	3年目
連携校との『みらい東北高校生国際サミット』の準備	『みらい東北高校生国際サミット』のプレ開催	『みらい東北高校生国際サミット』の開催
連携校間の探究成果報告会の準備とプレ実施	連携校間の探究成果報告会の実施	連携校間の探究成果報告会の定期化
企業・大学との連携づくり	企業・大学との連携事業開始	企業・大学との連携の強化
D X & G X 教育開講科目受講システムの構築	拠点校内での開講科目受講システムの実施	受講システムを連携校間で共有
海外留学と海外大学進学システムの構築	拠点校内での海外留学と海外大学進学システムの実施	海外留学と海外大学進学システムを連携校間で共有

(3)ー2 中期的目標（3～5年）

3年目に開催する『みらい東北高校生国際サミット』を充実させ、連携校・大学・企業・海外団体が全てそろった開催を5年後までに目指す。加えて連携校間のカリキュラム・マネジメント報告会を企画し、教員間の連携も強める。

(3)-3 長期的目標（５～１０年）

『みらい東北ＡＬネットワーク』の各 Social Capital の実践を東北全域に発信し、連携校以外の学校にも共有していきたい。また、『みらい東北ＡＬネットワーク』と他地域のＡＬネットワークが連携したワークショップの開催を目指す。

3. 概念図

みらい東北のサステナビリティとDXを牽引する人材育成ネットワーク

管理機関の構想

短期目標【1～3年】

- 「みらい東北高校生国際サ
ミット」の開催
連携校内でのDX&GX教育
課題科目受講システムの
構築
連携校間の研究発表報告会
の定例実施
各企業、大学との連携の
明確化
海外研修とオンライン交流
の定例実施
海外留学と地域・大学との
連携システムの構築

中期目標
【3～5年】

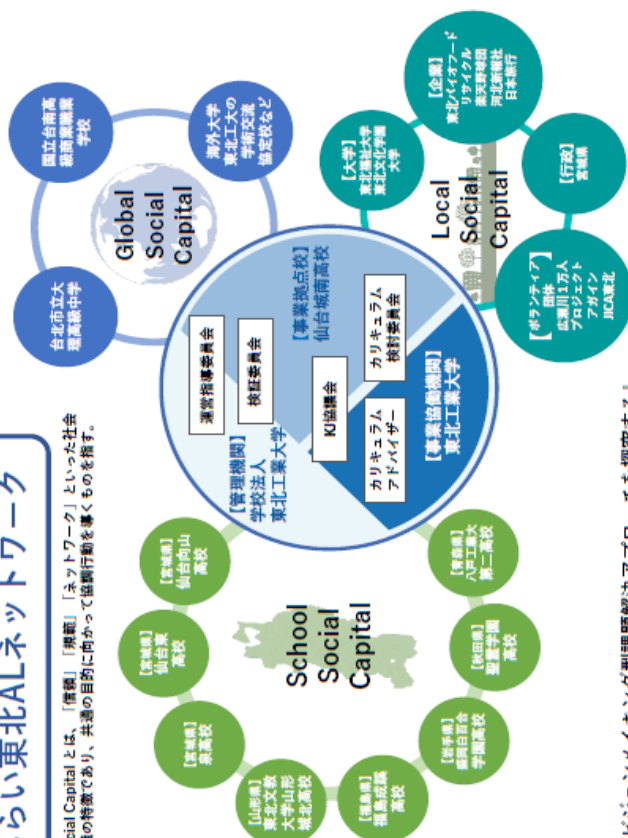
- 選考校・大学・企業・海外団体が生らった「みらい東北高校生国際サミット」の開催
- 選考校間のカリキュラム・マネジメントの報告会を実施
- それぞれのSocial Capitalの実践を東北全域に発信

長期目標【10年】

- みらい東北ALネットワーク
の実践を東北全域で共有
- みらい東北ALネットワーク
と他地域のALネットワーク
が連携したワークシヨップ
の開催

みらい東北ALネットワーク

※ Social Capital とは、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴であり、共通の目的に向かって協調行動を導くものを指す。



拠点校の今までの取り組み

- 文理融合型カリキュラムの実施 ○SDGs DAYによる教科横断型授業 ○地域と連携した探究活動
○KI協議会による高大連携（テクノフォーラム、サマースクール、アカデミック・インターシップ）
○台北市立大理高級中学との姉妹校交流 ○國立台南高級商業職業学校とのオンライン交流 ○台灣研修旅行

拠点校のカリキュラム開発構想

『みらい東北のサステナブルを題材に、DXによるビジョンメイキング型課題解決アプローチを探究する』
SDGs（サステナブルを指える）×ICT・プログラミング（DXを指える）×ALネットワーク（コラボレーションを指える）

仙台城南高校	1年生 「自己と多文化社会を見つめる」 ライフデザイン プログラム 社会課題 基礎調査	2年生 「グローバル社会と学びをつなげる」 SDGs 地域リサーチ プロジェクト SDGs 地域アイデア プロジェクト	3年生 「サステナブル社会へ踏み出す」 進路探究ゼミ 卒業論文作成
教科横断型授業 学校設定科目 課外活動	『グローバルコンピテンシスⅠ』 SDGs DAY「プラスチックスマート」 『グローバルコンピテンシスⅡ』 SDGs DAY「フードドライブ」 台湾研修旅行	『グローバルコンピテンシスⅢ』 情報演習（AIプログラミング入門） みらい東北高校生国際サミット	
高大接続	デクノフォーラム（大学見学＋特別講座） サマースクール（大学での研究を一日体験） 探究ミニカレッジ 【学期分野別 出前講座】 アカデミック・インターンシップ （大学で半年間研究活動）	教科「探究」（大学の学びを先取り）	Dx & Gx連携教育 「人工知能授業」 Dx & Gx連携教育 「MATLAB実習」

「私たちは未来を
変えられる！」



4. 令和6年度活動内容

今年度の WWL としての活動は以下の通りである。

	月	活動内容
(1)	5	令和6年度探究ミニ・カレッジ開始（総合進学コース2学年探究Ⅰ）
(2)	5	探究Ⅰ フィールドワーク 第1回 開始
(3)	5	アメリカ デラウェア州 ポリテック高校とのオンライン交流
(4)	7	SDGs DAY（2年生）
(5)	9	SDGs DAY（1年生）
(6)	9	広瀬川1万人プロジェクト全員参加
(7)	10	サステナブル・ブランド国際会議 学生招待プログラム 参加
(8)	11	探究Ⅰ フィールドワーク 第2回 開始（1月まで）
(9)	11	アメリカ合衆国 デラウェア州 ドーバー高校とのオンライン交流
(10)	11~12	総合進学コース2学年 研修旅行（台湾）
(11)	12	バナナペーパー作成
(12)	12	WWL 全国高校生フォーラム 参加
(13)	1	International Student Forum 参加
(14)	2	台南市私立南光高級中学校 来校 交流
(15)	3	探究ポスター発表会
(16)	3	令和6年度第2回みらい東北高校生プレサミット 開催
(17)	3	アメリカ合衆国 デラウェア州 スタディツアー 参加

(1) 令和6年度 探究ミニ・カレッジ（総合進学コース2学年探究Ⅰ前期）

①実施日：毎週（金）5校時・6校時

②場 所：仙台城南高等学校

③参加者：仙台城南高校普通科総合進学コース2年

④内 容：大学の先生方からさまざまな学問分野の講義を聞くことにより、各学問分野における最先端の状況や学問分野と社会とのつながりについて考察させる。また、レポート作成を通して、小論文や総合型入試に対応できる要約力を鍛え、小論文作成の基礎を養う。5校時に講義（50分）を受講し、6校時にレポートを作成する。



図1：講義の様子



図2：受講の様子

表1 講師・講義内容等一覧（＊印は すべて東北工業大学）

	実施日	学問分野	大学・学部・学科	講 師	講義テーマ
1	4/14（金）	ネット・デバイス	* 情報通信工学科	木戸 博	AIの基礎とプログラミング
2	4/21（金）	ロボット・AI	* 電気電子工学科	藤田豊己	ロボット技術と視覚機能
3	4/28（金）	建築	* 建築学科	そう びょう 曹 森	映像解析による地震発生時建物の 変位測定
4	5/19（金）	環境・エネルギー	* 環境応用化学科	佐藤善之	環境・エネルギー
5	5/26（金）	産業デザイン	* 産業デザイン学科	うめだ ひろき 梅田 弘樹	産業デザインの学問
6	6/ 2（金）	医療	東北文化学園大学医療福祉学部	藤澤宏幸	チーム医療の役割
7	6/ 9（金）	看護	東北文化学園大学医療福祉学部	山岸貴子	地域包括ケアシステム
8	6/23（金）	まちづくり	* 都市マネジメント学科	すとう あつし 須藤 敦史	都市マネジメント
9	6/30（金）	国際・インバウンド	* 経営コミュニケーション学科	亀井あかね	国際・インバウンド
10	7/ 7（金）	経済・経営	東北福祉大学総合マネジメント学部	工藤健一	経済・経営の世界
11	7/14（金）	教育	東北福祉大学教育学部	金井 徹	教育の世界
12	9/15（金）	健康・スポーツ	* 総合教育センター	高野淳司 本田春彦	ポッチャをやってみよう
13	9/29（金）	居住環境デザイン	* 生活デザイン学科	くりはら こうすけ 栗原 広 佑	木のある住環境をデザインする

⑤振り返り

今年度2年目の企画になり、今年も大学関係者の多大なるご支援と迅速な対応をいただき、現代世界の諸課題に多彩な視点からアプローチする連続講義を受講させることができた。

次年度以降も継続的に実施することにより、今後の探究活動や進路選択の基盤となる「学問や世界に対する知的好奇心」を育てていきたい。

(2) 探究Ⅰ フィールドワーク 第1回

①実施日：令和6年5月22日（水）

②場 所：NPO 法人団体

（八木山市民センター、のびすく泉中央、八木山児童館、スペシャルオリンピックなど）

③参加者：普通科総合進学コース2年

④内 容：「社会貢献はなぜするの？」という疑問を解明するために社会の地域課題への取り組みについて調査。NPOなどの団体訪問（フィールドワーク）、ボランティア講演、ボランティア体験活動とプレゼンテーション発表を実施。実際に地域課題に対して取り組まれている事例やその目的を理解し、無償で他人に貢献することと、社会の中での自分自身の存在意義について考えるとともに、社会貢献と働くことにやりがいを感じて、自発的に社会に参画していこうとする態度を身につける。

(3) アメリカ デラウェア州 ポリテック高校とのオンライン交流

①実施日：令和5年5月18日（土）

②場 所：仙台城南高等学校 1年2組教室

③参加者：普通科総合進学コース2年15名、教員1名

Polytech 高校生徒6名、教員3名

④内 容：互いの自己紹介から始まり、次にポリテック高校からの質問に本校生徒が答えるかたちで進めた。参加生徒からは「少しずつ英語を話すことに慣れてきた」「相手が話す英語が少し聞き取れた」との感想があった。



図3：オンライン交流の様子

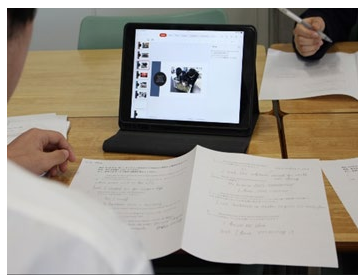


図4：オンライン交流の様子

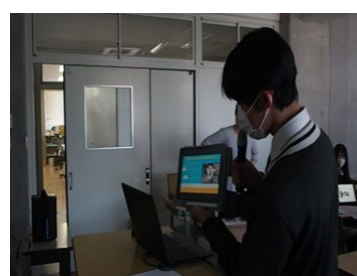


図5：オンライン交流の様子

(4) SDGs DAY

<2学年>

「SDGs DAY」特別授業＋講演

①実施日：7月19日（金）

②場 所：仙台城南高等学校

③参加者：普通科総合進学コース2年

④内 容：

A 共通 SDGs の目標を題材に各教科で学習する。

B 東北工大の先生や外部の専門家からの共通の SDGs の目標を題材とした講話を聴講する。

C 高大7年間を通した学びの可視化につなげる。

フードドライブ 世界と日本のフードロスの現状 世界と日本の貧困の現状 フードドライブの取り組み 子ども食堂等への寄付について など		

図6：共通 SDGs の目標

表 2：7月19日普通科総合進学コース2学年時間割

	2-4	2-5	2-6	2-7	2-8
1校時	公共	数学Ⅱ	化学基礎	保健	化学基礎
2校時	英語CⅡA	保健	論理国語	家庭基礎	数学Ⅱ
3校時	物理/生物/日本史探究			英語CⅡA	英語CⅡA
4校時	宮城大学 食産業学群 フードマネジメント学類 丹治朋子 准教授 講話 「海外と日本のフードロスの現状とフードドライブの取り組み事例」				
5校時	ふうどばんく東北あがいん 理事 高橋さん 講話 「ふうどばんく東北あがいんの活動とこれから」				
6校時	フードバンク作成 + 感想文「SDGs DAYを通して学んだこと」				



図 7：授業風景（物理）



図 8：「宮城大学」丹野朋子氏による講演



図 9：食品回収ボックス作成体験実施

(5) SDGs DAY

< 1 学年 >

「SDGs DAY」特別授業＋講演

- ①実施日：8月30日（金）
- ②場 所：仙台城南高等学校
- ③参加者：普通科総合進学コース1年
- ④内 容：A: 共通 SDGs の目標を題材に各教科で学習する。
B: 東北工大の先生や外部の専門家からの共通の SDGs の目標を題材とした講話を聴講する。
C: 木のストロー作成を体験する。



海洋プラスチック・マイクロプラスチック
 海洋プラスチックの原因や現状
 プラスチックごみの削減
 プラスチックリサイクル
 プラスチックを利用したサービス見直し など

図 10：共通 SDGs の目標

表 3：8月30日普通科総合進学コース1年時間割

	1-2	1-3	1-4	1-5	1-6
1校時	生物基礎	物理基礎	GCP	情報Ⅰ	公共
2校時	英語CⅠA	数学A	現代の国語	公共	英語CⅠA
3校時	現代の国語	英語CⅠA	保健	生物基礎	生物基礎
4校時	東北工業大学 工学部 環境応用学科 山田教授 講話 「海洋プラスチック問題と私たちの行動 ～水環境保全の視点から～」				
5校時	広瀬川1万人プロジェクト 事務局 谷田貝さん 講話 「広瀬川1万人プロジェクトの取り組みと広瀬川の生態系」				
6校時	木のストロー作成体験 + 感想文「SDGs DAYを通して学んだこと」				



図 11：授業の様子



図 12：木のストロー作成体験

(6) 広瀬川 1 万人プロジェクト全員参加

①実施日：9 月 28 日（土）

②場 所：広瀬川広瀬橋付近

③参加者：普通科総合進学コース 1 年

④内 容：

A SDGs 達成に向けた行動の実践（ゴミ拾い）を通して広瀬川付近のまちや自然の様子を観察する。

B ボランティアと一緒に参加している地域の方々と協力して作業する。



図 13：広瀬川 1 万人プロジェクト参加の様子

(7) サステナブル・ブランド国際会議 学生招待プログラム

第 5 回 SB Student Ambassador 東北ブロック大会

①実施日：令和 6 年 10 月 5 日（土） 9:30 ～ 17:30

②場 所：東北工業大学 9 号館

③参加者：宮城県・青森県・岩手県・秋田県・山形県・福島県の計 16 校から 100 人が参加

④内 容：基調講演として、一般社団法人フィッシャーマン・ジャパン広報・広告担当の香川幹さんから漁業に携わる若者を増やし、育成していく取り組みを聞き、独自のアイディアと活発な取り組みで持続可能な社会づくりを牽引している人物の考えに触れた。また、昨年度のサステナブル・ブランド国際会議に参加した東北高校の生徒 2 名からこの 1 年間の環境保全の取り組みについて成果報告を聞き、高校生の立場からでもサステナブルな活動を通して社会に発信できることを学んだ。その後、テーマ別プログラムでは「地域の人口流出に歯止めをかけるアイディア」「学生が地元や地域づくりに関心を持つためのアイディア」「未来の東北で働くことを考える」の 3 テーマに分かれ、各協力企業からの講演後、学校混合の 4 人グループになってディスカッションを行った。ディスカッション内容をテーマ別で各グループ発表を行った後、全体で集まって各テーマのグループ代表が発表することで各テーマの内容を共有した。



図 14：テーマ別に作業する参加生徒の様子



図 15：サステナブル・ブランド国際会議 参加生徒

(8) 探究Ⅰ フィールドワーク 第2回

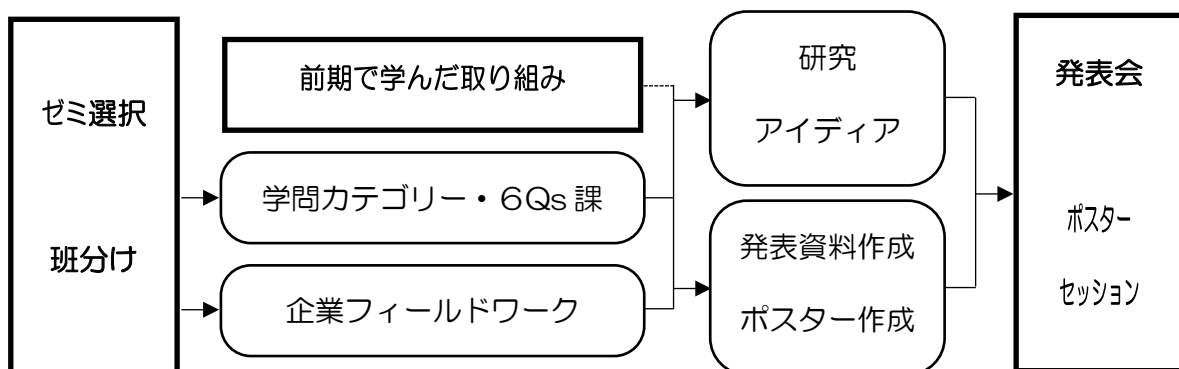
①実施日：令和6年11月8日（金）～

②場 所：企業、専門学校、大学

③参加者：普通科総合進学コース 2年

④内 容：今の大学で行っている学問別の研究や企業での取り組みにも触れながら、自分だったらこんな地域貢献・社会貢献をしてみたいというアイデアを考えてみる。この経験を通して、卒業後の進路でも主体的に地域貢献・社会貢献を提案し、実行していく姿勢を身につける。

表 4：地域アイデアプロジェクトの流れ



(9) アメリカ合衆国 デラウェア州 ドーバー高校とのオンライン交流会

- ①実施日：令和6年11月16日（土）9：00～10：00
- ②場 所：普通科総合進学コース1年6組
- ③参加者：普通科総合進学コース1年生希望者/ドーバー高校教員・日本語クラブ生徒
- ④内 容：昨年から始めた交流も今回で3回目になった。今回は、主に仙台城南高校から英語でプレゼンテーションを行った。自己紹介では自分の名前の由来を紹介し、その後に趣味等を発表した。プレゼンテーションの最後には、ドーバー高校へ質問をし、会話のやり取りを楽しんだ。参加生徒からは、「緊張した」「もっと相手の英語を聞き取るようになりたい」との感想があった。

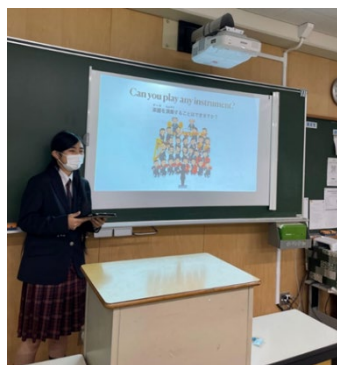


図 16：プレゼンテーションの様子



図 17：プレゼンテーションの様子

(10) 総合進学コース2学年 研修旅行

- ①実施日：令和6年11月27日（水）～12月1日（日）
- ②場 所：台湾
- ③参加者：普通科総合進学コース2年
- ④内 容：実践大学見学・判別自主研修・姉妹校交流・SDGs 学習・市内視察



図 18：大理高級中学校との交流



図 19：台南高級商業職業学校との交流

(11) バナナペーパー作成

①実施日：令和6年12月中旬

②場 所：仙台城南高等学校

③参加者：普通科総合進学コース1年

④内 容：

- A 英語・物理基礎・公共の授業の中で、それぞれの視点からザンビアのバナナペーパーの取り組みに触れる。
- B 物理基礎の授業の中で、学校周辺の八百屋で廃棄される野菜やバナナの皮を再利用した紙すきを行い、実際に廃棄物から紙をつくるアップサイクルを体験的に学ぶ。
- C Bで作った紙をクリスマスメッセージカードとして装飾し家族にプレゼントする。



1学年 普通科総合進学コース 物理基礎		
SDGs バナナペーパー レポート		
レポート作成者	1 年 5 組	担当作成者
名前	名前	名前
① 紙すきした廃棄物の様子【写真】	② クリスマスカードの完成品【写真】	
③ 紙すきをしてみて、思ったより柔らかい感じがする。廃棄物の再利用に役立ちそうだ。実際に紙すきを体験することができた。	④ クリスマスカードの完成品【写真】	
⑤ バナナペーパーの感想【自由記述】	⑥ バナナペーパーの感想【自由記述】	
⑦ バナナペーパーの感想【自由記述】	⑧ バナナペーパーの感想【自由記述】	

図 20：バナナペーパー作成レポート

(12) WWL 事業 全国高校生フォーラム

- ①実施日：令和6年12月15日（日）
- ②場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター
- ③参加者：普通科総合進学コース1年 代表4名
- ④内 容：WWL および SGH ネットワークに参加する高校生が一堂に会し、日頃取り組んでいるグローバルな社会課題の解決方法や提案をプレゼンテーションし、生徒交流会ではディスカッションを行った。本校は「ヤングケアラー」に関する先輩たちの研究を引き継ぎ、さらに発展させてきた。NPO 団体から話を伺いながら、ヤングケアラーの早期発見と問題の認知度向上を目的とした「ヤングケアラー診断サイト」を NPO 団体と協力して作成した。このサイトを活用し、中学校でヤングケアラーに関する授業を行った際の様子や、授業を通じて得たフィードバックをもとに、より多くの子どもたちが自分の状況を正確に理解し、適切な支援を受けられるようにするための提案も報告した。ディスカッションでは「Well-being」をテーマに、様々な視点から意見交換を行った。なお、プレゼンテーションおよびディスカッションの使用言語は英語であった。

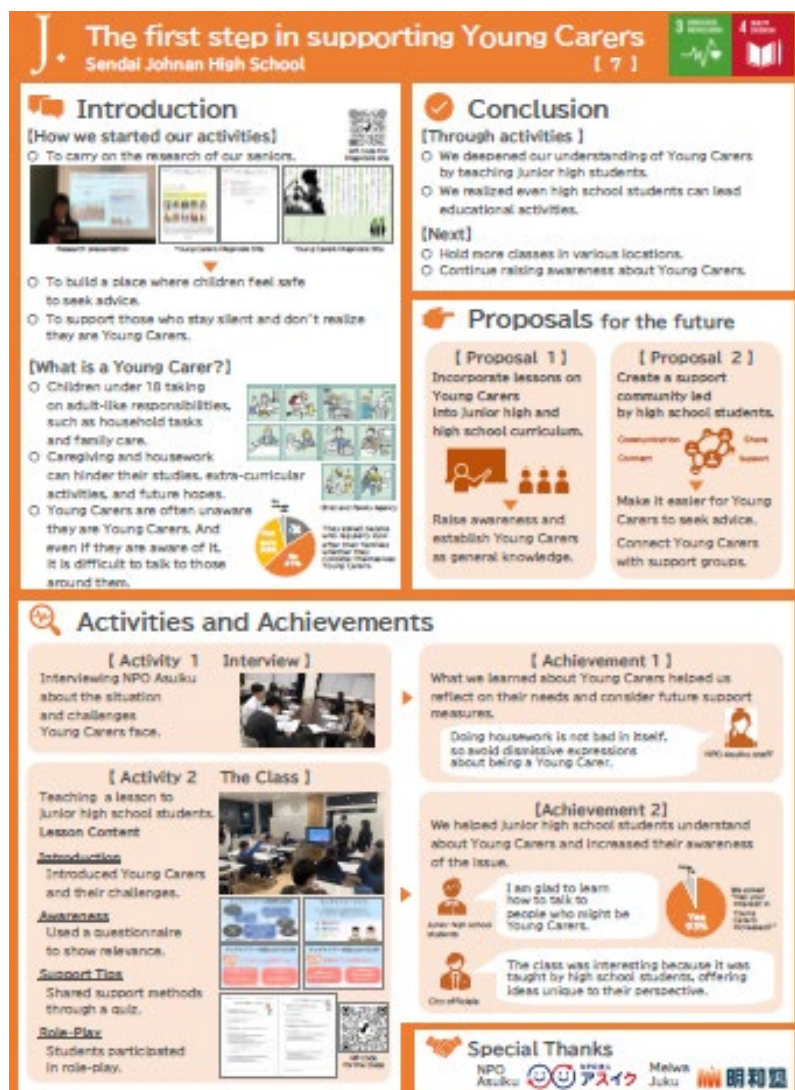


図 21：発表用ポスター

(13) International Student Forum 参加

- ①実施日：令和7年1月17日（金）～19日（日）
- ②場所：早稲田渋谷シンガポール校
- ③参加者：参加希望者（総合進学コース2年8名、1年3名、
特別進学アクティブコース2年1名、計12名）
- ④内容：早稲田渋谷シンガポール校主催の国際会議に初めて参加した。本校のほか、日本から2校の高校生、シンガポールの複数の高校、そして早稲田渋谷シンガポール校の生徒が参加した。滞在中は日本人家庭やシンガポール人家庭でホームステイをしながら交流を深めた。Forum当日は、午前中に英語での探究発表を参観し、午後は各グループに分かれてディスカッションを行った。最終日には学校の枠を超えたチームでシンガポール市内を視察し、さらに交流の幅を広げた。帰国後の報告会では、参加者全員が堂々と英語でプレゼンテーションを行い、今後の学習への大きなモチベーションとなっていた。



図 22：全体会の様子



図 23：シンガポール市内視察の様子

(14) 台南市私立南光高級中学校 来校 交流

- ①実施日：令和7年2月12日（水）
- ②場 所：仙台城南高等学校 会議室 物理室
- ③参加者：仙台城南高等学校2年グローバル委員、生徒会役員
台南市私立南光高級中学校1年生、2年生
- ④内 容：両校代表スピーチ、両校学校紹介、レジンキーホルダー作り



図 24：全体会の様子

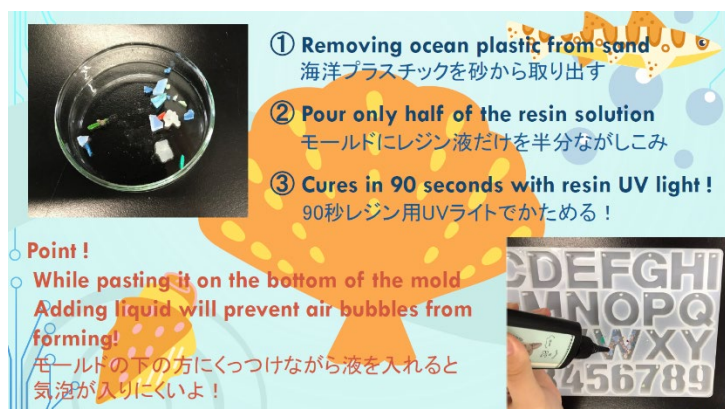


図 25：レジンアクセサリー説明スライド一部



図 26：集合写真

(15) 探究ポスター発表会

- ①実施日：令和 7 年 3 月 3 日（月）2～4 校時
- ②場 所：仙台城南高等学校 アリーナ（体育館）
- ③参加者：普通科総合進学コース 1 年生 167 名・2 年生 160 名/助言をいただいた先生（敬称略）
 - 東北工業大学ライフデザイン学部産業デザイン学科 梅田 弘樹 教授
 - 東北工業大学ライフデザイン学部産業デザイン学科 下總 良則 准教授
 - 東北工業大学ライフデザイン学部経営デザイン学科 猿渡 学 教授
 - 東北工業大学ライフデザイン学部経営デザイン学科 金井 辰郎 教授
 - 東北工業大学総合教育センター 加藤 順一 教授
 - 東北文化学園大学医療福祉学部リハビリテーション学科 鈴木 誠 教授
 - 東北文化学園大学医療福祉学部リハビリテーション学科 平山 和哉 講師

④内容

A 目的

「探究基礎」「探究Ⅰ」で調査してきたことをプレゼンテーション、ポスターセッション形式で発表し、様々な意見を交換することで、多面的に物事を見る力を養い、調査してきたことをより深く考える機会を作る。

B ポスターセッションの流れ

各班の探究活動の内容をポスターにまとめ、アリーナに掲示した。発表・質疑応答・講評込み各班 10 分程度で進めた。質疑応答では、大学教員・担当教員から講評を行った。参加生徒は、適宜質疑応答を行いながら、疑問点や感想等を記した付箋を発表したポスターに張り付ける形でフィードバックし、今後の深まりにつながるようにした。加えて、生徒には他の班の発表を聞いて気になったことやよかったところなどを記入するワークシートを配布し、他者の発表から今後生かすことができる内容を記録するように意識させた。



図 27：探究ポスター発表の様子



図 28：探究ポスター発表の様子

(16) 令和 6 年度第 2 回みらい東北高校生プレサミット 開催

①実施日：令和 7 年 3 月 15 日（土）

②場 所：東北工業大学 八木山キャンパス 9 号館

③参加者：八戸工大第二高校・盛岡白百合学園高校・聖霊学園高校

東北文教大学山形城北高校・福島成蹊高校・仙台向山高校・仙台東高校・泉高校

仙台二華高校・金沢大学附属高校・甲府第一高校

国立台南高級商業職業学校・台北市立大理高級中学校

仙台城南高校 （計 14 校）

④内 容：

テーマ：デジタル線路 未来を乗せて

実施方法：対面／オンライン

全体司会：生徒実行委員会 副実行委員長 4 名

令和 6 年度 WWL コンソーシアム構築支援事業
「第 2 回みらい東北高校生プレサミット」開催要項

- 主催・主管
主催 東北工業大学 主管 仙台城南高等学校
- テーマ・目的
テーマ デジタル線路 未来を乗せて
目的
①上記テーマに基づき、連携校それぞれの地域性や特色を生かした課題設定と持続可能な解決に向けた探究学習を推進し、その成果をプレゼンする機会を設けることにより、その成果を共有し、みらい東北のサステイナビリティに役立てる。
②ID 文が推進されている台湾の高校生との議論を通し、グローバル社会の一員としての自覚を促し、探究活動の成果を世界へ発信する足がかりとする。
③県内においてすでに持続可能性や ID 文を定めている企業や大学、行政機関等から、直接指導を受けることにより、先進的な取り組みを直接学び取り、ともに持続可能な社会である「Local Social Capital」の形成を目指す。
- 会 場 東北工業大学 9 号館 1～3 F 各教室 【全体司会室 907 教室】
- 日 時 令和 7 年 3 月 15 日（土） 9 時 30 分～16 時 00 分
- プログラム（予定）

	時間	場所	活動
午前	受付 9:00～9:30	9 号館 1 F	受付
	開会式 9:30～10:00	907 教室	仙台城南高校 校長挨拶 出
	全国高校生フォーラム 10:00～10:30	907 教室	仙台城南高校 代表生徒の発表 台湾結縁校生徒からのコメント及び質疑応答
	休憩・移動 10:30～10:40		
	発表 10:40～12:00	9 号館 各教室	①科学 ②環境 ③文化・教育 ④まちづくり ⑤国際理解 発表→質疑応答→アドバイス・講評
午後	昼食 12:00～13:00	各教室	
	ラッシュアゲインの作りと発表 13:00～14:30	9 号館 各教室	①科学 ②環境 ③文化・教育 ④まちづくり ⑤国際理解 おけ 作成→プレゼン→プレゼン
	休憩・移動 14:30～14:40		
	アイデア発表 14:40～15:45	907 教室	各グループ代表（1 名×5）がアイデアを発表する。各企業担当から講評
	講評 15:45～15:55	907 教室	東北工業大学 学長 中島慶子氏
	閉会式 15:55～16:00	907 教室	

6 申し込み 別紙参加申込書による

図 29：プレサミット開催要項



図 30：生徒作成ポスター



図 31：生徒作成ポスター



図 32：生徒実行委員活動の様子



図 33：分科会の様子



図 34：全体会の様子

(17) アメリカ合衆国 デラウェア州 スタディツアー

- ①実施日：令和7年3月20日（木）～30日（日）
- ②場 所：アメリカ合衆国 デラウェア州
- ③参加者：普通科総合進学コース1年1名、2年3名、
- ④内 容：ホームステイ、大学訪問（デラウェア大学、デラウェア州立大学）
高校訪問（Early College School、Dover High School）
English Language of Institute 訪問（語学授業体験）
New York 視察
各校にてプレゼンテーション（宮城県紹介、学校紹介、探究活動紹介）



図 35：Welcome Party の様子



図 36：Welcome Party の様子



図 37：交流の様子

5. 高大連携公開講座 (先取り履修)

高大連携公開講座（先取り履修）

- ①対 象：WWL コンソーシアム構築支援事業 参加校
- ②科 目 名：グリーンテクノロジー（開講大学：東北工業大学）
- ③開講時期：令和6（2024）年度 後期（12月～2月）
- ④修得単位：1単位
- ⑤授業構成：全8回 メディア講義 各100分（21人の教員によるオムニバス形式）
- ⑥授業内容：

◆授業の達成目標・概要

カーボンニュートラルの実現にはどうすべきか？東北工業大学で何をどのように学ぶべきか？など、3学部8学科の教員がすべての学生に、成長が期待される産業分野における「グリーンテクノロジー」について講義し、学生の視野を広げそれぞれの専門の学びとの連続性や連携についての理解を促す。講義では産業分野毎に、どのような取り組みがなされてきたか、またその分野での問題点は何かを述べたのち、世界および日本における省エネ、省資源およびカーボンニュートラルへの最新の取り組みを概説する。さらに、その分野で本学が関わっている研究を紹介する。

◆教科書等

授業で使用する資料は学習支援システム(LMS)等で配布する。なお、学習に使用するインターネット環境やPC等は各自準備すること。

◆成績評価方法・基準

学習支援システム(LMS)で実施される動画を視聴後、確認テストにおいて2/3以上「正解」することでその回の講義を「合格」とする。全8回の講義において6回以上「合格」することで単位修得を認める。

◆授業計画（各回の学習内容等）

学習支援システム(LMS)に掲載される資料や動画視聴により学習し、確認テストを行うことで学力の定着を図る。

開講回	学習内容	授業時間（目安）
第1回	講義の概要 洋上風力産業	各授業 約100分
第2回	自動車・蓄電池産業	
第3回	半導体・情報通信産業	
第4回	住宅・建築物産業	
第5回	資源循環産業	

第6回	カーボンリサイクル・水素産業	
第7回	食料・農林水産業	
第8回	ライフスタイル産業	

表1：高大連携講座 授業計画

⑦単位認定：全8回の講義において6回以上「合格」することで単位修得を認め、単位修得証明書を交付する。

単位修得証明書は全講義終了後、高校を通じて合格者に交付する。

合格者は東北工業大学進学後、教養教育科目「グリーンテクノロジー（1単位）」として、大学卒業に必要な単位に加えることができる。



東北工業大学の

環境・サステナビリティ教育

国のグリーン成長戦略において、2050年に向けて成長が期待される14の重点分野。多くの分野が、東北工業大学の工学部・建築学部・ライフデザイン学部の各学科の学びとつながっています。



（出所：国土交通省「グリーン成長戦略（概説）」）

全学共通環境系科目群の開講（2023年度より拡充）

わが国は、2050年までに温室効果ガス排出を全体としてゼロにする目標を掲げ、グリーン成長戦略を策定しています。この目標を達成するためには、さまざまな対策技術の開発は無論のこと、技術の背景となる地球環境に関する基礎的かつ体系的な教育を受けた人材の育成が不可欠です。東北工業大学では、以下の3科目を2023年度入学生より全学生を対象に開講しています。

開講科目



グリーンテクノロジー

1年次後期 / 全学必修 / 1単位

カーボンニュートラルの実現にはどうすべきか？東北工業大学で何をどのように学ぶべきか？など、3学部8学科の教員が全ての学生に、成長が期待される「グリーンテクノロジー」について講義する。学生それぞれの専門の学びとの連続や連携について視野を深め広げる。



サステナビリティ入門

2年次前期 / 全学選択 / 2単位

環境問題に取り組んでいく上で必要とされる基礎的な知識、考え方を学ぶ。特に「持続可能な開発」の理念とそれを実践するための「持続可能な開発目標（SDGs）」の背景にある生態学的・システム論的な視点を身につけることで、目標群の相互関係を理解・意識しながら統合的に考え、目標の達成に向け取り組める人材になる。



地球環境と諸問題

2年次後期 / 全学選択 / 2単位

地球環境問題を理解する上で必要な、自然科学的・社会的背景を知り、国際社会の一員として解決に向けた取り組みに貢献する意識を持つようにする。地球全体または広範な部分に影響をもたらす地球環境問題を取り上げ、様々な問題が生じている背景と解決に向けた取り組みについて学ぶ。

受講について

- 授業は、オンライン（WebClass）にて行います。
- 授業内容詳細は、シラバスにて確認してください。
- 履修登録方法は、Web 履修登録マニュアルを確認してください。

（お問合せ）
八木山キャンパス教務学生課 gaku@hitech.ac.jp / 長取キャンパス事務局 nagamachi@hitech.ac.jp

図1：高大連携講座 内容

6. 令和6年度 第2回
みらい東北高校生プレサミット

名 簿

《AL ネットワーク委員》

(敬称略)

委員	氏 名	所 属 ・ 役 職
運営指導委員	長 田 晃 明	宮城県 総務部 私学・公益法人課 副参事
運営指導委員	青 山 勝	東北大学 教育・学生支援部 特任教授
運営指導委員	中 澤 宏 一	金沢大学附属特別支援学校 校長
検証委員	北 島 みどり	ゆずりは法律事務所 弁護士
検証委員	大 竹 裕 貴	ベネッセコーポレーション東北支社 学校事業統括責任者
カリキュラム アドバイザー	中 島 夏 子	東北工業大学 総合教育センター 准教授

《助言者》

氏 名	所 属 ・ 役 職
辛 島 彰 洋	東北工業大学 工学部 電気電子工学科 教授
花 田 亜 弥	株式会社Jバイオフーズリサイクル 管理室
長 門 紀穂子	株式会社河北新報社 防災・教育室
櫻 井 寛 也	株式会社日本旅行東北 営業統括部 担当部長
島 田 潤 悦	JICA 東北 市民参加協力課

《連携校》

学校名	役職等	氏 名	備 考
八戸工業大学第二高等学校	教諭	田 代 誠	
聖霊学園高等学校	教諭	工 藤 啓 之	
	教諭	福 原 知 恵	
盛岡白百合学園高等学校	教頭	菅 原 浩	
	教諭	成 田 奈 穂	
東北文教大学山形城北高等学校	専任講師	細 野 敏 明	
	教諭	菊 地 めぐみ	
福島成蹊高等学校	教諭	水 谷 朋 之	
	教諭	鈴 木 翔 馬	
宮城県仙台向山高等学校	教頭	佐々木 良 彦	
	主幹教諭	早 坂 晴 子	
宮城県仙台東高等学校	教頭	曳 田 雅 史	
	主幹教諭	渡 邊 哲	
	教諭	鈴 木 望	
	教諭	佐 山 桐 子	
宮城県泉高等学校	教頭	関 口 聡	
	教諭	谷 島 しのぶ	
国立臺南高級商業職業学校 (National Commercial Vocational Senior High School)			On Line 参加
台北市立大理高級中学校			On Line 参加

《協力校》

学校名	役職等	氏 名	備 考
金沢大学附属高等学校	教諭	金 森 久 貴	
山梨県立甲府第一高等学校	教諭	秋 山 尚 克	
	教諭	川 崎 義 碩	
宮城県仙台二華高等学校	校長	佐 藤 弘 人	
	教諭	秋 場 聡	

《拠点校》

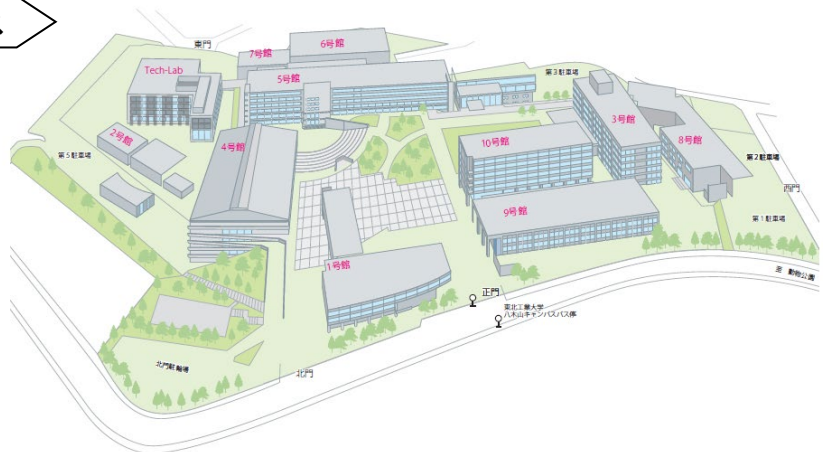
学校名	役職等	氏 名	備 考
仙台城南高等学校	校長	伊 藤 俊	
	教頭	水 戸 良 広	
	教頭	遠 藤 吉 夫	
	事務長	尾 上 智 宏	
	主幹教諭	脇 坂 晴 久	
	主幹教諭	鈴 木 理 恵	
	教諭	相 澤 茂 紀	
	教諭	千 葉 俊 哉	
	教諭	藤 井 久 美	
	教諭	表 潤 一	
	教諭	高 橋 和 輝	
	事務主任	大 學 麻 子	
	事務主任	伊 藤 まり子	
	事務職員	佐 藤 ひなた	

タイムスケジュール

時 間	内 容	場 所
9:00 ～ 9:30	○受付 ※学校毎に引率教員が受付し、9号館3階937教室へ移動してください。	9号館1階入口
9:30 ～ 10:00	○開会行事 1) 開会宣言 八戸工業大学第二高等学校・・・橋詰 莉桜 2) 開会のあいさつ 仙台城南高等学校 校長 伊藤 俊 国立臺南高級商業職業学校 校長 林 聡明 3) 生徒実行委員長挨拶 仙台城南高等学校・・・・・・山田 舞桜 4) 出席者紹介、参加校紹介 仙台城南高等学校 教頭 遠藤 吉夫	9号館3階 937 教室 tohtech MEMORIAL HALL
10:00 ～ 10:30	○全国高校生フォーラム成果発表 『The first step in supporting Young Carers』 仙台城南高等学校 普通科総進コース1年 阿部 結衣 ・ 大泉 春菜子 中村 太誠 ・ 橋本 悠仁	
	休憩・会場移動	
10:40 ～ 12:00	○分科会Ⅰ 探究活動成果発表 ① 科学 A・・・・・・913教室 科学 B・・・・・・912教室 ② 環境 A・・・・・・915教室 環境 B・・・・・・914教室 ③ 文化・教育 A・・・・922教室 文化・教育 B・・・・921教室 ④ まちづくり A・・・・924教室 まちづくり B・・・・923教室 ⑤ 国際理解 A・・・・935教室 国際理解 B・・・・934教室	9号館1～3階 各教室
12:00 ～ 13:00	昼食・休憩	9号館 各教室
13:00 ～ 14:30	○分科会Ⅱ ワークショップ（アイディア作りと発表） ① 科学・・・・・・913教室 ② 環境・・・・・・915教室 ③ 文化・教育・・・・922教室 ④ まちづくり A・・・・924教室 ⑤ 国際理解 A・・・・935教室	9号館1～3階 各教室
	休憩・会場移動	
14:40 ～ 15:45	○ワークショップ成果物アイディア代表発表 ※各グループ代表高校生からアイディア発表 ※各助言者より講評	9号館3階 937 教室 tohtech MEMORIAL HALL
15:45 ～ 15:55	○全体講評 東北工業大学 総合教育センター 准教授 中島夏子 先生	
15:55 ～ 16:00	○閉会宣言 1) 閉会宣言 宮城県泉高等学校・・・・・・西城 悠斗	

会場図

東北工業大学 八木山キャンパス



全体会

本部

国際 A

国際 B



3F

生徒実行委員 まちづくり A まちづくり B 文化・教育 A 文化・教育 B



2F

環境 A

環境 B

科学 A

科学 B



1F

『The first step in supporting Young Carers』

仙台城南高等学校 普通科総進コース1年

阿部 結衣 ・ 大泉 春菜子
中村 太誠 ・ 橋本 悠仁

ヤングケアラーを支える第一歩

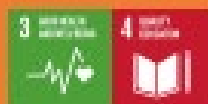
私たちは、ヤングケアラーの早期発見とその問題の認知度向上を目的として NPO 団体と協力し「ヤングケアラー診断サイト」を作成しました。このサイトを活用して児童館や地域の小中学校で行ったヤングケアラーに関する授業の様子を紹介します。また、授業の実施を通じて得たフィードバックをもとに診断サイトを改良し、より多くの子どもたちが自身の状況を正確に把握し適切な支援を受けられるようになった点についても報告します。

The First Step in Supporting Young Carers

In collaboration with a non-profit organization, we have developed the Junior Caregiver Diagnostic Website with the aim of facilitating the early identification of young carers and raising awareness of the challenges they face. This presentation will detail the application of the website in educational programs of young carers, conducted at children's centers as well as local elementary and junior high schools. Furthermore, we will present findings on how feedback obtained through these classes informed the enhancement of the diagnostic website, thereby enabling a greater number of children to better recognize their circumstance and access appropriate support.

J. The first step in supporting Young Carers [7]

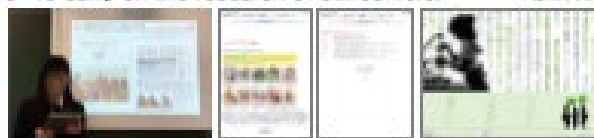
Sendai Johanna High School



Introduction

[How we started our activities]

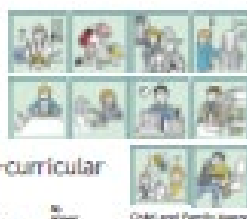
- To carry on the research of our seniors.



- To build a place where children feel safe to seek advice.
- To support those who stay silent and don't realize they are Young Carers.

[What is a Young Carer?]

- Children under 18 taking on adult-like responsibilities, such as household tasks and family care.
- Caregiving and housework can hinder their studies, extra-curricular activities, and future hopes.
- Young Carers are often unaware they are Young Carers. And even if they are aware of it, it is difficult to talk to those around them.



Conclusion

[Through activities]

- We deepened our understanding of Young Carers by teaching junior high students.
- We realized even high school students can lead educational activities.

[Next]

- Hold more classes in various locations.
- Continue raising awareness about Young Carers.

Proposals for the future

[Proposal 1]

Incorporate lessons on Young Carers into junior high and high school curriculum.



Raise awareness and establish Young Carers as general knowledge.

[Proposal 2]

Create a support community led by high school students.



Make it easier for Young Carers to seek advice.
Connect Young Carers with support groups.

Activities and Achievements

[Activity 1 Interview]

Interviewing NPO Asuiku about the situation and challenges Young Carers face.



[Activity 2 The Class]

Teaching a lesson to junior high school students. Lesson Content

Introduction

Introduced Young Carers and their challenges.

Awareness

Used a questionnaire to show relevance.

Support Tips

Shared support methods through a quiz.

Role-Play

Students participated in role-play.



[Achievement 1]

What we learned about Young Carers helped us reflect on their needs and consider future support measures.

Doing housework is not bad in itself, so avoid dismissive expressions about being a Young Carer.



NPO Asuiku staff

[Achievement 2]

We helped junior high school students understand about Young Carers and increased their awareness of the issue.



Junior high school students

I am glad to learn how to talk to people who might be Young Carers.



We asked "Has your interest in Young Carers increased?"



City officials

The class was interesting because it was taught by high school students, offering ideas unique to their perspective.

Special Thanks

NPO Asuiku



Meiwa Juku

Meiwa Juku



明和塾

分科会Ⅰ ①科学 A

助言者	辛 島 彰 洋 (東北工業大学 工学部 電気電子工学科 教授) 千 葉 俊 哉 (仙台城南高等学校；理科)
会 場	913 教室
会場責任者	千 葉 俊 哉 (仙台城南高等学校)
司会進行	後 藤 菜 月 (宮城県泉高等学校)
記 録	柿 沼 優 杏 (聖霊学園高等学校)

《次第》

※ = ON LINE

1	○司会自己紹介・講師紹介 グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション
	1)『鮭はなぜ帰ってこなかったのか』 盛岡白百合学園高等学校 齋藤理沙(1年)
	2)『ウミネコ繁殖地 八戸燕島の調査を通じて』 八戸工業大学第二高等学校 田中蒼空(2年) 高橋茜(2年) 高谷凜(2年)
	3)『電柱に夢中、主に無電柱』 仙台城南高等学校 高橋暁史(2年) 天間将伍(2年) 富樫礼生(2年) 高木悠斗(2年)
	4)『愛着不安と SNS 依存との関連について』 宮城県仙台東高等学校 阿部莉奈(2年)
3	○講評

1) 『鮭はなぜ帰ってこなかったのか』

盛岡白百合学園高等学校

私の住んでいる岩手県盛岡市には、鮭が遡上してくる中津川という川がある。
2023 年の秋、鮭が帰ってこなかったという衝撃的なニュースを見た。その原因と解決策を探るべく地域の方、漁業関係者、研究者にお話を伺い、私達高校生へのメッセージをいただいた。身近な自然に関心を持ち、結論が出ていない課題から逃げずに考え続けること、それを自分達の言葉で伝え、共有し続けること、それが私達高校生に出来ることだ。

2) 『ウミネコ繁殖地 八戸燕島の調査を通じて』

八戸工業大学第二高等学校

青森県八戸市燕島は、ウミネコ繁殖地として大正 11 年(1922 年)に天然記念物に指定されている。本校では、令和 4 年から総合的探究テーマとして、ウミネコの繁殖活動についての調査として、営巣数、産卵数、ヒナ数を継続的に計測している。今回は、産卵開始時期と気温との関係、巣立ち率と近海の漁獲量、営巣場所と巣立ち率の関係などについて考察する。

3) 『電柱に夢中、主に無電柱』

仙台城南高等学校

私たちは台湾に修学旅行に行って電柱がないということに気付いた。そこから無電柱化に興味を持ち、日本で行っている無電柱化計画、日本と海外で比較してなぜ無電柱化が行われるのか、メリット、デメリットなどを実際に国土交通省の方から教えてもらい工事現場や無電柱化の構造を見学した。

4) 『愛着不安と SNS 依存との関連について』

宮城県仙台東高等学校

私は「愛着不安と SNS 依存との関連」をテーマに研究を行いました。近年、デジタル化が進む中、若者の SNS 利用が増え、その悪影響が懸念されています。愛着不安とは、直接的に相手と関わるものであり、これを SNS 依存の原因と考え、愛着不安をもつ人ほど SNS に依存しやすいという仮説を立てました。愛着不安をもつ人の、他者からの否定的な評価や抱えている対人関係の不安などを減らすことが重要だと考えます。

Memo

<質疑応答>

1)

- ・「過度な放流がなぜ鮭の帰ってこない理由になるのか」
⇒川には魚が帰ってこられるキャパシティがあるから。
- ・「帰ってこない理由として二つの意見があったが、斎藤さんはどちらの意見のほうだと思うか」
⇒自分は進化のほうに納得できるが、どちらの方法も試してみてから考える。やってみなければわからないので、行動してから考えたい。
- ・「次の研究は何をしたいか」
⇒中津川のほかの魚の問題を調査したい。

2)

- ・「フェンス内外のウミネコの数の差異は何が原因なのか」
⇒ウミネコの縄張り争いなどによって差異が生じる。
- ・「きつねは特定の場所にたくさんいたのはなぜ？」
⇒きつねの移動経路にかかわる場所はたくさんいた
- ・「観察の仕方は？」
⇒毎週日曜に観察していった
- ・「次の研究では何を調べたいか」
⇒やませによってウミネコの雛がなくなることがある。やませの寒さの影響について調査したい。

3)

- ・「先進国と発展途上国以外での関係はあるのか」
⇒電力が発展とともに必要になってきた国は無電柱率が高い。インドなど急激に発展してきて電力が必要になってきた国は、コストが低く、時間がかからない電柱を立てたことによって、無電柱化には至っていないと考えられる。
- ・「無電柱率が高い国の都心部でないところの現状は？」
⇒データはないが、都心部中心に無電柱化が進められている。
- ・「災害などによる地盤のずれなどによって、電力が行き届かなくなるのでは？」
⇒無電柱によって電柱が倒れてくるなどの命の危機はなくなるため、命のリスクを考慮した際、無電柱のほうが良いと考える。

4)

- ・「環境が変わることによってまた変化するのではないか」
⇒世代別だけでなく、世代の中でも区別して調査していきたい
- ・「愛着不安の有無を判別するには？」
⇒文献には質問して調査したと書かれていた
- ・「スマホ依存にならないためにできることは？」
⇒強制的に使わないようにする。

<助言・講評>

- ・次の活動内容や調査したいことなど明確であって良い。

<記録者のまとめ>

「科学 A」の分科会では、生物や人間の営みでみられる身近な問題などに関する探究活動の発表が行われた。その後は、活発な質疑応答や意見交換が行われ、全体として有意義な探究活動発表の場となった。

分科会Ⅰ ①科学B

助言者	田代 誠 (八戸工業大学第二高等学校；理科) 細野 敏明 (東北文教大学山形城北高等学校；理科)
会場	912 教室
会場責任者	千葉 俊哉 (仙台城南高等学校)
司会進行	照井 海羽 (聖霊学園高等学校)
記録	吉田 光輝 (宮城県仙台向山高等学校) [草薙 奏 (仙台城南高等学校)]

《次第》

1	○司会自己紹介・講師紹介 グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション
	1)『医療業界での社会問題がもたらす影響と対策』 宮城県仙台向山高等学校 立花成実(2年) 落合溪翔(2年) 浅野真穂(2年) 佐藤吏朗(2年)
	2)『時間の感覚と人生の経験～歳を重ねるにつれて感じる時間の速さ～』 盛岡白百合学園高等学校 田沼友結(1年)
	3)『訪問看護から考える看護の未来』 宮城県仙台東高等学校 澤口圭介(2年)
	4)『脳死を法律で死と認めるのに意味はあるのか』 仙台城南高等学校 新沼恵瑠(1年) 山下悠(1年)
	5)『日本における食糧問題』 福島成蹊高等学校 大石 藍(1年)
	6)『海岸林をうまく利用するためには』 宮城県泉高等学校 宇津陽生(1年) 西城遥斗(1年) 日野琥大朗(1年) 平磯朝大(1年)
3	○講評

1)

『医療業界での社会問題がもたらす影響と対策』

宮城県仙台南高等学校

日本の医療は日々発展を続けている。しかし、その一方で多くの問題を抱えている。今回の発表では近年、注目されつつある「ゲノム医療」に焦点をあて、ゲノム医療とはなにか、具体的にどのような問題点があるのか。並びに、私達、医療を享受する国民にとってどのような影響をもたらすのか。そしてその問題を解決するためにはどう対応すればよいのかを東北メディカル・メガバンク機構での講義と調べ学習を通して考察する。

2)

『時間の感覚と人生の経験～歳を重ねるにつれて感じる時間の速さ～』

盛岡白百合学園高等学校

高校生になり時間の経つスピードが今までよりも早く感じ子どもの頃は全然感じたことがなかったためこの差は一体何なのか疑問に思った。そこでインターネットを活用し経験や感情が時間の感覚に影響を与えることがわかった。人生をより主体的に充実したものにするには時間をどう感じるかを考えながら生きることが大切だと思った。

3)

『訪問看護から考える看護の未来』

宮城県仙台東高等学校

近年、日本の医療業界における人手不足が深刻化し、特に看護職に携わる人の不足が急激に進んでいます。これは日本に見られる超高齢化社会が影響しており、看護師の供給が高齢者の需要を下回っている現状があるからです。今回、看護職で最も人手不足である訪問介護にスポットライトを当て、訪問介護業界の現状を紐解くことで、看護業界全体の今後を考えていこうというのが、私の探究活動です。

4)

『脳死を法律で死と認めるのに意味はあるのか』

仙台南高等学校

医療分野の課題を調べる中で、脳死と臓器移植の関わりと日本の脳死に対する考え方について、関心を持ちました。脳死と臓器提供のつながりを考える中で、海外の脳死に対する考え方、残された家族の思い、延命治療の現状など様々な面からも文献や Web を使って調査し、自分たちなりにこれからの脳死の捉え方をまとめました。この探究をきっかけに脳死や臓器移植の現状が広まってくれたらと思います。

Memo

<質疑応答>

1)

- ・「ゲノムをすることでどんな利点があるのか」

⇒自分の体質を理解したり、癌のなりやすさを知ったりすることができる。ただ、ゲノム治療などは高額な治療費がかかるため、行っている人は少ないのが現状である。

2)

- ・「時間の流れに違いとして代謝が影響しているということについてもっと詳しく知りたい」

⇒子供などは、短い時間で多くのことが蓄積され、代謝が激しくなり、脳への信号が早くなるため長く感じている。逆に短く感じるのは、時間を刻んで生きているため代謝が少なく、長い経験の中の一つなのであつという間に感じている。

3)

欠席

4)

- ・「脳死判定などで医療費が1日¥56,000～となるのはなぜか」

⇒脳死の診断判定が遺族の関係やそもそもの判定が難しいため、1日で決まることもあればそれ以上かかることもあるため、平均としてそのように書かれている。

<講評・助言>

- ・医療業界など世の中にはたくさんの間違った情報で溢れている中で、現地に行き、実際に働く人たちに話を聞くなど、自分たちの調べたいことに対する理解を深めようとしていた。全体として「ゲノム治療」「時間」「脳死」というように、一つのことに深く掘り下げるなど、とても意欲的な探究発表だった。今の現状としてAIをうまく活用していくべきだと言われている中で、人間にしかできないことがたくさんある、そう実感することが多くあった。

<記録者のまとめ>

「科学B」の分科会では、「ゲノム治療」や「脳死」など、主に医療に関する探究活動の発表が行われた。また、時間の感覚に関する発表では「代謝」が関係していることが取り上げられるなど、全体として人間の体内に関するテーマが共通していた。

当日は欠席者がいたため発表グループの数は減ったものの、質疑応答も活発に行われ、有意義な探究活動の発表の場となった。

① 科 学							
A 班	田中蒼空	八戸工大第二	2 年		B 班	天間将伍	仙台城南 2 年
A 班	高木悠斗	仙台城南	2 年		B 班	高橋茜	八戸工大第二 2 年
A 班	落合溪翔	仙台向山	2 年		B 班	立花成実	仙台向山 2 年
A 班	澤口圭介	仙台東	2 年		B 班	山下悠	仙台城南 1 年
C 班	高橋暁史	仙台城南	2 年		D 班	富樫礼生	仙台城南 2 年
C 班	高谷凜	八戸工大第二	2 年		D 班	阿部莉奈	仙台東 2 年
C 班	浅野真穂	仙台向山	2 年		D 班	齋藤理沙	盛岡白百合 1 年
E 班	佐藤吏朗	仙台向山	2 年				
E 班	田沼友結	盛岡白百合	1 年				
E 班	新沼恵瑠	仙台城南	1 年				

<テーマ・課題>

◎ テーマ：『2040 年の日本について』

○ 課題例

課題①：高齢者の一人での活動が困難になる。

課題②：火力発電などによって大気汚染が進む。

課題③：高齢化によって地域の医者の負担が大きくなる。

課題④：高齢化によって医療や介護に従事する人が少なくなり、介護・医療に従事している人の負担が大きくなる。

課題⑤：高齢化などによってホームヘルパーの減少がみられる。

<改善策・解決策のアイデア>

○ アイデアの例①：「高齢化」

AI の活用によって高齢者が一人で行動できるようサポートする。自分たちができることは機械になれるまで今あるものでサポートする。

○ アイデアの例②：「ご当地クリーンエネルギー」

市場に出せない食品を活用してエネルギーを作る。それによって食品ロスも解決できる。

○ アイデアの例③：「高齢化と健康」

AI の活用での労働改善やリモートなどによるコミュニティの創生を図る。自分たちができることは自分が人とのかかわりを大切に、特に身近な家族とのかかわりを大切にしていき、健康に気を遣う。

- アイデアの例④：「おじいちゃんムキムキ大作戦」
低価で着やすいパワードスーツを作る。自分たちにできることとしては、身近にいる高齢者を尊敬してかわりを持つ。
- アイデアの例⑤：「介護」
AI と人間の二人体制でホームヘルパーの仕事を行う。AI に様々な機能を搭載して、ホームヘルパーの仕事の負担を減らす。今の自分たちにできることはホームヘルパーの具体的な仕事を知ること。

< 助言・講評 >

- たくさんのアイデアが出ていてよいと思った。明るい未来にするためにもっと身近なことから考えてみるのも良いかもしれない。

< 代表チーム発表スライド >

第2回 みらい東北 高校生プレゼサミット 発表資料 

午後の部 生徒ワークショップ

みらい東北2040年の『高齢者』

D班

1. 私たちが考えるみらい東北【アイデア提案】 

💪おじいちゃんムキムキ大作戦



第2回 みらい東北 高校生プレゼサミット 20250315

2. 私たちが考えるみらい東北【ストーリーボード】 

想定される困りごと 高齢化 人手不足 介護	アイデアによる具体的な解決のイメージ パワードスーツを必要に応じて支給、販売 
アイデアによる具体的な解決のイメージ補足 高額装着に手間 → 企業が支給、部分ごとセンサー付き	解決によるハッピーな様子 高齢者が働きやすくなる 働くことで認知症防止に 介護の負担が減る 孫と遊べる 

第2回 みらい東北 高校生プレゼサミット 20250315

3. アイディアに向けて自分たちに出来ること 

自分の身近の高齢者を尊敬する

第2回 みらい東北 高校生プレゼサミット 20250315

分科会Ⅰ ②環境 A

助言者	花 田 亜 弥 (株式会社 J バイオフードリサイクル 管理室) 藤 井 久 美 (仙台城南高等学校；家庭科)
会 場	915 教室
会場責任者	藤 井 久 美 (仙台城南高等学校)
司会進行	佐々木 美 空 (八戸工業大学第二高等学校)
記 録	大 友 璃 音 (宮城県仙台東高等学校)

《次第》

※ = ON LINE

1	○司会自己紹介・講師紹介 グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション
	1)『現代の食問題』 宮城県仙台南高等学校 百武果奈(2年) 草野瑞季(2年)
	2)『二酸化炭素の排出を削減するモノ作りとは?』 盛岡白百合学園高等学校 大原実乃莉(2年)
	3)『ゴミはこれからもゴミなのか!?』 東北文教大学山形城北高等学校 八鍬七奈子(2年) 渡辺美七海(2年) 鈴木拓真(2年)
	4)『日本のゴミ問題の現状と解決策』 仙台城南高等学校 大庫樹里(2年) 三原叶和(2年) 齋田梨心(2年)
3	○講評

1) 『現代の食問題』

宮城県仙台南高等学校

近年、生活習慣病患者は増加傾向にあり大きな問題となっている。この問題を引き起こす原因の一部である糖質や脂質はどう適切に摂ればよいか。また、インターネット上に載せられているたくさんの食事法をどのように見極めて実践するか。書類や大学の先生の講義、そこから学んだ「食」の最前線に立つ管理栄養士の仕事内容などを通して、「食事」の視点から対策法や自分たちができることを考察する。

2) 『二酸化炭素の排出を削減するモノ作りとは?』

盛岡白百合学園高等学校

人の行動次第で、本当に環境問題を解決することができるのか。良い環境を作るには、私たち人間の行動だけでなく、人間が作り出す「モノ」も大切である。単純にモノ作りを行うのではなく、製品が開発されるまでのプロセスや製品そのものに注目することで、環境に配慮しながらモノを制作していくことができ、それこそが、環境問題を解決していく最善策である。環境を変えていくには、人間とモノがそれぞれが持っている力を合わせていくことが大切であり、私は将来、人間とモノとが繋がることのできる製品を開発していきたい。

3) 『ゴミはこれからもゴミなのか!?』

東北文教大学山形城北高等学校

ゴミ問題をテーマに、河川や街中に落ちているゴミを減らしたり、リサイクルする方法を探究する。ポイ捨てやゴミが発生する原因をアンケートや調べ学習を通して深掘りするだけではなく、解決策をいくつか提案する。

その中の一つである、究極の質問 BOX を設置することにより、ポイ捨てやゴミ問題が解決するのかを検証した。

4) 『日本のゴミ問題の現状と解決策』

仙台城南高等学校

最近街中にゴミが落ちていることが多い。そのことから、これを改善するためにどのような取り組みがあるのかを調べた。日本は世界的に見てゴミ排出量が多い国であるため、ゴミの発生自体を減少させることが必要だと考えた。その具体策として、台湾の対策である「ホテルのアメニティ」の廃止や「ゴミ置き場」をなくすなどの取り組みを日本も取り入れることが必要になってくる。

Memo

<質疑応答>

1)

・糖質制限のリスクは？

⇒糖尿病のリスクを減少させることができるが、ストレスの増加にもつながる。

・肉類を摂取しないのは健康に良いのか？⇒摂取しないのではなく、頻度を減らす。

・管理栄養士になぜ興味を持ったのか？

⇒スポーツと栄養のことについて学びたいと思っていた時、スポーツ管理栄養士の動画を見て、人々の健康をサポートしたいと思い、目指すようになった。

2)

・水素を用いたコンタクトレンズについて、どのような会社や企業に入ってその事業を行いたいのか？

⇒まだ分からないが、大学では研究や実験を繰り返しながら考えていきたい。

・水素を用いたモノづくりについて、現在、商品化されているものは他に何かあるのか？

⇒まだそのような情報がないので分からない。

3)

・フェスのグッズ、環境に優しい素材は何から作られているのか？

⇒原料や素材は分からないが、作る過程で環境に配慮した作りになっている。

・イギリス発案のたばこを利用した投票箱は、他のどの国で行っているのか？

⇒韓国、マケドニアなどの 38 カ国で行われている。

・他にどのようなものが水平リサイクルできるのか？

⇒現在はアルミ缶の水平リサイクルを行っているが、技術が高くないとできないため、今後は他の物でもできるように努力していきたい。

・山形では他にどのようなリサイクルを行っているのか？⇒水平リサイクル以外は分からない。

4)

・なぜ日本と台湾で比較をしたのか？⇒台湾に修学旅行で行ったから。

・ホテルのアメニティーを廃止するとあったが、具体的にどのアメニティーが影響を与えているのか？

⇒全てのアメニティーが関わっている(使い捨ての商品をなくす)。

・「エリーゼのために」を聞いてゴミを捨てるとあったが、その時に捨てることができなかったら、もう捨てることはできないのか？

⇒捨てることができなかった人は、回収車が定期的に回っているから、その時にゴミを捨てる。

・町のごみ問題でゴミ箱をなくすとあったが、食べ歩きの時どうするのか？

⇒調べていないので分からない。

<助言・講評>

- 1) 簡潔で分かりやすかった。食事の成分やメニューの提示をすとなおよい。
- 2) CO₂ に着目しているのがよかった。他の温室ガスについても調べるとよい。水素ホテルがあることからその他の水素を用いた具体例があると分かりやすくなる。
- 3) 水平リサイクルはいろいろな企業で行っているが、どうしたら今よりもっと分別が進んでいくのか、ゴミを分別した後そのゴミがどこに行くのかを調べるとなおよい。
- 4) 日本以外の国に注目していたのが面白い視点だなと思った。台湾と同じことがなぜ日本でできないのか、また、日本でやるならどうしたらよいのかを調べるとなおよい。

<記録者のまとめ>

環境 A の分科会では、「現代の食問題」や「日本のゴミ問題」など主に身の周りの環境問題についての探究活動の発表が行われた。その後の質疑応答においても、積極的な質問と意見交換がなされ、全体として大変に有意義な探究発表の場となった。

分科会Ⅰ ②環境 B

助言者	渡 邊 哲 (宮城県仙台東高等学校；理科) 水 谷 朋 之 (福島成蹊高等学校；理科)
会 場	914 教室
会場責任者	藤 井 久 美 (仙台城南高等学校)
司会進行	小 林 橘 平 (宮城県仙台向山高等学校)
記 録	白 川 実 音 (宮城県仙台東高等学校)

《次第》

1	○司会自己紹介・講師紹介 グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション
	1) 『AI で人間を再現するには。』 宮城県仙台向山高等学校 長田恭平(2年) 阿部寛史(2年) 高橋荘太(2年) 千葉律人(2年) 本間太晟(2年)
	2) 『Web 業界の仕事は AI によって減っていくのか』 仙台城南高等学校 遊佐寧々(2年)
	3) 『DX で環境問題対策』 仙台城南高等学校 服部葵(2年) 内田正悟(2年) 佐藤和也(2年)
	4) 『未来をデザインするボトル』 盛岡白百合学園高等学校 小松瑞稀(1年)
3	○講評

1) 『AI で人間を再現するには。』

宮城県仙台向山高等学校

AI の進歩は著しいが、現状では AI は人間から学習したことしかできない。だがしかし、AI は発想力では人間には劣るが日常会話程度であれば大体でき、完全に人間には及ばないがある程度人間に近い活動が可能であることもわかった。そこで私達は現状の技術では AI を使ってどのくらい人間を再現することができるのかを様々な方法で探求した。

2) 『Web 業界の仕事は AI によって減っていくのか』

仙台城南高等学校

テクノロジーの発展が進む現在、AI の進化も加速している。Web 業界においては、従来、人間の技術のみで行われてきたのに対して、近年では AI も活用されるようになった。そんな中、AI の発展に伴い、Web 業界の仕事がなくなってしまうのではないかという意見をよく耳にする。そこで、AI が Web 業界の仕事にどのように活用されているのか調べ、実際問題、AI は仕事を奪ってしまうのかどうか考察することにした。

3) 『DX で環境問題対策』

仙台城南高等学校

近年深刻になっている環境問題に何か対策を立てられないかと考え、今回 DX での対策を思いつきました。DX とはデジタル技術を社会に浸透させ、人々の暮らしを良いものへ変革することです。このデジタル技術を環境問題にうまく活用出来ればエネルギーの効率化など、環境問題への対策が出来ると考えました。

4) 『未来をデザインするボトル』

盛岡白百合学園高等学校

近年、プラスチックごみの増加が深刻化しており、環境汚染が進んでいます。この問題の改善の一步になれるよう「マイボトル制作イベント」の開催を提案します。参加者がオリジナルマイボトルをデザインし、楽しみながら取り組めるイベントです。制作したマイボトルを使用することで、ごみ削減への意識を高め、持続可能なライフスタイルを促進します。地域住民や学生が気軽に参加でき、多くの人が環境問題を身近に感じ、行動することを目的とします。

Memo

<質疑応答>

1)

・AIを身近なもので使うとしたら、具体的にどのようなものが挙げられるか。

⇒一人暮らしの高齢者の話し相手をするロボットや、体の不自由な人が快適に動きやすくする機械などがある。

2)

・AI技術が向上していく中で、私たちの倫理観やスキルについて考えていることはあるか。

⇒AIは必ずしも正しいわけではないので、見極める力が必要である。

3)

・二酸化炭素をためる目的がないとき、どう保管するのか。

⇒再利用する目的が明確になるときまで貯蔵する。

4)

・ペットボトルを削減すると、二酸化炭素の量がどのくらい変わるか教えてほしい。

⇒まだ調べ切れていないので、後日調べてみたい。

・ペットボトル削減に向けて、コンビニに売られている商品はどのように解決していくのか。

⇒必ずしもすべてを制限するのではなく、徐々に対策を行うべきである。

<助言・講評>

後半に進むにつれて、質問と意見交換が積極的に交わされるようになり、本来の探究活動ができあがってきたと思われる。情報を集めるだけでなく、そこから課題を見つけ、深く掘り下げて考えを深めるようにしてもらいたい。今後、先が見えない世の中で、自分なりの意見や考えをもつことが重要になってくる。今回の経験を是非今後の生活に活かしてほしい。

<記録者のまとめ>

「環境B」の分科会では、これからのAIとの共存や環境問題の取り組み方など、どのようにテクノロジーや自然エネルギーを活用して課題を解決していくべきか、探究活動の発表が行われた。その後は徐々に質疑応答が活発に交わされ、参加者たちの考えが深まっていった。

分科会Ⅱ ワークショップ

② 環 境									
A 班	大庫 樹里	仙台城南	2 年		B 班	天間 将伍	仙台城南	2 年	
A 班	齋田 梨心	仙台城南	2 年		B 班	高橋 茜	山形城北	2 年	
A 班	渡辺 美七海	山形城北	2 年		B 班	立花 成実	仙台向山	2 年	
A 班	阿部 稔紀	仙台向山	2 年		B 班	山下 悠	仙台向山	2 年	
C 班	服部 葵	仙台城南	2 年		D 班	遊佐 寧々	仙台城南	2 年	
C 班	千葉 律人	仙台向山	2 年		D 班	阿部 寛史	仙台向山	2 年	
C 班	草野 瑞季	仙台向山	2 年		D 班	八鍬 七奈子	山形城北	2 年	
C 班	小松 瑞稀	盛岡白百合	1 年		D 班	佐藤 和也	仙台城南	2 年	
E 班	内田 正悟	仙台城南	2 年						
E 班	高橋 荘太	仙台向山	2 年						
E 班	大原 実乃莉	盛岡白百合	2 年						

「環境」の分科会では、2040年に向けた新しい食品廃棄物の利活用について考えを深めた。

<テーマ・課題>

◎ テーマ：『2040年に向けた新しい食品廃棄物の利活用について』

○ 課題例

廃棄物が大量に発生している。

野菜嫌いな若者が多い。

過疎化による環境への影響。

<改善策・解決策のアイデア>

○ アイデアの例

A「動物を利用した農業を作ろう」

→廃棄物を虫や微生物に食べさせ、そこから新しい食べ物を作る。

B「売れ残りをゼロにしよう」

→売れ残りを半額以下で買えるようにする。

具体的な内容としては、自動販売機での販売。

C「廃棄物ペーパー」

→廃棄物を紙にして製品として再利用する。

D「野菜ペーパー」

→紙やクレヨンをつくる。=子供が間違えて口にしてみても安全

E「コンクリート」

→建築材料として使う

<助言・講評>

- 難しい課題ながらも短い時間のなかで、若者らしい、いいアイデアを考えてくれたと感じる。

<代表チーム発表スライド>

第2回 みらい東北 高校生プレゼサミット 発表資料

WWZ J.

午後の部 生徒ワークショップ

みらい東北2040年の『食品廃棄物の利活用』

A班

1. 私たちが考えるみらい東北【アイデア提案】

WWZ J.

- ・地球温暖化による環境の変化
- ・少子高齢化
- 食料が育たない、少なくなる
- ・動物を利用した農業をつくる

第2回 みらい東北 高校生プレゼサミット 20250315

2. 私たちが考えるみらい東北【ストーリーボード】

WWZ J.

想定される困りごと	アイデアによる具体的な解決のイメージ
高齢化 人手不足 介護	パワードスーツを必要に応じて支給、販売
アイデアによる具体的な解決のイメージ補足	解決によるハッピーな様子
高額 装着に手間 → 企業が支給、部分ごとセンサー付き	高齢者が働きやすくなる 働くことで認知症防止に 介護の負担が減る 孫と遊べる

第2回 みらい東北 高校生プレゼサミット 20250315

3. アイディアに向けて自分たちに出来ること

WWZ J.

美味しそうな見た目の昆虫食を知ってもらおう
昆虫を生かしたメニューを考える

第2回 みらい東北 高校生プレゼサミット 20250315

分科会Ⅰ ③文化・教育 A

助言者	長 門 紀穂子 (株式会社河北新報社 防災・教育室) 高 橋 和 輝 (仙台城南高等学校；社会)
会 場	922 教室
会場責任者	高 橋 和 輝 (仙台城南高等学校)
司会進行	二 瓶 知 樹 (福島成蹊高等学校)
記 録	黒 澤 理 子 (東北文教大学山形城北高等学校)

《次第》

※ = ON LINE

1	○司会自己紹介・講師紹介 グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション 1) 『不登校の人たちの生活に+αを』 聖霊学園高等学校 阿部日花里(2年) 猪田美羽(2年) 杉本莉子(2年) 明石日菜子(2年) 佐藤心咲音(2年) 2) 『生徒が持つ社会科への認識を一新する社会科学習ボードゲームの開発』 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 喜多 輝(1年) 3) 『人種差別』 宮城県仙台南高等学校 白井ノナ(2年) 大江 結(2年)【午後不在】 小林賢世(2年) 佐藤飛彩(2年) 峯岸日向子(2年) 【午後不在】 4) 『学校の先生になる』 仙台城南高等学校 山田舞桜(2年) 石川陽大(2年) 布田優菜(2年) 阿部凌久(2年) 榊原愛音(2年)
3	○講評

1) 『不登校の人たちの生活に+αを』

聖霊学園高等学校

不登校の生徒が感情を整理し、自己表現できる力を育むことを目的に、実態調査とカウンセラーの協力を得て、日記を使った支援方法を提案した。結果として「GROWING DAY BY DAY」という日記を作成し、自己理解を深める手助けができた。日記は不登校生徒に希望を与える有効なツールとして活用可能であるが、今後は実際に使用してもらい、効果を検証する必要がある。また、親子間のコミュニケーション促進のため、日記の改良も課題である。

2) 『生徒が持つ社会科への認識を一新する社会科学習ボードゲームの開発』

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校

この探究活動は小中学生が感じている学校の勉強の難しさや退屈さを軽減し、多くの生徒が楽しみながら積極的に学びに向かうことを目標としています。その手段として、生徒がハードルを感じにくい「ゲーム」に注目し、その中でもボードゲームを採用しました。近年重視される資料を読み取る力や表現力などを培えるようにしつつ、高いゲーム性を保持したものを目指し、開発に励んでいます。

3) 『人種差別』

宮城県仙台南高等学校

現在人種差別をなくすために人種差別撤廃条約や人種差別禁止法などの条約や法律が様々な国と地域で制定されている。しかし現状、人種差別はなくなっていない。人種差別はなぜ起こるのか。また、解決することはできるのか。解決するために私たちができることはあるのか。そして人種差別の定義とは何か。メディアや大学の講義、書籍などを通して考察する。

4) 『学校の先生になる』

仙台城南高等学校

私たちはフィールドワークを通して実際に話を聞き、教員になるために必要な事、求められる人材について学びました。教員とは未来を担う子供たちの人格の完成と、社会の一員としても認められる人を作る大事な仕事です。教育実習などを通し学校の教育力を構成する実践力を身につけることが大切だと実感しました。そのために、その基盤となる意欲・人間性は今から高めていくことができると感じました。

Memo

<質疑応答>

1)

- ・不登校の人達はチャレンジカードを継続できるのか。

⇒継続性は検証中

2)

- ・ボードゲームのターゲットは誰？

⇒小学6年生から中学3年生の子供達で、ボードゲームの内容はその年代の教科書を準拠している。

- ・ボードゲームは何人で対戦する？

⇒基本的に4人だが、クラス対抗モードやバトルモードなど様々な遊び方がある。

3)

- ・「人種差別」について、若い人達や身近にできる対策は？

⇒差別発言をしないようにお互いに注意し合う。人間の本能として、自分と違うものを拒絶してしまうため、それを理解し、考えて発言する事が大切。

4)

- ・教育の場がどのように良くなれば、教師になるというハードルが低くなると思うか？

⇒仕事の分担を図る。残業を無くす。ホワイトな職場にする。

<助言・講評>

- ・発表した内容を元にもっと学校ごとに交流や対話をしてほしい。

- ・今日の発表をブラッシュアップして次に繋げてほしい。

<記録者のまとめ>

「文化・教育A」の分科会では、「学校教育」や「人種差別」など主に若者や学生などに関する探究活動の発表が行われた。その後の質疑応答においても、積極的な質問と意見交換が行われ、全体として大変に有意義な探究発表の場となった。

分科会Ⅰ ③文化・教育B

助言者	福原知恵（聖霊学園高等学校；理科） 大江毅（宮城県仙台城南高等学校；理科）
会場	921 教室
会場責任者	高橋和輝（仙台城南高等学校）
司会進行	嶋貫今日花（宮城県泉高等学校）
記録	細谷翠幌（盛岡白百合学園高等学校）

《次第》

※ = ON LINE

1	○司会自己紹介・講師紹介 グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション
	1)『マレーシアについて』 福島成蹊高等学校 岡崎雄斗(2年) 今野郁哉(2年)
	2)『Education For Everyone～山梨県の在留外国人に対する、日本語教育の充実～』 山梨県立甲府第一高等学校 熊木遼介(1年) 川端一志(1年) 生原芽依(1年)
	3)『固定概念』 仙台城南高等学校 佐竹唯(2年) 高橋ひより(2年)
	4)『多文化共生へ』 宮城県仙台東高等学校 鈴木深結(2年)
3	○講評

1) 『マレーシアについて』

福島成蹊高等学校

1396年にスマトラ島（インドネシア）にマラッカ王国が成立、十五世紀から明国と朝貢貿易をはじめめる。その影響で海上貿易が栄え商人であるアラブ人やインド人からイスラム教が国教となった。十六～二十世紀にかけ4つの国の植民地となったが、1957年に独立をし、現在では東南アジアの主要国となっている。また、主に英国による植民地支配を経験した歴史からキリスト教やヒンドゥー教も多くみられる。

2) 『Education For Everyone～山梨県の在留外国人に対する、日本語教育の充実～』

山梨県立甲府第一高等学校

グローバル化が進む今、山梨県には年間1000人以上の外国人が移住してきています。しかし、県内には日本語教育・支援を行っている制度や団体が多く存在しているにも関わらず、それらが行き届いているとは言えないのが現状です。私たちは、山梨県において、日本語教育・支援を必要としている全ての外国人に「居場所」を提供すること、身近な日本人とのつながりを深めることを目指して、当事者の皆さんの声を大切にしながら探究活動を行っています。

3) 『固定概念』

仙台城南高等学校

私たちは台湾と日本のジェンダーについて比較し、疑問に思ったことや気づいたことをまとめ、今日本に必要な課題を考えました。今の時代は色んな服のスタイルがあり、男女問わず好きな服を着ることが重要だと思いますが、そこには固定概念の壁を感じました。そのため今、日本に必要なジェンダーについての課題や海外の取り組みをぜひ沢山の方に知って欲しいと思います。

4) 『多文化共生へ』

宮城県仙台東高等学校

私は、近年日本国内で促進されている「多文化共生」において私たちがすべきことについて発表します。日本での外国人の受け入れが加速していく中で、私たち子供の方がより多文化共生についての理解を示すべきだと考えました。そのために私が一番重要だと考えるのは、興味を持つことです。興味を持てば、自身で積極的に考えることができると思いました。自分に合った方法で多文化共生に触れてみましょう。

Memo

<質疑応答>

1)

・マレーシアの「ポンドック」や「モスク」を日本で活用するためには？

⇒若者が SNS で発信して興味を引く、ワークショップを行う。

・日本の祭りや工芸品がなぜ衰えたと思ったのか？

⇒地元での繋がりが薄いため、地域でのコミュニティが減った。

2)

・山梨には子供だけ以外にも、大人にもスポットを当てる場所はあるのか？

⇒市役所に施設がある。

3)

・どのような過程で偏見が生まれるのか？

⇒環境で変わるので、個性を出しやすい環境作りをする。

4)

・海外研修以外に校内で活動出来る場所はあるのか？

⇒委員会や国際交流が出来る。

<助言・講評>

・全体的に興味深い内容が多く、発表内容を自分の中に落とし込めている所はとても良い部分だった。

・探究活動をする際に現状を調べ、対象を絞って行動をすることが大切だと思う。調べていくうちにさらに気になった部分を深堀し、試行錯誤しながら行動出来たらさらに良くなる。また、小さな事でも良いので実践し、知ったことをこれからの生活に活かして周りに広めたり教えたりして欲しい。

<記録者のまとめ>

「文化・教育 B」の分科会では、教育の観点より「SDGs の観点から人との関わり方」を探究している人がいた。文化の観点から「海外の人との共生」や「海外の文化を利用して東北の文化や伝統工芸品を発展させる方法」を発表していた。積極的に質疑応答をしたり活発な意見交換が行われたりしていた。

分科会Ⅱ ワークショップ

③ 文化・教育							
A 班	阿部凌久	仙台城南	2 年		B 班	高橋ひより	仙台城南 2 年
A 班	臼井ノナ	仙台向山	2 年		B 班	榊原愛音	仙台城南 2 年
A 班	阿部日花里	聖霊学園	2 年		B 班	岡崎 雄斗	福島成蹊 1 年
A 班	今野 郁哉	福島成蹊	1 年		B 班	猪田美羽	聖霊学園 2 年
C 班	布田優菜	仙台城南	2 年		D 班	山田舞桜	仙台城南 2 年
C 班	佐藤飛彩	仙台向山	2 年		D 班	明石日菜子	聖霊学園 2 年
C 班	杉本莉子	聖霊学園	2 年		D 班	小林賢世	仙台向山 2 年
C 班	熊木遼介	甲府第一	1 年		D 班	川端一志	甲府第一 1 年
E 班	石川陽大	仙台城南	2 年		F 班	佐竹唯	仙台城南 2 年
E 班	佐藤心咲音	聖霊学園	2 年		F 班	鈴木深結	仙台東 2 年
E 班	生原芽依	甲府第一	1 年		F 班	喜多輝	金沢大附属 1 年

「文化・教育」の分科会では、「みらい東北 2024 の文化・教育」をテーマにワークショップをした。東北の文化や教育の現状を考え、活発に意見を交わした。東北の文化や教育を改善するために文化の継承や海外の人との交流を積極的に行うことや教員の負担を減らすための政策を積極的に考えていた。

<テーマ・課題>

◎ テーマ： 『みらい東北 2024 の「文化・教育」』

○ 課題例

教育

- ・進路の選択が少ない
- ・部活で外部コーチを導入
- ・教師の負担が大きい
- ・教員と生徒の笑顔を取り戻す
- ・高齢者がパソコンなどの機器を操作出来ない
- ・学校で言語教育が強制化している

文化

- ・過疎
- ・高齢化による東北の文化の継承の危機
- ・文化の後継者がいなくなってしまう
- ・多文化共生

<改善策・解決策のアイデア>

- アイデアの例①「東北の伝統芸能についての知識を深める」
東北にしかない伝統芸能を学べる進路をつくる。そのために、奨学金などの支援制度を増やす。
- アイデアの例②「ICT 機器を使いこなせるようになろう」
教師に適切な ICT 機器使用の指導を行う。学校の授業などを通して使えるようになり、勉強にも活かせるようにする。
- アイデアの例③「教師の負担を減らそう」
部活などで外部コーチを雇う。外部コーチの公務員化を行う。
- アイデアの例④「東北の伝統芸能を伝承しよう」
石碑などの「物」や「言葉」で残したり、SNS 等を活用して東北以外にも発信していく。
- アイデアの例⑤「教員と生徒の笑顔を取り戻す」
アクティブな授業を実施し、楽しい授業で自主的に取り組む。生徒が授業に興味・関心を持ち、課題を見つけられるようになる。

<助言・講評>

- 1) 最近の話題やトレンドを捉えて課題の解決策にしている点が良いと思った。
- 2) 若い世代が伝統を受け継いでいくと発展に繋がるし、視点が国際的な部分があり、東北を超えて考えていて素晴らしかった。

<代表チーム発表スライド>





強要されると楽しくない！

なるほど、わからん！！！！！！！！



実用的じゃない！

具体的なアイデアは…

小中学校で多言語の教材

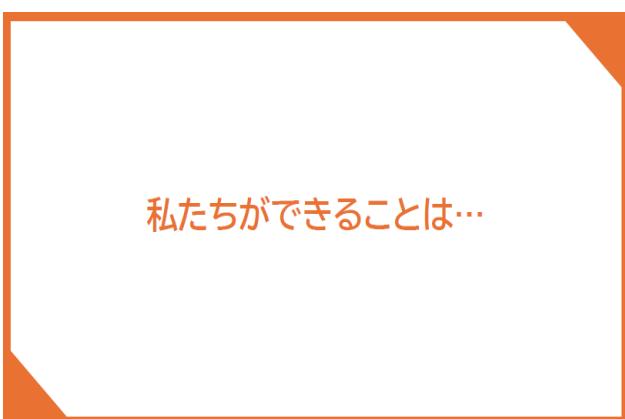


中高で第2言語の選択



独学で言語を深掘りするカリキュラム





東北から、日本から、世界へ



分科会Ⅰ ④まちづくりA

助言者	櫻井 寛也 (日本旅行) 表 潤一 (仙台城南高等学校；理科)
会 場	924 教室
会場責任者	表 潤一 (仙台城南高等学校)
司会進行	畑 中 結 芽 (宮城県仙台東高等学校)
記 録	西 城 遥 斗 (宮城県泉高等学校)

《次第》

1	○司会自己紹介・講師紹介 グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション
	1) 『聴覚障害のある方々が空港を快適に利用できるようにするには?』 宮城県仙台東高等学校 大槻 竜雅(1年)
	2) 『泉区の課題』 宮城県泉高等学校 小田静空(1年)
	3) 『災害対策には何が必要?!～○○○○○レシピ♡～』 聖霊学園高等学校 工藤未央(3年) 小田長美弓(3年) 城地心海(3年)
	4) 『豊かな自然と“もしも”の公園』 仙台城南高等学校 中村心海(2年) 大沼紗来(2年)
3	○講評

1) 『聴覚障害のある方々が空港を快適に利用できるようにするには?』

宮城県仙台東高等学校

私は「聴覚障害のある人々が空港を快適に利用できるようにするには」というテーマに対して、「スマートフォンに放送の内容を表示する」ということを提案します。まず私は空港のアナウンスに注目し、騒音で聞こえにくいという問題を発見しました。問題から、放送内容を文字化すれば良いのではないかと仮説を立てました。障害の有無に関わらず、誰もが制限なく情報を得ることができる社会にしていけるべきだと考えます。

2) 『泉区の課題』

宮城県泉高等学校

総合的な探究の時間の授業を通して、私たちの学校がある泉区の活性化を図ろうとした。そのためにまずは家の課題を探ろうとしたのだが、調べていくうちに住民の地域に対する関心が低いと感じるようになった。そこで、住民1人ひとりに課題意識を持って生活してもらうため、年齢、地区、性別に分けて聞き込みを行った。聞き込みをもとに課題解決に向けた行動を行い、地域住民に泉区へもっと関心を持ってもらうことに成功した。

3) 『災害対策には何が必要?! ~OOOOOレシピ♡~』

聖霊学園高等学校

昨年大雨で高校が浸水した経験をもとに、災害時の避難所での困りごとを減らす方法を考えた。市役所の防災担当者にインタビューし、避難所で特に問題となる「トイレ不足」を解決するために、ダンボールを使った簡易トイレを作成した。その作り方を「レシピ」としてまとめ、近隣の避難所に設置する予定である。ダンボールを使って避難所での生活を快適にすることができ、今後はさらに簡単に作れるレシピを改良し、広めていきたい。

4) 『豊かな自然と“もしも”の公園』

仙台城南高等学校

私たちは「豊かな自然と“もしも”の公園」をテーマに、防災を学べる公園を提案しました。震災を経験していない世代が楽しく学べる環境を作るため、公衆電話の改良や待ち合わせ場所の設置、備蓄倉庫や非常用の水噴水を考案しました。特に、公衆電話は使い方を学べる工夫を施し、待ち合わせ場所は避難時の集合を意識しました。これらを公園に設置することで、防災への理解を深め、興味を持つきっかけになればと考えました。

Memo

<質疑応答>

1)

・「課題について調べた方法については WEB のみか。」

⇒今回は WEB のみで課題について調べた。

2)

・「あなたが住んでいる地域には外国人労働者はいるか。(英語質疑)」

⇒あまり多いという印象はない。(英語応答)

3)

・「災害時ダンボールトイレの制作時間はどれくらいか。」

⇒およそ 15 分程度。

4)

・「この公園を実現するとなった際の設置費用はどれくらいか。」

⇒なかなか想像するのは難しい。今回は想像上で作ったもの。

<助言・講評>

アンケートやインタビュー中心の探究が多かったが、調査結果から多様な視点で分析し、次のステップに繋げることができれば、探究性が高まるのではないか。

<記録者のまとめ>

まちづくり A の分科会では、「生活における利便性向上」や「災害対策」など主に地域課題などに関する探究の発表が行われた。その後の質疑応答についても、今後の見通しを聞くものが多かった。

分科会Ⅰ ④まちづくりB

助言者	相澤茂紀（仙台城南高等学校；英語） 尾形駿（仙台城南高等学校；国語）
会場	923 教室
会場責任者	表潤一（仙台城南高等学校）
司会進行	阿達聖奈（東北文教大学山形城北高等学校）
記録	菅野遥斗（福島成蹊高等学校）

《次第》

1	○司会自己紹介・講師紹介 グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション 1) 『日本の産業を救う！外国人労働者の権利を守るには』 宮城県泉高等学校 小林美羽(2年) 2) 『理想の教師像』 宮城県仙台向山高等学校 佐藤あずみ(2年) 山本怜美(2年) 菊池陽斗(2年) 貝山友哉(2年) 高橋仁平(2年) 菅井翔太(2年) 3) 『若者と政治』 宮城県仙台東高等学校 高橋将大(1年) 川邊 駿(1年) 中川涼太(1年) 半澤碧人(1年) 細目奏志(1年) 4) 『教員の過重労働は減らせるのか？』 仙台城南高等学校 山田希夏(1年) 朝倉萌衣奈(1年) 齋藤志温(1年) 株木良尚(1年)
3	○講評

1) 『日本の産業を救う！外国人労働者の権利を守るには』

宮城県泉高等学校

労働力不足の日本では技能実習生の受け入れが進むが、彼らへの人権侵害が多発している。新たに創設される育成就労制度も不十分だと言われるなか、権利侵害をなくす方法を考える。調査を進め、育成就労外国人への日本語教育が不十分だという点に着目した。日本語教育の充実により、言語が通じないことによる差別を防止したり、外国人が周囲の日本人に助けを求めたりできる。アクセスが簡単でかつ会話重視の学習サービスを提案する。

2) 『理想の教師像』

宮城県仙台向山高等学校

生徒にとって“理想の教師像”とは何なのか。この問いについて思考し調査した結果、おもしろい話をできるようになることと、生徒の気持ちを理解できるようになることが“理想の教師像”に近づくために重要であると考えた。この二点を深掘りし、それぞれを身につけるためにどのようなことを意識すればよいのか、具体的な方法を考察する。

3) 『若者と政治』

宮城県仙台東高等学校

日本では若者の政治離れが進んでいるといわれていますが、そうした現状を分析したうえでどのような解決策があるのか調査し、まとめました。日本は国政選挙の投票率が世界 200 カ国中 139 位と下から数えた方が早く、先進国だけで見るとフランスに次いで下から 2 番目となっており、国民の政治への関心が非常に低い状況です。そこで、これからの社会を担う若者の政治参加を促すための仕組みや方策について考察します。

4) 『教員の過重労働は減らせるのか？』

仙台城南高等学校

近年、教員の過重労働がよく話題に上がるようになりました。私たちは、本校生徒、先生方に協力していただいたアンケートをもとに、教員の過重労働は時間外労働の多さが原因だと考え、時間外労働を減らす取り組みを調べました。教員の時間外労働を減らす取り組みがもっと広まり、教員の過重労働を減らすとともに様々な職種の過重労働がなくなるきっかけになればと思います。

Memo

< 質疑応答 >

1)

- ・「育成就労制度の試験に落ちてしまった場合には受けた外国人はどうなる？」
⇒最長で1年間の在留継続が認められる。その間に学習をし、次の試験を受ける

2)

- ・「教師の理想像の一つ「面白い話ができる」の「面白い」とは？」
⇒学校が有意義になるように楽しいにアプローチしたものを指す。

3)

- ・「『選挙をしなかった場合、罰金や選挙権の剥奪がされる』とのことだが、それはどこの国で？」
⇒トルコ、オーストラリア、韓国などの国。

4)

- ・「教職員の労働時間が1番長い層（小・中・高・大）はどこ？」
⇒1番多いのは中学校教職員の労働時間だった。

< 助言・講評 >

- ・アカデミックインターシップを利用した班もいたが、AI（人工知能）で案を出した班はアンケートやインタビューなどに変え、調査結果から多様な視点で分析し、次のステップに繋げることができれば、探究性が高まるのではないか。

< 記録者のまとめ >

まちづくりBの分科会では、「政治に対する向き合い方や」「外国人労働者の権利」、「教員の過重労働」など幅広い分野において探究の発表が行われた。その後の質疑応答についても、今後の見通しを聞くものが多かった。

分科会Ⅱ ワークショップ

④ まちづくり							
A 班	中村心海	仙台城南	2 年	B 班	大沼紗来	仙台城南	2 年
A 班	工藤未央	聖霊学園	2 年	B 班	小田長美弓	聖霊学園	2 年
A 班	菅井翔太	仙台南山	2 年	B 班	小田静空	泉	1 年
A 班	細目奏志	仙台東	1 年	B 班	半澤碧人	仙台東	1 年
C 班	城地心海	聖霊学園	2 年	D 班	佐藤あずみ	仙台南山	2 年
C 班	小林美羽	泉	2 年	D 班	川邊駿	仙台東	1 年
C 班	中川涼太	仙台東	2 年	D 班	朝倉萌衣奈	仙台城南	1 年
C 班	山田希夏	仙台城南	1 年				
E 班	貝山友哉	仙台南山	2 年	F 班	高橋仁平	仙台南山	2 年
E 班	高橋将大	仙台東	1 年	F 班	大槻竜雅	仙台東	2 年
E 班	齋藤志温	仙台城南	1 年	F 班	株木良尚	仙台城南	1 年

まちづくりの分科会では、「みらい東北2040年の『まちづくり』」をテーマとして、防災・減災対策、少子高齢化、観光などさまざまな視点から意見を交わした。全体として、東北ならではの利点を活かした提案や解決に向けた具体的な対策などのアイデアが出て、「まちづくり」について深く考える機会だった。

<テーマ・課題>

- ◎ テーマ： 『みらい東北 2040 年の「まちづくり」 』
- 課題① 安全安心に暮らせるまちづくりの視点では、防災教育を提供する場所が少ないと想定される。
- 課題② 東北地方では、特に人口減少が危惧される。
- 課題③ 少子高齢化に伴う地域の繋がり減少。

<改善策・解決策のアイデア>

- アイデアの例①：学校行事の一環として、防災キャンプを参考とした避難生活を体験できる授業を行う！
想定条件では、学校体育館で電気・水道・ガスが使用不可で備蓄物を利用するなど。
- アイデアの例②：子育て世代の人が住みやすい場所にする！財政的な支援では、保育・幼稚園の無償化や出産祝い金を支給する。インフラ面では、幼稚園を増やす、広い公園を作るなど。
- アイデアの例③：小規模なイベントを増やし、子供と大人さらには高齢者を繋ぐ！東北ならではの自然と観光業を融合させたイベントのようなものを考えれば良いのではないかな。

<助言・講評>

- どの発表グループも、高校生が運営に携わることで地域に入り、多世代との関わりを持って欲しい。

<代表チーム発表スライド>

第2回 みらい東北 高校生プレサミット 発表資料

WWZ J.

午後の部 生徒ワークショップ

みらい東北2040年の『まちづくり』

f班

1. 私たちが考えるみらい東北【アイディア提案】

WWZ J.

小さな子供が自由に遊べる公園を作る

第2回 みらい東北 高校生プレサミット 20250315

2. 私たちが考えるみらい東北【ストーリーボード】

WWZ J.

想定される困りごと ・デジタル機器の普及によって小さな子供が外で遊ぶ時間が減る ・建物が増えて公園が減る →子育てしにくくなり人口減少に拍車がかかる	アイディアによる具体的な解決のイメージ ・公園の敷地内に商業施設を設けて子連れで行きやすい公園をつくる ・遊具やボールを使えるスペースを作って子供たちが自由に遊べるようにする
アイディアによる具体的な解決のイメージ補足 ・公募設置管理制度(Park-PFI)の導入 →親子で楽しめる公園に ・防球フェンスを建てる	解決によるハッピーな様子 ・子供が元気に遊んでいる様子 ・子育ての地に選ぶ人が増える →人口の増加

第2回 みらい東北 高校生プレサミット 20250315

3. アイディアに向けて自分たちに出来ること

WWZ J.

自分たちで外遊びのイベントを企画する

第2回 みらい東北 高校生プレサミット 20250315

分科会Ⅰ ⑤国際理解 A

助言者	島田 潤悦 (JICA 東北 市民参加協力課) 脇坂 晴久 (仙台城南高等学校；社会)
会場	935 教室
会場責任者	脇坂 晴久 (仙台城南高等学校)
司会進行	渡邊 俊 (福島成蹊高等学校)
記録	齋藤 香音 (盛岡白百合学園高等学校)

《次第》

※ = ON LINE

1	○司会自己紹介・講師紹介 グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション 1) ※『Social Participation in Tainan—Make Tainan More Age-friendly』 国立臺南高級商業職業学校 Wu Rui-Ti Li Zhen-Yun Qiu Li-Chun 2) 『なぜ、日本の中高生が海外に行きたいと思わないのか？』 宮城県泉高等学校 神山結衣(1年) 3) 『マレーシアの国際理解』 福島成蹊高等学校 高橋隼(3年) 大石藍(3年) 志田龍一(3年) 4) 『日本と他国の英語学習について』 仙台城南高等学校 岡崎有紗(3年) 佐藤日彩(3年) 佐藤真優(3年)
3	○講評

<記録者のまとめ>

国際理解 A の分科会では、異文化交流や英語教育など、主にグローバルな視点からの探究活動の発表が実現可能な質問と意見が交わされた。また、発表の言語に関わらず、時折英語を駆使して、言語にとらわれない姿勢が見られた。全体として大変に有意義な探究発表の場となった。

1) 『Social Participation in Tainan—Make Tainan More Age-friendly』

国立臺南高級商業職業学校

As Tainan has entered the era of a super-aged society, the Tainan government has promoted several age-friendly policies, such as discounts for taking buses and annual health checks. However, aside from ensuring the elderly people's basic quality of life, their social participation has also been prioritized. This research aimed to discuss the current age-friendly policies in Tainan.

2) 『なぜ、日本の中高生が海外に行きたいと思わないのか？』

宮城県泉高等学校

昨夏、私は本校を訪問したアメリカ留学生と交流する機会があった。その際、私は自分が言いたいことを上手く伝えることができず、悔しい思いをした。その経験から、私は夏休みに国際交流プログラムに参加することにした。実際にプログラムに参加し、私は多くのことを学んだ。今、日本の若者は海外に行くことに消極的だと言われている。同年代の高校生に私の経験を伝えることで、海外留学や国際交流のすばらしさを伝えたい。

3) 『マレーシアの国際理解』

福島成蹊高等学校

1396年にスマトラ島（インドネシア）にマラッカ王国が成立、十五世紀から明国と朝貢貿易をはじめた。その影響で海上貿易が栄え商人であるアラブ人やインド人からイスラム教が国教となった。十六～二十世紀にかけ4つの国の植民地となったが、1957年に独立をし、現在では東南アジアの主要国となっている。また、主に英国による植民地支配を経験した歴史からキリスト教やヒンドゥー教も多くみられる。

4) 『日本と他国の英語学習について』

仙台城南高等学校

国際化が進んでいる中で、いまだに日本は英語を話せる人の割合が少ないと感じた。それはなぜなのか、日本と他国の英語の学習方法を比較してみた。特に母国語が英語と発音が似ている韓国や、英語を母国語とするアメリカと、英語学習について比較をし、普段の学習の方法を改善すればよりよく英語能力を高められるのではないかと考えた。

Memo

分科会Ⅰ ⑤国際理解B

助言者	関 口 聡 (宮城県泉高等学校教頭；英語) 成 田 奈 穂 (盛岡白百合学園高等学校；英語)
会 場	934 教室
会場責任者	脇 坂 晴 久 (仙台城南高等学校)
司会進行	小 林 橘 平 (宮城県仙台向山高等学校)
記 録	大久保 柚 歩 (東北文教大学山形城北高等学校)

《次第》

1	○司会自己紹介・講師紹介 グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション 1) 『Food Masters A Culture Feast in Tainan』 国立臺南高級商業職業学校 Xu Hao-Yu Huang Yue-Mei 2) 『核兵器はなぜ無くないのか』 盛岡白百合学園高等学校 照井 花(2年) 3) 『Improving Compost Toilet Efficiency for Sustainable Sanitation』 宮城県仙台二華高等学校 石沢揺其(2年) 齋藤万悠子(2年) 佐藤理乃(2年) 新海晴菜(2年) 4) 『外国人労働者のメリットとデメリット』 仙台城南高等学校 岩佐紀季(2年) 齋藤菜々子(2年) 荒木朗真(2年)
3	○講評

1) 『Food Masters A Culture Feast in Tainan』

国立臺南高級商業職業学校

Inspired by Tainan's 400th anniversary, we designed a board game that blends classic cuisine with historical culture. The game follows a Monopoly-style format, where players roll dice to move, collect ingredients and recipe cards, and complete traditional Tainan dishes like beef soup and coffin bread. Event cards feature food origin trivia to enhance knowledge and fun. Additionally, Tainan's historical landmarks are incorporated, allowing players to experience the city's rich history while exploring its culinary heritage, promoting Taiwanese food culture, and raising awareness of cultural preservation.

2) 『核兵器はなぜ無くならないのか』

盛岡白百合学園高等学校

この問いは一万人署名活動を行っていく中で頭に浮かんだ疑問だ。この疑問に対する答えは簡単には出ないし解決していくことも難しい。自分の目で見えて考え交流をして自分の考えを述べることで、相手も考えを聞き平和のために私たちは何ができるか何をしなければならないのかを考える機会を頂いた。被爆者の思いを胸に今までの活動してきた仲間がいることを忘れず、これからも核兵器廃絶そして世界平和に向けて活動を行っていききたい。

3) 『Improving Compost Toilet Efficiency for Sustainable Sanitation』

宮城県仙台二華高等学校

カンボジア王国の農村、アンコールクラウ村周辺では、遺跡保護のために上下水道が通っておらず、トイレがない家庭も存在する。また、土壌も痩せており、耕作には適していない。そこで本研究では、水道を使わず、微生物の力で糞便を分解して堆肥化できるバイオトイレに着目し、現地への適用ができないか検証した。現地にある素材を使用し、微生物の発酵熱を堆肥化の指標として、日本及びカンボジアで実験を行った。

4) 『外国人労働者を取り巻く環境について』

仙台城南高等学校

日本で働く外国人労働者数は増加傾向である。現在、製造業・非製造業ともに企業の人手不足感が高い状態にあり、少子高齢化に伴って、今後も労働市場における外国人労働者の重要性はますます高まり、低下することはないと考える。そのような中で、なぜ日本で働く外国人労働者が増えているのか、日本で働く外国人労働者が奮闘していること、日本で働いていく上での課題を考察し解決策を提示したい。

Memo

<質疑応答>

1)

- ・台湾からのリモートでの参加で、日本人にはない発想とイラストなどを用いたスライドで、楽しめる要素がある提案の発表を行っていた。
- ・現代的な QR コードを利用した絵本など

2)

- ・「署名活動を行った団体はどのようなものか」という質問に対して
⇒各県から五名ずつ派遣され、月に 1、2 回活動している。
駅などに立ち、なぜ核がいけないものを説明し、駅を利用する人に署名してもらう。
- ・過去と今を比べて、他人事ではないという大切さがわかる発表であった。

3)

- ・「夏と冬に分けて実験を行った意味とは」という質問に対して
⇒フィールドワーク自体が夏と冬の 2 回行われた。
カンボジアの乾季の時期が日本では冬の季節で、カンボジアの雨季の時期が日本では夏の季節であり、乾季と雨季の両方の環境で実験を行えるという条件にあっていたため。
- ・実際にカンボジアへフィールドワークをするために行き、肥料の作り方を学んだ。

4)

- ・「最近日本で話題になっている内容であるが、なぜこのテーマにしたのか」という質問に対して
⇒日本でよく見かける外国人がなぜ他の国ではなく、日本に来てまで仕事をするのか疑問に思ったため。
- ・イラストと簡易的な英文でスライドがまとめられており、わかりやすい発表であった。

<助言・講評>

- ・発表されたことを誰かに伝えて共有することで、多くの人が国際事情について知ることができるきっかけになる。
⇒自分にできる身近なことの一つ
- ・これからの世の中に適応した、異文化理解と多文化共生を大切にしていける必要がある。
- ・発展途上国を「可哀想」だと他人事にせず、「自分が同じ状況だったら」と考えてみることで「世界として発展途上国のような状況をなくそう」という考えに繋がる。

<記録者のまとめ>

「国際理解 B」の分科会では、日本と世界や過去と今を比較し、現在の国際問題や現状を踏まえた上で、自分たちに何ができるかを考えさせられる発表であった。全体として英語で説明を行なったグループの発表でも積極的に理解しようとする姿勢が見られた。さらに、どのグループの発表においても自分ごととして考えようとする姿勢や活発な質疑応答、発表が行われとても有意義な時間であった。

分科会Ⅱ ワークショップ

国際理解分科会								
A 班	佐藤 日彩	仙台城南	2 年		B 班	齋藤 菜々子	仙台城南	2 年
A 班	大石 藍	福島成蹊	2 年		B 班	佐藤 真優	仙台城南	2 年
A 班	新海 晴菜	仙台二華	2 年		B 班	石沢 揺其	仙台二華	2 年
A 班	神山 結衣	泉	1 年		B 班	高橋 隼	福島成蹊	2 年
C 班	岡崎 有紗	仙台城南	2 年		D 班	岩佐 紀季	仙台城南	2 年
C 班	志田 龍一	福島成蹊	2 年		D 班	照井 花	盛岡白百合	2 年
C 班	齋藤 万悠子	仙台二華	2 年		D 班	佐藤 理乃	仙台二華	2 年

国際理解の分科会では、「東北地方の強みを活かした国際協力プロジェクトを考えよう」をテーマとし、東北地方特有の技術や知識をもとに、発展途上国の生活がより豊かになる方法について意見を交わした。

参加した生徒は、講師の方から発展途上国の現状を聞いた上で、時代の変化に合わせた手段を考えるなど、高校生ならではのアイデアが活発に出され、有意義な時間となった。

<テーマ・課題>

- ◎ テーマ： 『東北地方の強みを活かした国際協力プロジェクトをたちあげよう』
- 課題例①：地震経験が少ない国で、被害拡大や、被害前後での対応・対策の知識・技術不足が起きている。
- 課題例②：同じ国の民族間で争いが起こっていることが原因で、互いの国の足を引っ張り合い、国を発展させる方向に国力を入れられていない。
- 課題例③：発展途上国での水質環境が悪く、きれいな水を使うことができない。
- 課題例④：発展途上国での農作物の不足や、品種改良の技術不足が農産物の発展を妨げている。

<改善策・解決策のアイデア>

- アイデアの例①：『東日本大震災の経験を生かして防災系 YouTuber になる』
発展途上国に防災技術を動画で伝え、災害発生時に備えた意識向上を図る。
発展途上国の地形を学び、自ら YouTuber となって情報を発信する。
- アイデアの例②：『東北の人柄の柔軟性を広め、発展途上国の中の民族間争いを伝統的活動を通して緩和していく』
東北地方の人な柔軟な人柄を手本に、発展途上国の民族間対立を伝統的活動や文化交流の場を通じて緩和し、紛争を防ぐ。
SNS を活用して互いの文化を発信し、共通点を見つけることで理解を深める。
- アイデアの例③：『東北のきれいな水を伝える』
簡易的な技術で浄水場を作り、衛生問題やポイ捨ての課題を解決しながら、人々が集まる場を創出する。
浄水器を自作して海外に普及させ、ボランティア活動でゴミ拾いを行う。

- アイデアの例④：『東北の農業技術を生かして現地に品種改良技術を普及させよう！』
発展途上国で土地に合った作物を開発できる技術を提供し、生産量向上と東北との学びの場を作る。東北の農業や気候を学び、意見交換を積極的に行う。

<助言・講評>

- 全体として、防災・平和・衛生・農業といった、多角的な視点から発展途上国の支援案が出された。東北の強みを活かした防災技術の普及や、人柄や伝統文化を活用した平和構築、水問題を解決する浄水器開発、共同開発による農業支援など、実現性や社会的応用を意識した提案が多く見られた。
東北の良さを活かし、発展途上国に応用できる点を考察しながら進められたことは、大きな成果である。
- 現代は、具体的な知識や技術を実践し、国際協力として実現可能なものを考えていく時期にある。発展途上国の現状やニーズに対する理解を深めながら、これからの学習に生かしてほしい。

<代表チーム発表スライド>

第2回 みらい東北 高校生プレゼサミット 発表資料

WWVL J.

午後の部 生徒ワークショップ

『東北の強みを活かした国際協力プロジェクト
を立ち上げよう』

A班

1. 私たちが考えるみらい東北【アイデア提案】

WWVL J.

『東日本大地震の経験を生かして、
防災系Youtuberになろう』

第2回 みらい東北 高校生プレゼサミット 20250315

2. 私たちが考えるみらい東北【ストーリーボード】

WWVL J.

想定される困りごと ○被災経験がない →防災技術の不足 - 被害が大きくなりやすい	アイデアによる具体的な解決のイメージ ○防災技術（ハザードマップ、ピクトグラム、非常食、防災リュック...）を発展途上国にも伝える。
アイデアによる具体的な解決のイメージ補足 ○動画で発信 ・手軽に見える短さ ・いろんな人が見れるように ・いろんな国の字幕をつける	解決によるハッピーな様子 ○減災につながる ○安心感 ○防災意識が高まる

第2回 みらい東北 高校生プレゼサミット 20250315

3. アイディアに向けて自分たちに出来ること

WWVL J.

- まず発展途上国の地形について知る
- 自分たちがYoutuberになる

第2回 みらい東北 高校生プレゼサミット 20250315

アンケートへのお願い

第2回みらい東北高校生プレサミットへご参加いただき誠にありがとうございました。

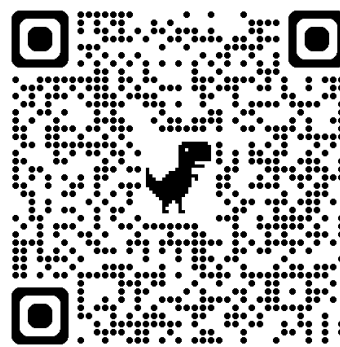
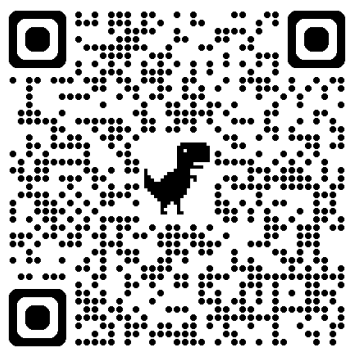
よろしければ、アンケートへのご協力をお願いいたします。

次回以降の開催時に参考にさせていただきます。ご記入いただいた内容は仙台城南高等学校で管理いたします。ご回答方、どうぞよろしくお願いいたします。

回答〆切 ： 2025年3月17日（月）

《教職員用アンケート》

《生徒用アンケート》



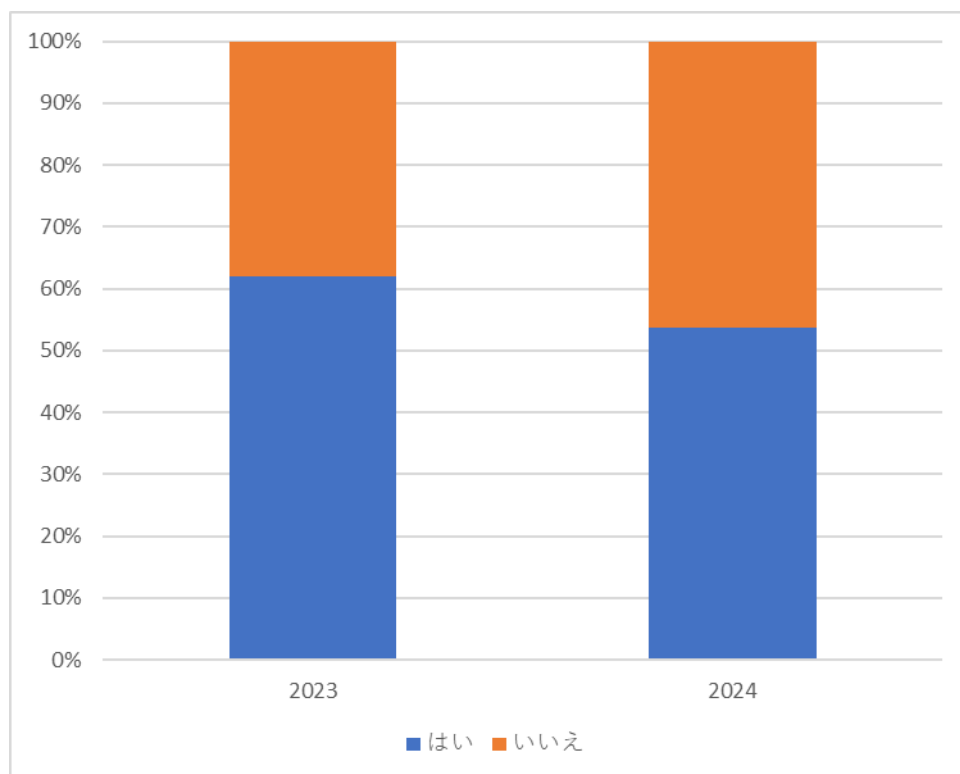


7. 令和6年度WWLに 関するアンケート結果

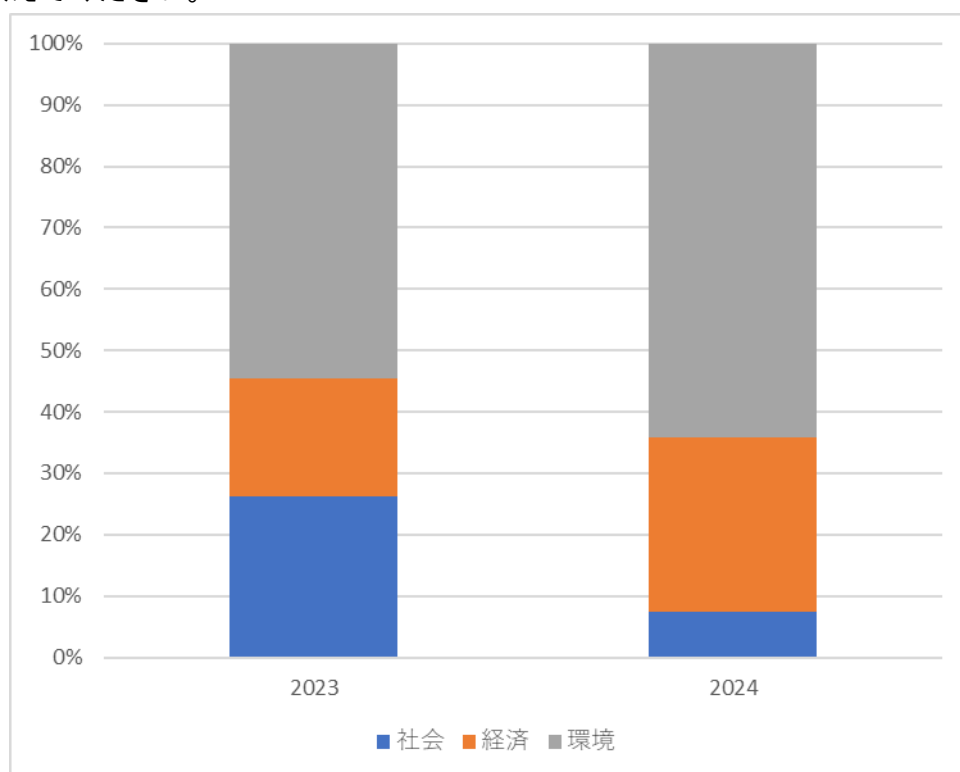
1. 令和6年度普通科総合進学コース2学年経年変化

◆サステナビリティ

(1) あなたは SDGs について興味関心がありますか？

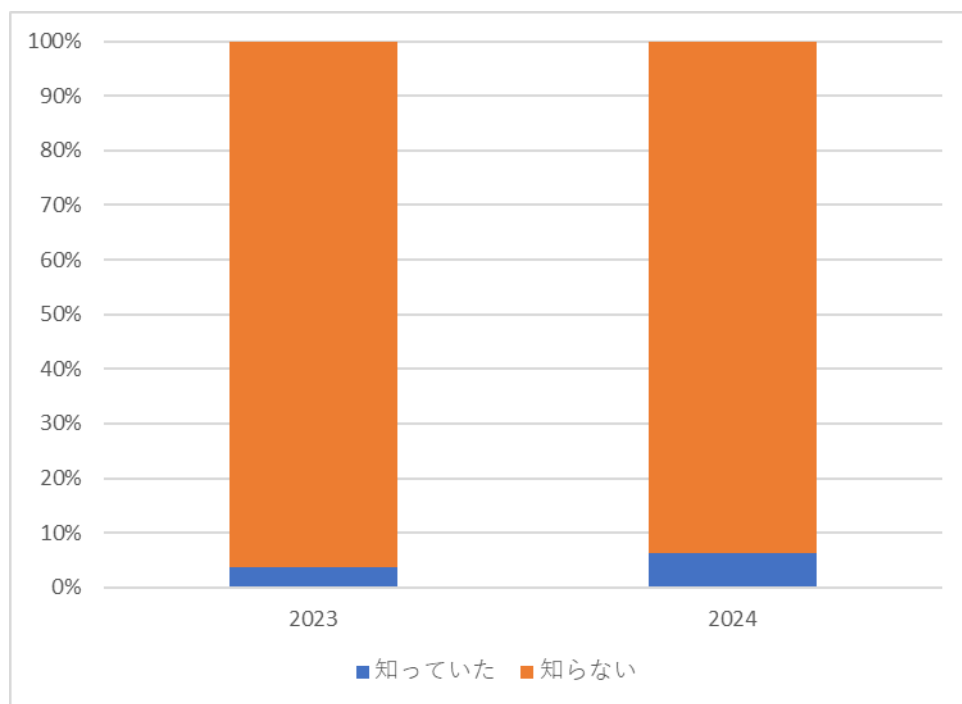


(2) (1)で「はい」と答えた方は、SDGs「社会」「経済」「環境」の3分野で一番関心の高い分野を教えてください。



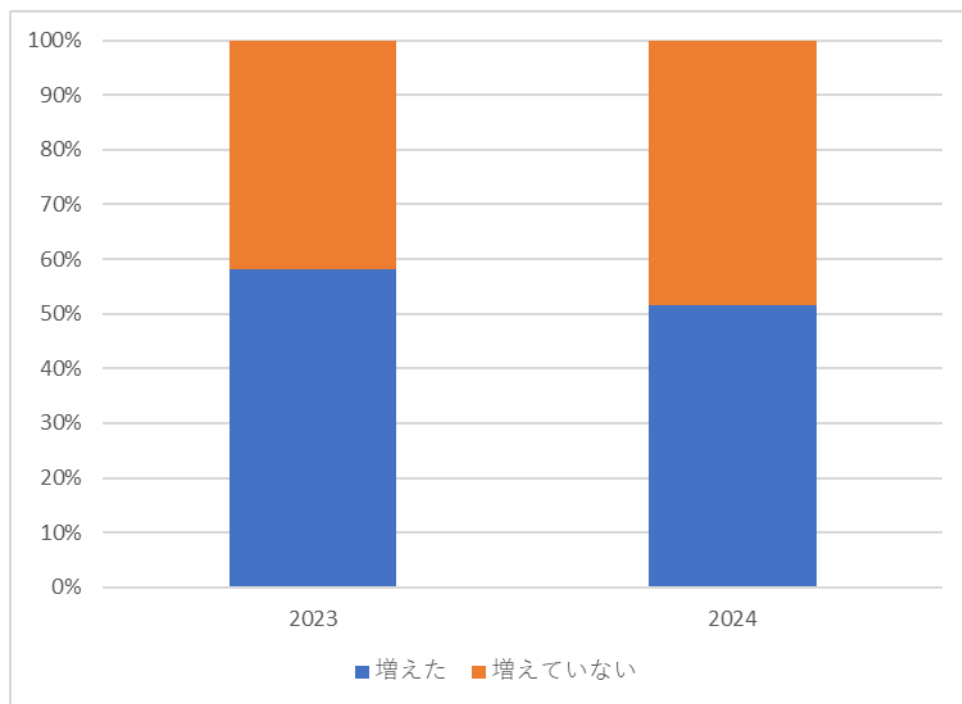
◆D X（デジタルトランスフォーメーション）

(3) D Xという言葉について知っていましたか？

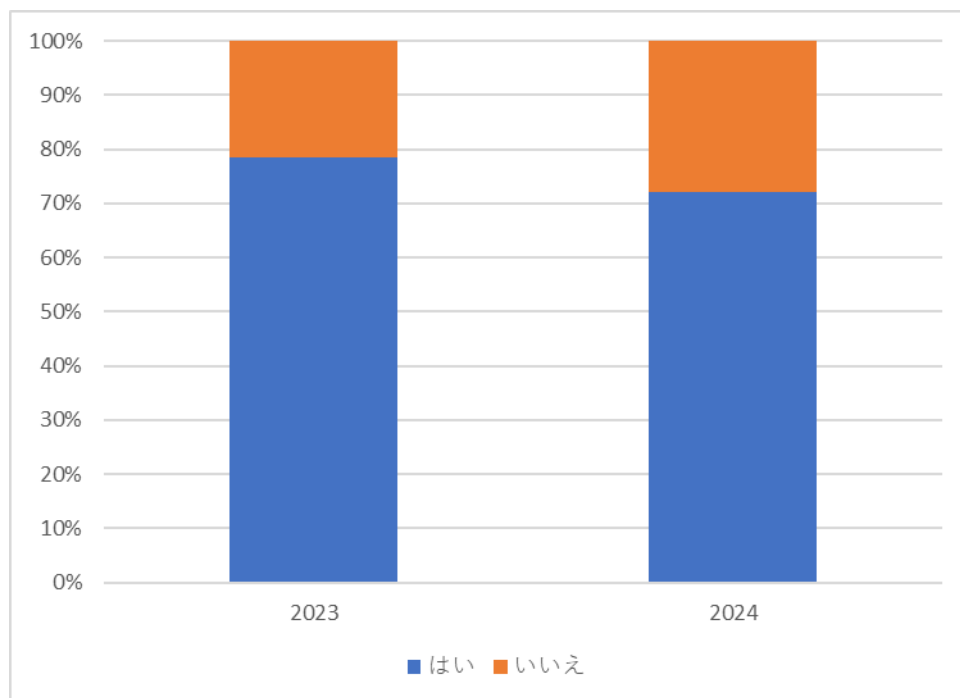


◆デジタル技術

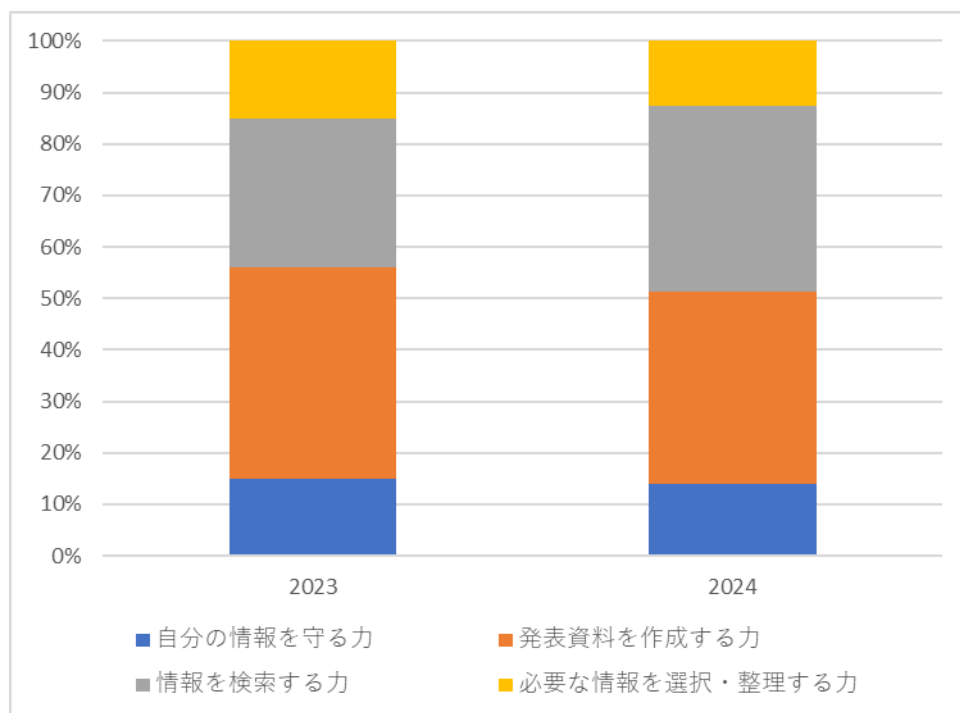
(4) 昨年度と比べて学校でI C Tを使う頻度は増えましたか？



(5) I C Tの機器の活用によって、教科の学習において自分の力を伸ばすことができましたか？



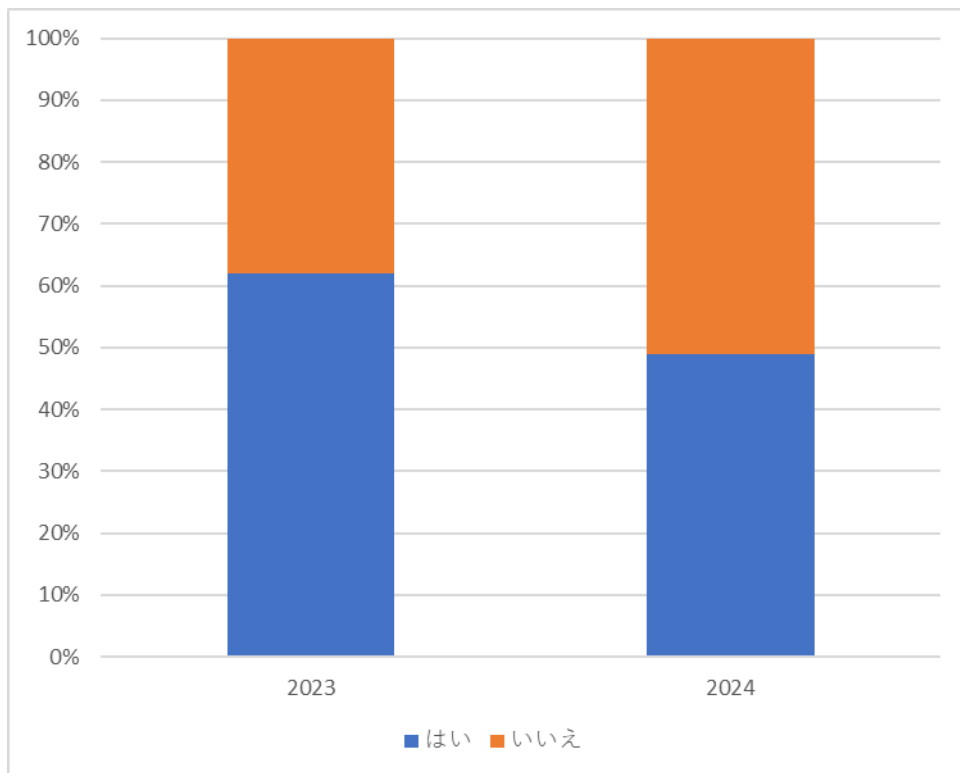
(6) (5)で「はい」と答えた方は、I C T機器を活用する中で、伸ばすことができたのはどんな力ですか？



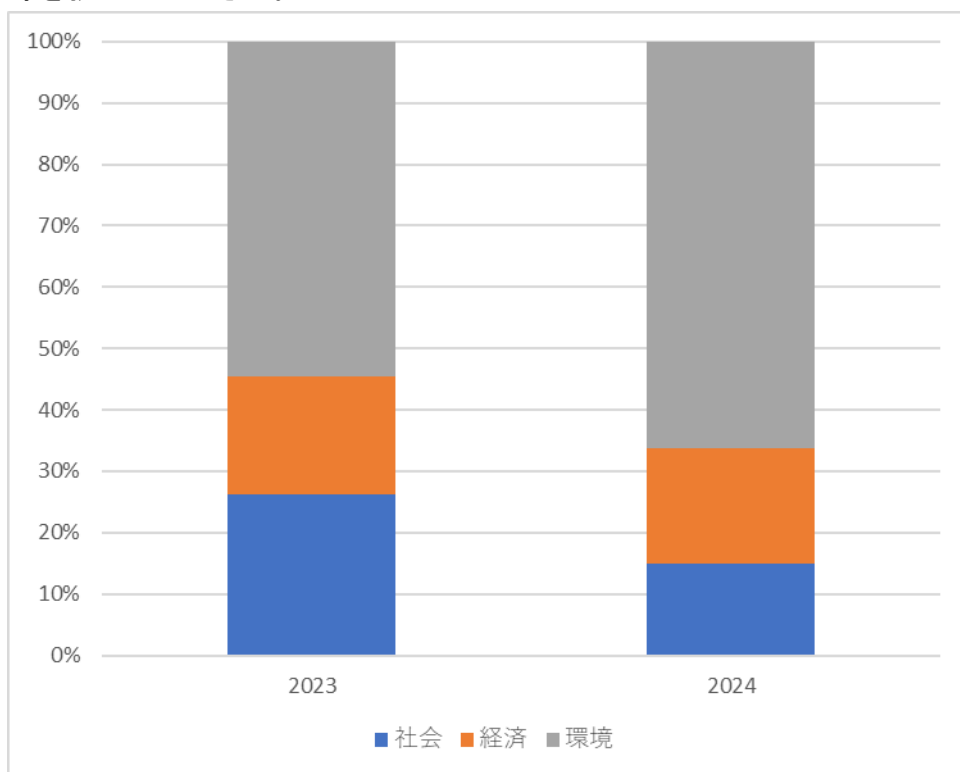
2. 令和5年度総合進学コース1学年と令和6年度総合進学コース1学年の比較

◆サステナビリティ

(1) あなたはSDGsについて興味関心がありますか？

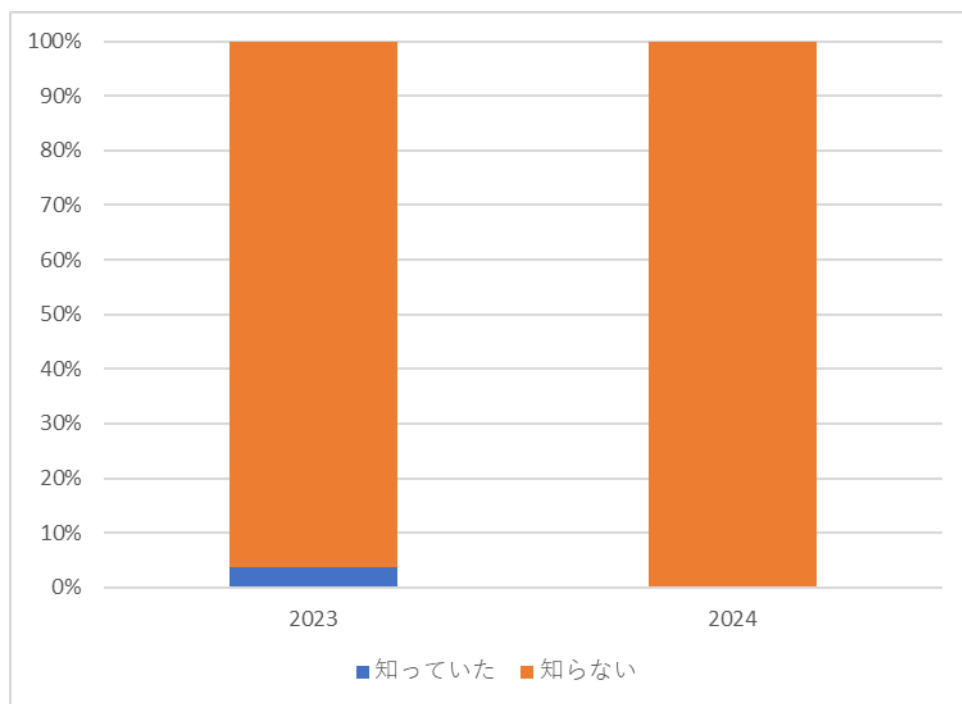


(2) (1)で「はい」と答えた方は、SDGs「社会」「経済」「環境」の3分野で一番関心の高い分野を教えてください。



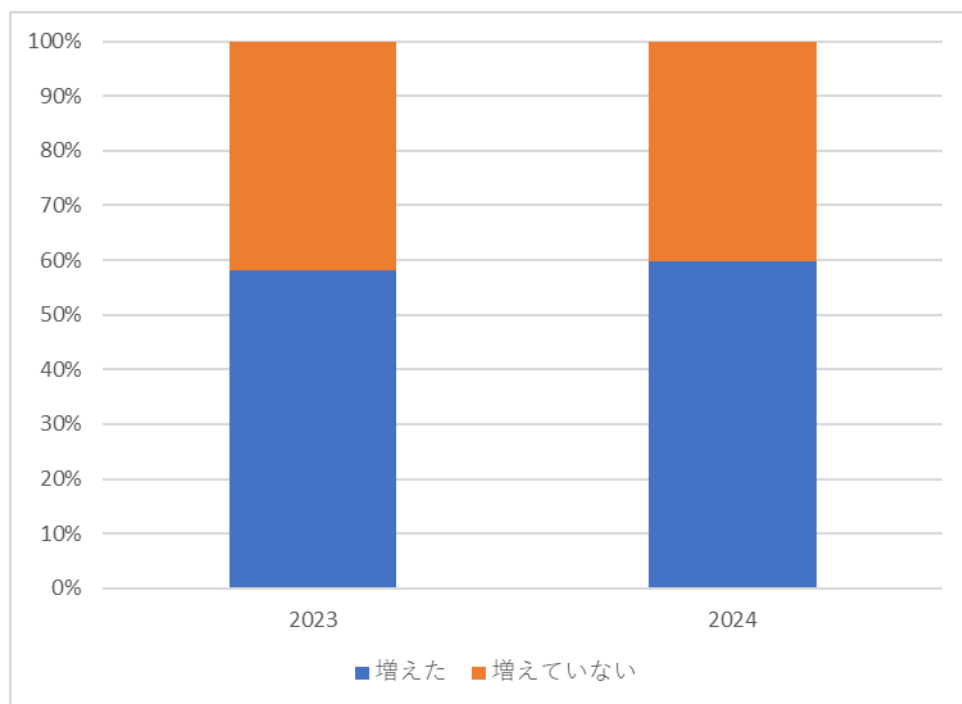
◆D X（デジタルトランスフォーメーション）

(3) D Xという言葉について知っていましたか？

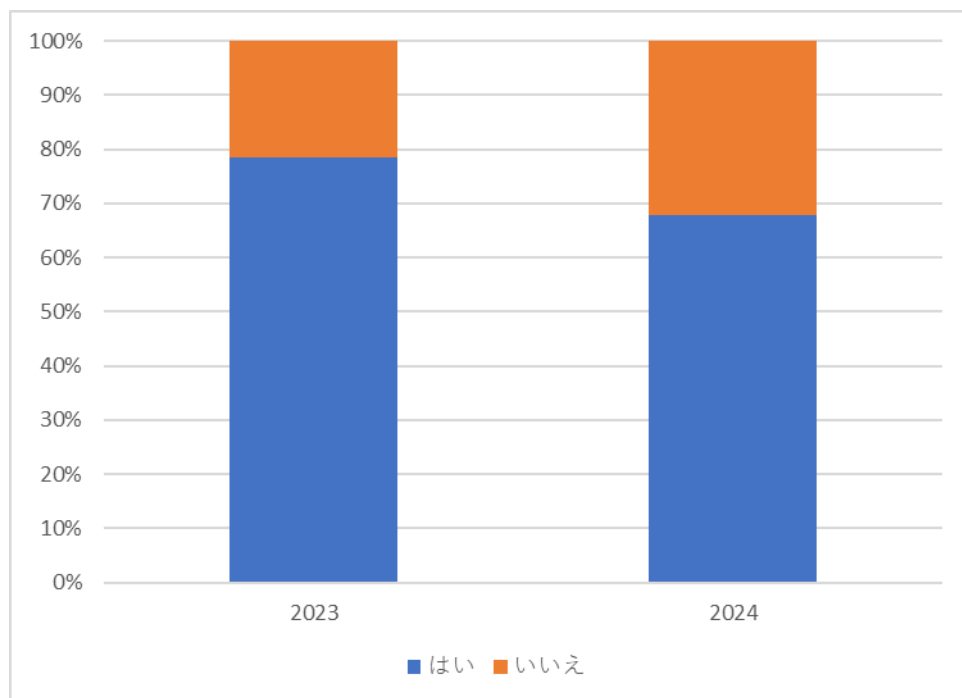


◆デジタル技術

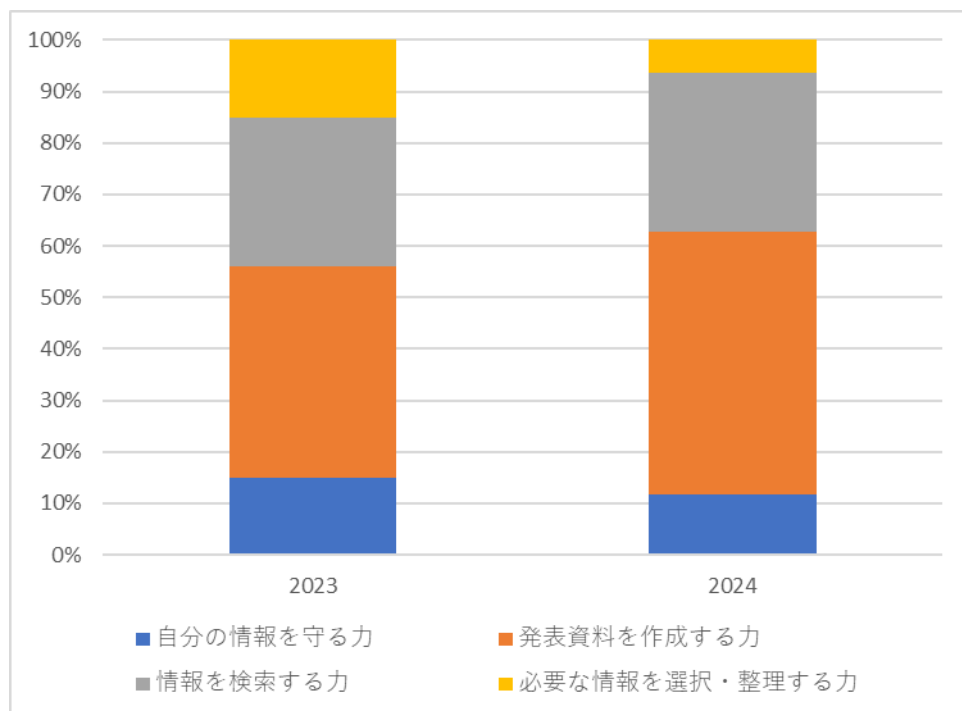
(4) 昨年度と比べて学校でI C Tを使う頻度は増えましたか？



(5) I C T機器の活用によって、教科の学習において自分の力を伸ばすことができましたか？



(6) (5)で「はい」と答えた方は、I C T機器を活用する中で、伸ばすことができたのはどんな力ですか？



3. アンケート結果を受けて

令和6年度普通科総合進学コース2学年経年変化から

令和5年度普通科総合進学コース1年生を対象に本事業を行ってきた。本事業構想概要「みらい東北のサステナビリティとDXを牽引する人材育成」を目標に活動を進めてきた。アンケート結果から、以下の傾向が見られた。

1. サステナビリティへの関心度

「サステナビリティ」に関する関心度は、昨年度と比較してやや低下していた。しかし、関心の高い分野の順位は「環境」「経済」「社会」の順で、昨年度と同様の傾向が見られた。一方で、「経済」「環境」分野への関心を示した回答は増加していた。

2. DX（デジタルトランスフォーメーション）への理解度

「DXという言葉について知っているか」という質問では、「知っていた」と回答した割合が昨年度よりわずかに増加していた。ただし、「ICTを使う頻度は増えたか」という質問では、昨年度と大きな変化は見られなかった。

3. ICTを活用して伸ばせた力

「ICTを活用して伸ばせた力」に関する回答では、昨年度と同様に「発表資料を作成する力」「情報を検索する力」の順で高かった。ただし、「自分の情報を守る力」と「必要な情報を選択・整理する力」の順位に変化が見られ、今年度は「自分の情報を守る力」がわずかに「必要な情報を選択・整理する力」を上回っていた。

これらの結果から、サステナビリティへの関心の変化や、DXやICTの活用に関する生徒の意識やスキルの向上が一定程度見られたことが分かった。

アンケート結果をふまえ、以下の4つの課題が考えられる。

1. サステナビリティへの関心度の低下
2. DX（デジタルトランスフォーメーション）の理解の浅さ
3. ICT活用スキルの偏り
4. ICT活用への主体性の不足

これらの課題解決に向けて以下の対策を考える。

【課題1】 サステナビリティへの関心度の低下

(1) 多分野の関連性を学ぶ探究活動の導入

- ・「環境」「経済」だけでなく、「社会」分野（貧困、ジェンダー、福祉、教育など）の課題も取り上げ、サステナビリティの多様な側面に触れる機会を増やす。
- ・各分野が相互に関係していることを理解させる教科横断型の学習を推進する。

(2) 社会・経済分野との関連づけ

- ・身近な社会問題（地域格差、ジェンダー不平等など）をテーマとした事例分析やグループディスカッションを取り入れ、社会分野への関心を喚起する。

【課題 2】 D X（デジタルトランスフォーメーション）の理解の浅さ

(1) D Xの活用事例の紹介と体験学習の機会拡充

- ・企業や自治体がD Xを活用して課題解決した事例を紹介し、生徒に具体的なイメージを持たせる。
- ・探究活動でのフィールドワーク等で、AI、IoT、ビッグデータなどの技術を活用する体験型学習の機会を得る。

【課題 3】 I C T活用スキルの偏り

(1) 情報リテラシー教育の強化

- ・情報の選択・整理能力を高めるため、信頼性のある情報の見極め方や、フェイクニュースへの対応方法など、情報リテラシー教育を充実させる。
- ・グループワークやディスカッションを通じて、複数の情報を比較・整理する力を身につけさせる。

(2) データ活用・整理スキルの実践機会の提供

- ・I C Tを活用したデータの収集・整理・分析の機会を探究活動で増やし、情報の選択・整理スキルの向上を図る。

(3) プレゼン資料作成だけでなく、論理的な情報整理の指導

- ・「発表資料を作成する力」だけでなく、情報の構造化、優先順位の判断、論理的に整理する力を意識させる指導を行う。

【課題 4】 I C T活用への主体性の不足

(1) 生徒主体の I C T活用

- ・I C T機器を用いたプレゼンテーションや動画編集、データ分析など、創造的な課題に取り組みさせることで、興味関心を高める。

これらの対策により、生徒のサステナビリティへの関心の幅を広げ、D Xへの理解と実践力を高め、そしてI C T活用スキルのバランス向上と生徒の主体的なI C T活用姿勢を育む。

令和５年度総合進学コース１学年と令和６年度総合進学コース１学年の比較から

アンケート結果から、以下の傾向が明らかになった。

1. サステナビリティへの関心度の低下

令和６年度１年生は、令和５年度１年生に比べて「サステナビリティ」への関心が低下していた。「SDGsについて興味関心がありますか？」という質問に対して、「はい」と回答した割合は令和５年度１年生よりも低かった。ただし、関心のある分野については、令和５年度１年生が「環境」「社会」「経済」の順だったのに対し、令和６年度１年生は「環境」「経済」「社会」の順となった。また、令和６年度１年生では「環境」に関心を持つ生徒の割合が70%近くに達しており、環境分野への関心の高さが特徴的だった。

2. DX（デジタルトランスフォーメーション）への認知度の低下

「DXという言葉について知っているか」という問いでは、令和５年度１年生の中には「知っている」と回答した生徒がわずかにいたのに対し、令和６年度１年生では全員が「知らない」と回答していた。DXに関する認知度は、令和６年度の方が大きく低下していることが分かった。

3. ICTの活用頻度は変化なし

「昨年度と比べて学校でICTを使う頻度は増えたか」という問いでは、令和５年度１年生と令和６年度１年生ともに「増えた」と回答した割合に変化は見られなかった。ICTの活用頻度に関しては、両年度とも同様の傾向が見られた。

4. ICTを活用して伸ばせた力の違い

「ICT機器の活用によって、教科の学習において自分の力を伸ばすことができたか？」という問いでは、令和６年度１年生の方が「はい」と答えた割合は令和５年度１年生よりも低かった。また、「ICT機器を活用する中で、伸ばすことができた力」に関する回答では以下の違いが見られた。

(1) 令和５年度１年生：

「発表資料を作成する力」41%、

「情報を検索する力」29%、

「自分の情報を守る力」「必要な情報を選択・整理する力」はそれぞれ15%。

(2) 令和６年度１年生：

「発表資料を作成する力」51.1%、

「情報を検索する力」30.9%、

「自分の情報を守る力」11.7%、

「必要な情報を選択・整理する力」6.3%。

令和６年度１年生では、「発表資料を作成する力」と「情報を検索する力」は向上していたが、「自分の情報を守る力」「必要な情報を選択・整理する力」は令和５年度に比べて低下していた。また、全体的に令和６年度１年生の方が主体的にICT機器を活用する生徒が少ないことが分かり、ICT活用スキルの向上を図る教育の必要性が示された。

アンケート結果をふまえ以下の4つの課題が考えられる。

1. サステナビリティへの関心度の向上
2. DXへの認知度向上
3. ICTリテラシー教育の強化
4. 主体的な学びの促進

これらの課題解決に向けて、以下の対策を考える。

【課題1】サステナビリティへの関心度向上

(1) 多角的な探究テーマの提示

- ・環境だけでなく、社会課題（貧困、ジェンダー平等など）や経済の持続可能性（フェアトレード、エシカル消費など）にも焦点を当てた探究テーマを設定する。

(2) 事例の紹介

- ・SDGs達成に向けた国内外の事例を紹介し、社会・経済分野の重要性に気づかせる機会を提供する。

【課題2】DX（デジタルトランスフォーメーション）への認知向上

(1) DX基礎知識の授業への導入

- ・情報科の授業や探究活動でDXの基本概念、最新のテクノロジー（AI、IoTなど）について学ぶ機会を増やす。

【課題3】ICT活用リテラシー教育の強化

(1) 情報リテラシー教育の強化

- ・情報の信頼性を見極める方法、個人情報の保護、フェイクニュースへの対応など、情報リテラシーを高める授業を充実させる。

(2) 実践的なICT活用の場面拡大

- ・プレゼン資料作成やデータ収集・分析など、ICT活用の場면을探究活動や発表機会に増やすことでスキルの定着を図る。

(3) 生徒同士の学び合いの促進

- ・ICT活用に長けた生徒が他の生徒にスキルを教える機会を増やし、ICTリテラシーの向上を促す。

【課題4】主体的な学びの促進

(1) 探究テーマの選択肢拡大

- ・生徒自身が興味・関心のあるテーマを選べるように選択肢を増やし、主体性を高める。
- ・校内外での探究発表やプレゼンテーションの機会を増やし、自分の学びを共有することで、自己肯定感と学習意欲を高める。

これらの対策を総合的に取り入れ、生徒のサステナビリティへの関心向上、DXに対する理解促進、ICTスキルの向上、さらには主体的な学びへの意欲を引き出す。

8. みらい東北

AL ネットワーク会議

連絡協議会

(1) 令和 6 年度 WWL コンソーシアム構築支援事業

第 1 回「みらい東北 AL ネットワーク会議」連絡協議会

①日時：令和 6 年 5 月 17 日（金）13：30～15：00

②場所：仙台城南高等学校本館 1 階会議室

③出席者（敬称略）：中澤宏一・青山勝・長田晃明・中島夏子

出町昌則・田代誠・菅原浩・成田奈穂・工藤啓之・福原知恵・細野敏明・水谷朋之・早坂晴子・
曳田雅史・渡邊哲・関口聡・渡邊伸明

伊藤俊・水戸良広・遠藤吉夫・尾上智宏・脇坂晴久・鈴木理恵・千葉俊哉・藤井久美・表潤一・
高橋和輝・大學麻子・伊藤まり子・佐藤ひなた

④内容：

拠点校・連携校が今年度初めて一堂に会する会議となった。拠点校より、前年度の総括と今年度 WWL 事業年間活動計画について説明、各連携校から今年度の探究活動の取り組みと海外交流についての紹介があり、活発な情報交換の場となった。

(2) 令和 6 年度 WWL コンソーシアム構築支援事業

第 2 回「みらい東北 AL ネットワーク会議」連絡協議会

①日時：令和 6 年 11 月 24 日（金）13：05～15：15

②場所：仙台城南高等学校本館 1 階小会議室よりオンライン配信

③出席者（敬称略）：中澤宏一・青山勝・北島みどり・大竹裕貴・中島夏子

田代誠・菅原浩・成田奈穂・工藤啓之・福原知恵・細野敏明・水谷朋之・佐々木良彦・
曳田雅史・渡邊哲・関口聡・渡邊伸明

伊藤俊・水戸良広・遠藤吉夫・尾上智宏・脇坂晴久・鈴木理恵・千葉俊哉・藤井久美・表潤一・
高橋和輝・大學麻子・伊藤まり子・佐藤ひなた

④内容：

8/9 に行った「令和 6 年度第 2 回みらい東北高校生プレサミット」第 1 回生徒実行委員会の様子を、本校教員鈴木の後に当日講話をいただいた金沢大学附属特別支援学校長中澤先生と東北工業大学総合教育センター准教授中島先生から報告いただいた。次に、仙台城南高校鈴木から 10/28 「令和 6 年度第 2 回みらい東北高校生プレサミット」第 2 回生徒実行委員会の様子について報告した。その後、プレサミットでの探究活動発表・ワークショップ時のカテゴリーを【科学・環境】・文化/教育・まちづくり・国際理解】の 5 テーマで行うことを確認した。今年度は昨年度の反省を踏まえ、各カテゴリー 2 教室に分けるため、各連携校の先生にも講評をお願いすることを共有した。次に 12/26 開催予定「令和 6 年度第 2 回みらい東北高校生プレサミット」第 3 回生徒実行委員会の詳細について話し合い、最後に令和 6 年度 WWL 事業 活動報告書」内容について共有し、先取り履修の希望状況について確認した。

生徒実行委員会

(1) 令和6年度 WWL コンソーシアム構築支援事業

「令和6年度第2回みらい東北高校生プレサミット」生徒実行委員会キックオフミーティング

①日時：令和6年7月30日（木） 15：00～16：00

②場所：仙台城南高等学校本館1階小会議室よりオンライン配信

③出席者【教員（敬称略）】：中澤宏一・青山勝・長田晃明・北島みどり・大竹裕貴・中島夏子・田代誠・成田奈穂・工藤啓之・福原知恵・細野敏明・木村秀浩・曳田雅史・関口聡・渡邊伸明・水戸良広・遠藤吉夫・脇坂晴久・鈴木理恵・相澤茂紀・千葉俊哉・藤井久美

【生徒実行委員】：吉田光輝・小林橘平・渡部貴裕・大友璃音・白川実音・畑中結芽・後藤菜月・西城遥斗・小森美空・佐々木美空・橋詰莉桜・齋藤香音・細谷翠幌・村井まこ・刘羽晗・柿沼優杏・照井海羽・阿達聖奈・大久保柚歩・黒澤理子・菅野遥斗・二瓶知樹・渡邊俊・山田舞桜・草薙奏・中村太誠

④内容：

各高校から3名の生徒実行委員が参加し、自己紹介を行った。その後、WWLの説明と昨年度のプレサミットの様子について、写真を入れながら説明した。最後に今後の予定と次回8/9の会議について共有した。

(2) 令和6年度 WWL コンソーシアム構築支援事業

「令和6年度第2回みらい東北高校生プレサミット」第1回生徒実行委員会

①日時：令和6年8月9日（金） 10：00～15：30

②場所：仙台城南高等学校本館1階会議室

③出席者【教員（敬称略）】：中澤宏一・中島夏子・田代誠・成田奈穂・工藤啓之・福原知恵・細野敏明・木村秀浩・早坂晴子・曳田雅史・関口聡・渡邊伸明・伊藤俊・水戸良広・遠藤吉夫・尾上智宏・脇坂晴久・鈴木理恵・千葉俊哉・藤井久美・表潤一・高橋和輝・伊藤まり子・佐藤ひなた・上西創

【生徒実行委員】：吉田光輝・小林橘平・渡部貴裕・大友璃音・白川実音・畑中結芽・後藤菜月・西城遥斗・小森美空・佐々木美空・橋詰莉桜・齋藤香音・細谷翠幌・村井まこ・刘羽晗・柿沼優杏・照井海羽・阿達聖奈・大久保柚歩・黒澤理子・菅野遥斗・二瓶知樹・渡邊俊・山田舞桜・草薙奏・中村太誠

④内容：

7月のオンラインキックオフミーティングを経ての対面開催であった。生徒実行委員長の挨拶から始まり、運営指導員である金沢大学附属特別支援学校長の中澤先生から「WWL事業を通じて見えたもの・期待すること」と題して講話をいただいた。次に本校カウンセラー進行で生徒実行委員同士が打ち解けるようアイスブレイクを行った。午後からは、カリキュラムアドバイザーである東北工業大学総合教育センター准教授中島先生から「WWL活動で目指すこと」と題して今年度の活動について講話をいただいた。その後、学校の枠を超えてグループを編成し、今年度のプレサミットサブタイトル作成をワールドカフェ形式で行った。各グループから活発な意見交換がなされ、最後は投票を行い「デジタル線路 未来を乗せて」というサブタイトルが決定した。

(3) 令和 6 年度 WWL コンソーシアム構築支援事業

「令和 6 年度第 2 回みらい東北高校生プレサミット」第 2 回生徒実行委員会

①日時：令和 6 年 10 月 28 日（月）15:30～16:50

②場所：仙台城南高等学校 会議室よりオンライン配信

③出席者【教員】（敬称略）：出町昌則・田代誠・成田奈穂・工藤啓之・福原知恵・細野敏明・水谷朋之・早坂晴子・曳田雅史・渡邊哲・出町昌則・田代誠・成田奈穂・工藤啓之・福原知恵・細野敏明・水谷朋之
水戸良広・遠藤吉夫・尾上智宏・脇坂晴久・鈴木理恵・相澤茂紀・千葉俊哉・藤井久美・表潤一・高橋和輝

【生徒実行委員】：吉田光輝・小林橘平・渡部貴裕・大友璃音・白川実音・畑中結芽・後藤菜月・西城遥斗・小森美空・佐々木美空・橋詰莉桜・齋藤香音・細谷翠幌・村井まこ・刘羽晗・柿沼優杏・照井海羽・阿達聖奈・大久保柚歩・黒澤理子・菅野遥斗・二瓶知樹・渡邊俊・山田舞桜・草薙奏・中村太誠

④内容：

生徒実行委員長の司会進行で行った。3/15 開催の「令和 6 年度第 2 回みらい東北高校生プレサミット」プログラム内容の確認を行った。休憩をはさんで、zoom のブレイクアウトルーム機能を使い、各係ごとに分かれ、各係のリーダー、プレサミットに向けての仕事内容について話し合った。その後、本校から先取り履修についての案内と次回の生徒実行委員会について確認した。

(4) 令和 6 年度 WWL コンソーシアム構築支援事業

「令和 6 年度第 2 回みらい東北高校生プレサミット」第 3 回生徒実行委員会

①日時：令和 6 年 12 月 26 日（木）10:00～14:00

②場所：東北工業大学 八木山キャンパス 1 号館 2 階 122 教室

③出席者【教員】（敬称略）：田代誠・菅原浩・成田奈穂・工藤啓之・福原知恵・細野敏明・水谷朋之・曳田雅史・渡邊哲・関口聡・鈴木豪
水戸良広・遠藤吉夫・尾上智宏・脇坂晴久・鈴木理恵・相澤茂紀・千葉俊哉・藤井久美・表潤一・高橋和輝・伊藤まり子・佐藤ひなた

【生徒実行委員】：白川実音・後藤菜月・西城遥斗・小森美空・佐々木美空・橋詰莉桜・齋藤香音・細谷翠幌・村井まこ・刘羽晗・柿沼優杏・照井海羽・阿達聖奈・大久保柚歩・黒澤理子・菅野遥斗・二瓶知樹・渡邊俊・山田舞桜・草薙奏・中村太誠

④内容：

生徒実行委員長の司会進行で行った。東北工業大学都市マネジメント学科准教授 菅原景一先生から「援助で人は幸せになれるのか」～青年海外協力隊で見たタンザニアの生活から考える～という演題で講話をいただいた。休憩をはさんで各係ごとに分かれて、プレサミットに向けた仕事内容を担当教諭が昨年度の司会原稿やプログラムを見せながら説明した。その後、プレサミットを行う校舎を見学し、本番に向けてイメージを膨らませた。

(5) 令和 6 年度 WWL コンソーシアム構築支援事業

「令和 6 年度第 2 回みらい東北高校生プレサミット」第 4 回生徒実行委員会及び第 3 回連絡協議会

①日時：令和 7 年 2 月 12 日（水）15:50～16:50

②場所：仙台城南高等学校本館 1 階小会議室よりオンライン配信

③出席者【教員】（敬称略）：中澤宏一・青山勝・長田晃明・大竹裕貴・中島夏子

田代誠・菅原浩・成田奈穂・工藤啓之・福原知恵・細野敏明・水谷朋之・佐々木良彦・曳田雅史・関口聡・渡邊伸明

水戸良広・遠藤吉夫・尾上智宏・脇坂晴久・相澤茂紀・千葉俊哉・藤井久美・表潤一・高橋和輝・伊藤まり子・佐藤ひなた

【生徒実行委員】：大友璃音・白川実音・畑中結芽・小森美空・佐々木美空・橋詰莉桜・齋藤香音・細谷翠幌・村井まこ・刘羽晗・柿沼優杏・照井海羽・阿達聖奈・大久保柚歩・黒澤理子・菅野遥斗・二瓶知樹・渡邊俊・山田舞桜・草薙奏・中村太誠

④内容：

3/15 開催「令和 6 年度第 2 回みらい東北高校生プレサミット」前最後の打ち合わせの機会であった。生徒実行委員長の司会進行で行った。12/26 生徒実行委員会の報告、3/14 プレサミット前のリハーサル、3/15 プレサミットに向けての探究発表予備調査結果の共有、生徒実行委員会の仕事進捗状況確認、本番に向けた参加調査票についての説明を行った。最後に、次年度「令和 7 年度 みらい東北高校生国際会議」に向けて仙台城南高校高橋教諭から、生徒実行委員の新しい活動についての提案を行った。

カリキュラム委員会

令和 6 年度 WWL コンソーシアム構築支援事業

第 1 回 カリキュラム委員会

①日時：令和 6 年 12 月 10 日（火）10:30～12:00

②場所：仙台城南高等学校 1 号館 5 階総合進学職員室よりオンライン配信

③参加者：中島夏子 遠藤吉夫 千葉俊哉 鈴木理恵

④内容：

3 月 15 日に開催する「令和 6 年度第 2 回みらい東北高校生プレサミット」のプログラム内容について検討した。午前中に行う探究発表の前に、全国高校生フォーラムでの発表を再度行う案やその審査項目についての紹介、また WWL 事業の構想にある DX 関連の講演を入れる等の提案をいただいた。

運営指導委員会・検証委員会

令和6年度WWLコンソーシアム構築支援事業

第1回「みらい東北ALネットワーク」運営指導委員会・検証委員会（オンライン）

- ①日時：令和7年3月21日（金） 15：30～16：20
- ②場所：仙台城南高等学校本館1階小会議室よりオンライン配信
- ③出席者（敬称略）：青山勝・長田晃明・大竹裕貴
伊藤俊・遠藤吉夫・脇坂晴久・鈴木理恵・相澤茂紀・藤井久美
表潤一・高橋和輝・伊藤まり子・大學麻子・佐藤ひなた
- ④内容：

3月15日に開催された「令和6年度第2回みらい東北高校生プレサミット」の振り返りを、アンケート結果をもとに行った。最初に拠点校から次のようなアンケート結果報告があった。今年度は、各連携校の生徒で構成された生徒実行委員が中心となって企画・運営を担い、多くの委員から「生徒主体のプレサミットだった」という前向きな声が寄せられた。昨年課題として挙げられた「カテゴリー分け」や「時間配分」に関しては、多くの点で改善が見られた。一方で、「ワークショップ」に充てる時間については、依然として「足りない」と感じた生徒・教員の割合が高く、今後の課題として挙げられた。また、台湾の姉妹校とのオンライン接続では、「音声聞こえなかった」との回答が生徒・教員双方から多く、委員からは「海外の生徒と交流できる貴重な機会であるため、できる限り改善してほしい」という要望があった。ワークショップに関しては、初対面の生徒同士が話し合いに慣れるまでに時間がかかることから、「昼食の時間を活用して交流を深める場を設けてはどうか」という提案があった。探究発表については、昨年課題として指摘された「質疑応答」は活発になってきたものの、現状では1往復のみで終わってしまうことが多く、「より深い議論を促して学びをさらに深めてほしい」という意見があった。

次年度の国際会議に向けたアドバイス

次年度の国際会議に向けて「国際色をさらに深めるための方策」について、以下のようなアドバイスがあった。

- ・ 東北各地域の国際的な取り組みについて、生徒同士が紹介し合う。
- ・ 各地域の国際的な団体を招き、講話をしてもらう機会を設ける。

また、委員から「次年度の国際会議は新しいことに挑戦するのか、これまでの取り組みを踏襲するのか」という質問があった。これに対し、拠点校からは「次年度は生徒実行委員の活動をさらに発展させ、国際会議での提言発信まで進めたい」との方針を示した。さらに、拠点校が本事業の構想で掲げる「みらい東北のサステナビリティとDXを牽引する人材育成ネットワーク」というビジョンと関連づけ、現在の課題として「DX」に関する取り組みが十分ではないことを踏まえ、生徒実行委員が行う探究活動において、各県の課題解決に向けたDXを活用した解決案の提示や、3年間のWWL事業の成果として「提言」を世界に発信することを目標とすることが述べられた。

次年度の国際会議の方向性について

次年度の国際会議は2日間の日程で開催する予定であり、大きくはこの2年間取り組んできた内容を柱としながら、生徒同士のアイスブレイクやワークショップの時間をさらに充実させるなど、プラスアルファの要素も取り入れたいという説明があった。

9. 連携校 探究活動報告

(1) 探究学習年間計画

月	活動内容
4	燕島での繁殖状況観察
5	燕島での繁殖状況観察
6	燕島での繁殖状況観察
7	燕島での繁殖状況観察
8	データ整理・周辺状況の確認
9	データ整理・周辺状況の確認
10	データ整理・周辺状況の確認
11	データ整理・周辺状況の確認
12	データ整理・周辺状況の確認
1	データ整理・周辺状況の確認
2	データ整理・周辺状況の確認
3	次年度に向けた準備作業

(2) 探究課題設定

八戸燕島のウミネコ繁殖状況のデータを蓄積し

- ・繁殖場所の違いにおける巣立ち率の違いについて
- ・年ごとの気温と繁殖開始時期の相関
- ・八戸港の月別水揚げ高と巣立ち率の相関
- ・ウミネコ繁殖を妨げる外敵の行動

と言ったものを明らかにし、「天然記念物 燕島ウミネコ繁殖地」の現状を明らかにする

(3) 指導過程

令和6年度の実績

4月 7日(日)～7月10日(日) 毎週日曜日 9:00～11:00

八戸燕島にてウミネコの産卵・育雛状況の観察・トレイルカメラからのデータ収集

この期間の毎週水曜日6校時「総合的探究の時間」にてデータを集計・確認

4月 7日(日) 観測範囲の確認・観測用目印の設置・トレイルカメラの設置

4月14日(日) 観測・アブラナ駆除

4月21日(日) 観測・産卵確認・糞の収集

4月28日(日) 観測・糞の収集・海岸清掃

5月 5日(日) 観測・糞の収集・海岸清掃

5月11日(土) 観測・孵化確認・海岸清掃

5月19日(日) 観測

5月26日(日) 観測

6月 2日(日) 観測・雛の羽毛成長を確認

- 6月 9日(日) 観測・標識付け作業の見学
 6月16日(日) 観測
 6月23日(日) 観測・アレチウリ駆除・幼鳥が海へ移動する様子が観察される
 巣立ち日
 6月30日(日) 観測
 7月 7日(日) 観測・トレイルカメラ・観測用目印の撤去
 7月29日(月) ウミネコ解剖
 3月 1日(土) 燕島保護区内のアブラナ駆除

図1 R4~6 神社境内の産卵数・雛数

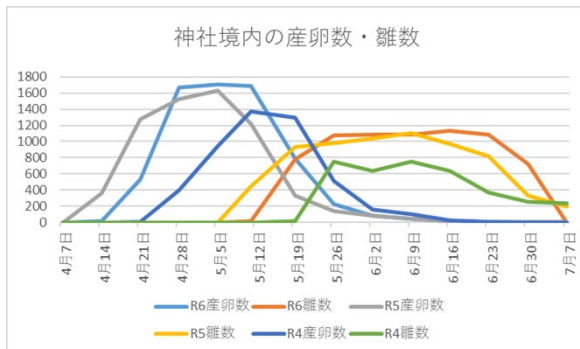


図2 燕島で撮影されたキツネ



図3 産卵数観察の様子



図4 ウミネコ解剖の様子



現在までに

- ・平均気温と産卵開始時期の相関
- ・3年間で産卵総数は変わらないが巣立ち率の変化が大きい
この変化には外敵の活動が関わっている
- ・八戸港の6月の水揚げ量と巣立ち率の相関

といったものを論じることができるようになってきている。

(4) 今後の課題と次年度への展望

- ・データを継続して蓄積し、上記相関関係についての検証を重ねる
- ・八戸近海の海水面温度の変化と産卵時期、巣立ち率の相関についての検証を重ねる
- ・アブラナ、アレチウリと言った植物の繁殖とウミネコ巣立ち率の相関を検証する

以上3点が課題であり、今後とも活動を継続してウミネコ繁殖地燕島の状況をデータとして残していきたい。

ウミネコ繁殖地八戸燕島の調査を通じて



かぶしまじんじゃ
燕島神社

燕島神社は、弁財天をまつり、商売繁盛、漁業安全の守り神として古くから地元の人々の信仰を集めてきた。

燕島は大正11年にウミネコの繁殖地として天然記念物に指定される。

2015年の火災により社殿が全焼するも約5年の歳月を経て再建された。

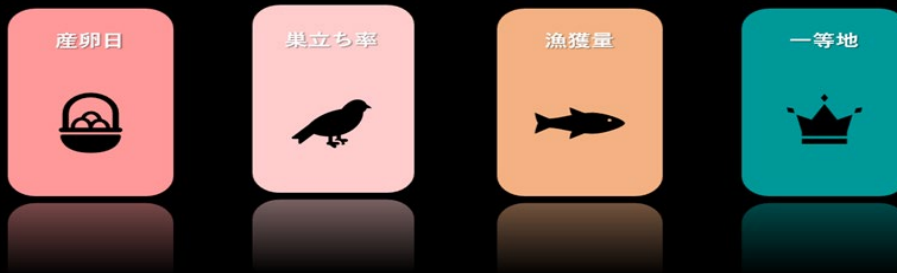
所在地: 青森県八戸市大字鮫町字鮫56-2

主な活動

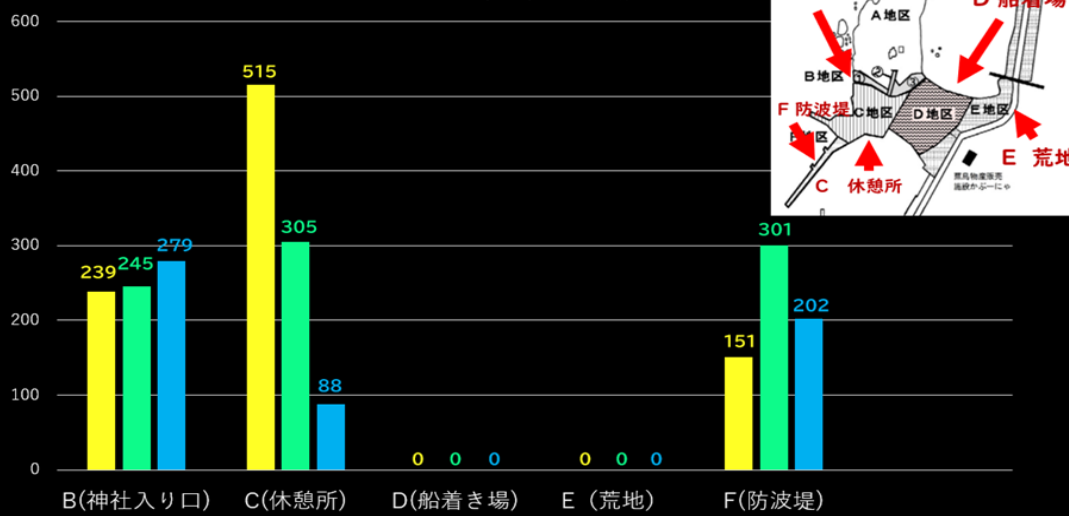
調査期間: 2024年4月～7月

- 巣材の準備
- ✓ 産卵数・ヒナの数を集計
- フンの分析
- ウミネコの解剖

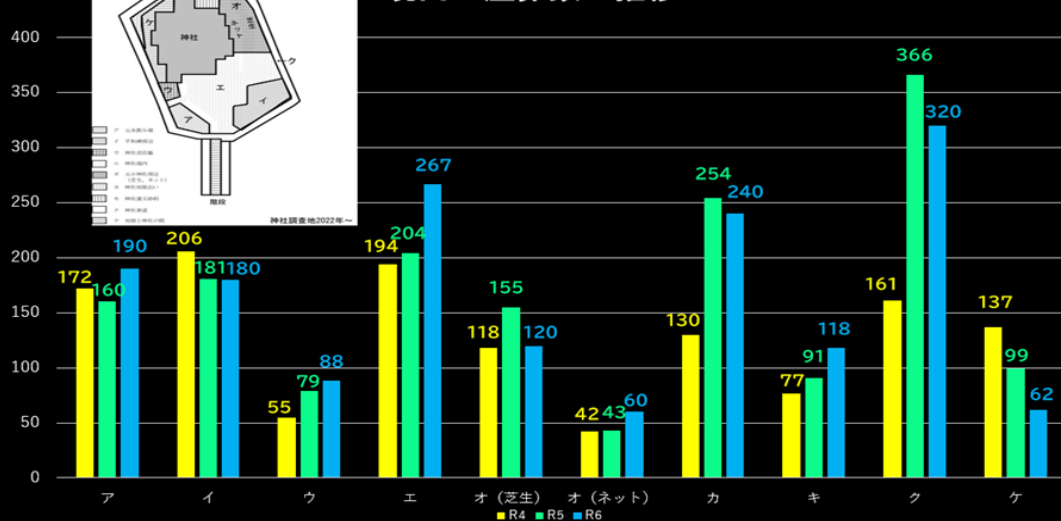
調査ポイント



フェンス外産卵数の推移R4～R6



境内 産卵数の推移R4～R6



連携校 2 盛岡白百合学園高等学校 ～探究活動について～

(1) 探究学習年間計画

今年度も教材「InspireHigh」を使った授業を構成した。昨年度を基に、外に目を向けてつながりを持てる探究」を目指したこともあり、当初は余白を持たせた計画を組んだ。

表 1 2024 年度高校一年生探究学習年間計画表（概略）

月	大テーマ	中テーマ	実施セッション/ワーク
4	自己	将来勉強したいことは?	オリエンテーション
5	自己	「私が最高!」を言語化	渡辺直美/WS「SNS 7 ルール」
6	自己	価値観を言語化	マサイ族の長老/「WS「大事なアイテム」
7	自己	自分・学校にハッシュタグ	ゆうこす /WS「学校 Instagram」
9	自己	キャッチコピーをつける	辻愛沙子 /WS「サムネ作成」
10	自己/社会	街でお気に入りの場所	隈研吾/WS「盛岡未来 map 作成」
11	自己/他者/社会	Inspired100 ガイダンス・個人探究	プロジェクト機能活用
1~	自己/他者/社会	アワード発表	現状報告・確認

(2) 探究課題設定

校訓を土台とし、課題を「自己理解から他者理解、そして社会へ」と定めた。一年生は内省化して自身の興味の幅や価値観を広げ、自身の平和を培って周りにも心を寄せる姿勢の育成を目的としている。さらに、「外に出よう・繋がろう」を副題に、郊外活動への参加促進にも注力した。郊外活動への参加を通して視野を広げ、挑戦する姿勢作りと進路実績への繋がりを目指した。

(3) 指導過程

今年度は多くの方々とご縁を頂き、様々な事柄に挑戦できた結果、表 2 の通りとなった。

表 2 2024 年度高校一年生探究学習年間計画表（概略）

月	予定セッション	実施セッション/ワーク	備考
4	オリエンテーション	オリエンテーション	
5	渡辺直美	<u>追加</u> My project sheet の作成 (G)、プロジェクト機能の練習・実践 (個)	個人探究練習
6	マサイ族の長老	<u>追加</u> 違うって怖い? /「WS 好き・得意から自己発見」	6/12 BS 講座実施

7	ゆうこす	<u>追加</u> 「WS 盛岡白百合ハッシュタグを 10 個考える」 <u>変更</u> 辻愛沙子 /WS「サムネ作成」	
9	辻愛沙子	<u>変更</u> 隈研吾「WS 盛岡ランキング・キャッチコピー作成」、「座談会」「WS 私たち ちがまちを作る」「WS 昔×新共存まちづくり」	9/20 座談会実施
10	隈研吾	<u>追加</u> 「WS 地元について考える」、 <u>変更</u> 篠崎恵美/「WS「花」で想いを伝える」 「WS 趣味 vs 仕事スタンスシェア会」	10/24 カトリック 教育研究会実施
11	プロジェクト機能活用	<u>追加</u> ジム・ケリー/「WS 環境問題対策提案」	

12	現状の報告	追加 高橋尚子/「WS DX×平和アイディア」	
1		追加 ラジェンドラ・シン/「WS 水問題対策アイディア」「WS 英雄になるには」	
2		追加 持続可能な未来を考える/「WS ミツロウラップ制作」	2/21 WS 実施
3		追加 次年度を見据える/「盛岡市の取り組みと探究」	3/5 講義実施

特に今年度は、「他者との対話」（佐藤 1995）を重視し、合同クラスで実施し他者との対話の場を多く設定した。基本構造は、教材動画視聴後に一連の流れで完結し、後日 WS を実施。GW も都度実施した。個人探究と並行して非認知能力の育成も図りながら活動を行なった。また、郊外イベントや大会参加促進も強化した。主にメールで配信した結果認知も高まり、表 3 の通りとなった。なお、WWL プレサミには、Inspired100 出品探究を基にして 5 人を選出した。

表 3 2024 年度 郊外探究イベント参加状況

イベント名	参加者数（内訳）
もりおか企業共創型探究プロジェクト -青の問い-	4 名（高一 1 名、高二 3 名）
盛岡という星でタンキュー部	2 名（高二 2 名）
SDGs QUEST みらい甲子園 2024 年度岩手県大会	6 名（高一 4 名、高二 2 名）
第 5 回 SB Student Ambassador 東北大会	8 名（高一 4 名、高二 4 名）
2024 年度全国高校生フォーラム	1 名（高一 1 名）
Inspired100	選出 3 名（高一 1 名、高二 2 名）
第 2 回みらい東北高校生プレサミット	発表者 5 名（高一 3 名、高二 2 名）、実行委員 3 名（高二 3 名）

さらに外部講師との接続依頼に成功し、校内で探究講座を開催した。詳細は、表 4 の通りである。

表 4 2024 年度 外部講師による高一探究講座（校内）実施状況

イベント名	ねらい	日時	講師
盛岡という星で BASESTATION オリテン	郊外探究活動を知る	6/12（水）7	盛岡という星で BASE STATION 山本様・赤坂様
紺屋町座談会	世代間交流を通してまちを知る	9/20（金）6, 7	紺屋町まちづくりの会 巴染工社長東條様・東家専務高橋様・木村実業副社長木村様
SDGs（ミツロウラップ）WS	持続可能な未来を考える	2/21（金）5, 6, 7	to errai 湊様
盛岡市と探究（仮）	他校事例から探究活動を広げる	3/5（水）6, 7	盛岡市経済企画課 課長補佐 佐藤様

来年度に関しては、岩手未来機構様とアートの側面からの探究活動を企画している。

（４） 今後の課題と次年度への展望

１）課題：見通しを持ったカリキュラム作成と「探究」への伴奏力の強化

軸を持ったカリキュラム策定と教材の見直しを図ることで、共学化に向けても整える必要がある。また、探究とは何かを教員間での理解を改めていく必要は大いにあると感じた。

２）展望：種まきと耕しの育成 ～外へと挑戦する姿勢作りと認知力向上を目指して～

探究のコマを、私は「種まき」と位置付けている。今年度は外と通じて広がりを見せ、様々な角度から種まきができた。次年度はさらに外へ上へ向かって生徒の活動と活躍場所を増やし、進路実績にまで大々的に繋げていく。モデルはあれど正解がないから、楽しみで仕方がない。

未来をデザインするボトル

～楽しさと環境保全をつなぐ～

盛岡白百合学園

1年 小松瑞稀



2.なぜマイボトル？

- ビニール袋の廃棄対策

→**エコバックが普及している。**

- ペットボトルの廃棄対策は...？

- 自分だけのデザインを楽しみながら持ちたいと思う動機を提供。

- 環境保全とデザインの楽しさを同時に体験。



4. 実際に行った活動

- 総合探求の授業にプラスチックゴミの現状や環境への影響について講義を通して学習
- プラスチックの代わりとして繰り返し使用できる「**ミツロウラップ**」を制作

「大切に使いたい」や「プラスチック以外でラップを作れることに驚いた」など感想



<https://msgsp.jp/>
盛岡白百合学園中学高等学校

5. イベントタイトルと目的

■イベントタイトル

「世界にひとつだけのマイボトル作り」

“世界に一つだけ”というフレーズを使うことで、参加者が自分だけの特別なボトルを作れるワクワク感を演出できる。

■ 目的

- オリジナルのボトルを作ること環境の意識を高める
- 楽しみながらマイボトルを使う習慣を広める

9. 実際に開催するには

- ・ 社会活動委員会の年間活動として開催
県の環境団体に問い合わせ、連携

公式サイトなどで申請書類をダウンロードしメールなどで連携を図る。

- ・ 制作費は環境団体の助成金を活用

子どもゆめ募金、地球環境募金などの助成金活用



<https://yumekikin.niye.go.jp/download/index.html>

10. 目指す未来の世界

■ 一人一人が環境を意識する世界

マイボトルを持つことが習慣になり持続可能な行動を選択できるようになる。

■ 次世代につながる持続可能な社会

今の行動が未来の環境を守り、より良い地球を次の世代に残せる世界に。



1. 年間計画及び実施状況

(1) 1年生の計画及び実施状況

4月から夏休み前までの総合的な探究の時間は、週1時間礼法を実施している。そのため、総合的な探究の時間は、夏休み以降にスタートしている。そこで、夏休み期間中に、国内外で「どのようなことが起こっているのか」、「何が問題となっているのか」などを知る為に新聞記事を活用した。生徒たちが、各自で興味関心を持った新聞記事を選び、その記事の要約および考えたことなどを文章にまとめさせた。その後、グループ活動を通して、お互いに発表し合い、意見を共有した。

9月中旬に、探究活動に関するガイダンスを実施し、探究学習と調べ学習の違いを明確に伝えた。探究学習は、生徒たちが課題を見つけ、オリジナルの解決策を考え、実際に検証する活動であることを説明した。そこで、今年度は、以下の4つのテーマを提示し、生徒たちは、4つのテーマから1つを選び、課題解決に向けた活動をグループで行った。

- 1 聖霊学園高等学校や秋田の魅力を伝える新しい方法を考える
- 2 高校生の理想的な学習方法を考案する
- 3 身近な環境問題を解決するためにできることを考える
(食品ロス、エネルギーの無駄使い、ゴミ問題など)
- 4 平和を維持するためにできることを考える
(地域や国際的な平和も含む)

1月中旬には各クラスで予選会を実施し、2月下旬には学年発表会を行った。発表会では、生徒たちが提案した課題解決のアイデアを発表し合い、互いに学び合う貴重な機会となった。また、振り返りシートを通じて、2年生に向けた探究テーマの希望調査を行い、この結果を基に次年度の探究活動計画を決定していくことになっている。

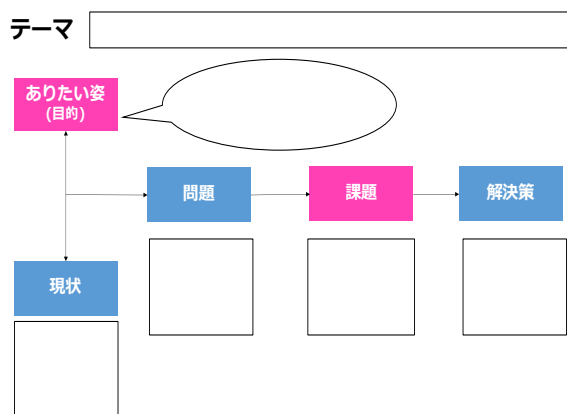
(2) 2年生の計画及び実施状況

全てのコースで週1時間実施した。学年初めには、柔軟な思考力を高めることを目的にして、「マシュマロチャレンジ」を行った。この活動では、限られた素材を使い、チームで協力して創造的な解決策を見出すことに重点を置き、生徒たちは好奇心を持って取り組み、発想力とチームワークを育んだ。

さらに、今年度は秋田銀行地域価値共創部の三浦様、秋田市役所の田村様を招き、新しいビジネスを起業する際に必要なノウハウを探究活動に活かせるというご講演や、秋田県が抱える課題についてのご講演を聞く機会にも恵まれた。講演を通して、現状の把握と理想の設定、そしてそれに向けての進め方について、生徒たちは深く考えるようになった。

図1は、講演会で用いた資料の一部である。文献調査やアンケートなどで現状を調査し、自分たちが考える理想像を定めた後で、問題、課題そして解決策と進めることが大切だと教えて頂いた。そ

図1 総探の進め方の講義で使用した資料



して、地域活性化、福祉、教育、環境などのテーマに基づき、国際コース 10 グループ、特進コース 10 グループ、総合進学コース 19 グループに分かれて活動を進めた。各グループに担当教官が決定され、夏休み前までに課題テーマを決め、アンケート調査、実験、インタビュー、文献調査などを通じて、オリジナルの課題解決方法を見出し、検証することにした。さらに教員向けの研修会も実施し、探究活動における教員の役割や支援方法を学んだ。12 月にはクラス予選を行ない、1 月下旬には外部審査員を招き学年発表会を実施した。その後、2 月上旬に秋田県総探発表会に 7 グループが出場し、それぞれのテーマに基づいてポスター発表を行った。以下は発表されたテーマの一部である。

- 1 秋田県活性化のための取り組み
- 2 海洋ゴミを減らすためには？
- 3 認知症の人が過ごしやすい環境を作るには？
- 4 高齢者の健康寿命を延ばすためには？
- 5 不登校の人たちの生活に $+ \alpha$ を
- 6 災害には何が必要か？
- 7 性別の違いを当たり前にするにはどうすればよいのか？

どの発表も高く評価され、生徒たちはより一層主体的に活動に参加し、次の課題への意欲を新たにした。次年度も、現在の探究テーマでの活動を継続し、1 年生向けの発表および論文作成を予定している。

(3) 3 年生の計画及び実施状況

特別進学コースでは、夏休み明けにクラス内で発表を実施した。生徒たちは自分の興味や進路に基づきテーマを設定し、関連する課題を発見し、解決策を提案・検証した。この活動により、生徒たちは論理的に考え、他の生徒と意見を交換する力を養うことができた。

国際コースおよび総合進学コースでは、12 月上旬に 2 日間にわたる発表を実施した。生徒たちは自分の興味に基づきテーマを設定し、課題を発見して解決策を考え、検証する活動に取り組んだ。発表を通して、生徒たちは自分の意見を明確に伝え、他の生徒と意見交換を行い、学びを深めることができた。発表後には活発な質疑応答が行われ、新たな視点を獲得するための意見交換が活発に行われた。この活動により、生徒たちは論理的思考力や創造的解決策を提案する力をさらに高めることができた。

(4) 今後の展望

今後の総合的な探究活動では、さらなる深掘りと多角的視点での課題発見が求められる。実社会とのつながりを意識した課題設定とその解決策の具体化が重要となる。そこで、外部講師を招き、現場での実践的な知識を取り入れ、生徒たちの探究意欲と課題解決能力をさらに高めたい。また、他の学校や地域との交流を通じて、多様な視点や意見を取り入れ、実践的で創造的な成果を生み出せる工夫をしたい。そのなかで、3 年間の継続的な研究活動を推進し、学年間での成果やアイデアを次年度に引き継ぐ体制を整備することにも努めたい。



不登校の人たちの生活に+αを

聖霊学園高等学校2年

明石日菜子 佐藤心咲音 阿部日花里 猪田美羽 杉本莉子

はじめに

近年、小中学生の不登校者が増加しており、社会的に問題になっている。不登校になってしまうことで、学校に通っている子たちと学習の力、学習環境に差が出てしまう問題に着目し、改善したいと考え、このテーマに至った。また、不登校本人の気持ちを整理し、自分自身と向き合ってもらえる方法を見つけることで、前向きに行動できることを期待する。

仮説… 不登校本人が使用するアンケート、日記

表に出づらくわかりづらい不登校の人の気持ちや感情を知れるアンケート、日記を作成することで、日々の成長を記録し、自己肯定感を上げることができるのではないかと考えた。(日記、アンケートにした理由入れる?)

【「不登校」問題】

不登校状態になってしまう小中学生が日本で11年連続で増加
(2024年 34万6482人 前年度比↑4万7000人余・15%)

学校に行っている人たちと
同等の教育を受けることができる環境を作りたい



【インタビュー】

不登校の子たちへの対応、
してほしいことなどを調査

「親の居場所」インタビュー協力
非営利法人KOU



＜インタビュー結果＞

Q. 不登校への対応は?

- ・悪いことをしているという目で見ない
- ・家族で話し合える環境を作る

Q. 本人がすべきことは?

- ・自分への理解を深める
- ・表現の仕方を見つける
- ・心の整理をする

同等の学習よりも
気持ちの整理が重要なのでは?

不登校の人の気持ちや感情を知れるアンケートの作成

- ・スクールカウンセラーのアンケート版
- ・アンケートを踏まえて、今後社会に適応できるようなアドバイスを



アンケート
紙? スマホ?

書いたアンケート
誰の手に渡る?

アドバイス
内容、仕方は?

(紙のアンケートだといつ渡す? 誰がアドバイスするのか?)



電子のアンケートの作り方がわからない
書いたアンケートを先生や保護者に見られたくないかも…

【仮説の再設定】

自分の気持ちの整理と人に自分を説明
できるようにスキル磨いてほしい



【日々の生活を記録できる一冊を】



【チャレンジカード】

- ・窓を開ける
- ・ラジオ体操をする
- ・自分の使った食器を洗う
- ・ジャンプする など…

「やってみる」という
意識を作り出す

【気持ちシール】
うれしい、楽しい、
悲しい、いらだち など…

天気、日にちをメモ

Step1

毎日一つのチャレンジカードを
とり、行ってもら

Step2

その日の気持ちシールと共に
日記に貼り付ける

カーテンを開けて外を見る・
目を向けてみる、という意識
にもつながっていくのでは
ないか

日々の気持ちの成長と積み重ねを見える化することができる

【KOU様へ日記の感想を依頼】

＜依頼＞試作品の日記を実際に使ってもらった感想、改善点



・不登校状態の人は
自己肯定感が低くなりがち
→実現しやすい毎日の目標◎



・「怒り」のシールを
少なくしたほうが良い

元々あるシールを活用する人が多い
チャレンジをやり終えた後に貼るなら
「ニコニコ笑顔」シールを増やしたほうが良い

＜先生方へのインタビュー＞



- ・親子の会話のきっかけになるものが欲しい
- ・日中何してたかを知りたい
- ・子供のことは何でも知りたい



今後の展望

◇日記の改善 〡 親も関われる日記にする

1日ではなく1時間のチャレンジカードにする

◇フィードバック … 実際に使ってもらった人にフィードバックをもらう。その後の改善に活用する。

出典・参考資料

・不登校最多 低年齢化と長期化が心配だ
・不登校新聞の石井志郎さんに聞いた「不登校の子どもの「居場所」はどこにあるのか」「不登校との付き合い方(21)」 | ベネッセ教育情報サイト
・「小さな習慣の例」47個の習慣リストとその小さな一歩を公開します - めんと〜れ

謝辞

非営利法人KOUさん

聖霊高校スクールカウンセラー菅原先生

聖霊高校2年部の先生方



災害対策には何が必要?! ~○○○○○レシピ♡~

聖霊学園高等学校2年 工藤未央 小田長美弓 城地心海

はじめに

2023年7月に私たちの学校である聖霊学園高校が大雨の影響で洪水の被害を受けた。このことを受け、災害を身近に感じ、私たちも災害対策についてより意識を持つようになった。そこで今回、避難所で困っていることについて調べ、解決策を考えた。

仮説・・・避難所では電力の供給が足りていない→手動の発電機を作ればよいのではないか。

スマートフォンの普及や家電の発達により、電力をより使っている今、災害が起こった時に電力の普及が問題になるのではないかと考えた。

調査・実験

秋田市役所の総合防災安全課にインタビューした。

Q、災害時に電力の供給に困っているのか？

A、今のところは困ってない東日本大震災を機に、大きな避難所の施設は自家発電機を導入している。

Q、災害時に避難所で困ったことは何か？

A、トイレやプライベートスペースに困っている。
避難所の簡易トイレを使い慣れていない、使い方がわからない人が多い。また避難所の大きさには限りがあり、個人スペースの確保が難しい。

○調査して分かったこと

・仮説である、「避難所では電力の供給が少なく困っている」は正しくなかった。

○考察

避難所では「トイレ問題」が一番の課題なのではないかと考えた。

簡易トイレキットをセットしてトイレをしやすくできるような「トイレ便器」を段ボールで作成すればよいのではないかと考えた。
→物資が入っていた段ボールを再利用することでSDGs12の「作る責任 使う責任」も達成できるのではないかと考えた。

○実験

材料：段ボール、はさみ(カッターがあればなおよい)

○実験1



反省点

- ・不安定さを感じる
- ・蓋がないため臭いが気になる
- ・穴が大きすぎて危ない

○実験2



- ・反省を踏まえて
- ・段ボールを厚くして安定感をだした
- ・蓋をつけた
- ・穴を小さくして、壊れにくくした

○座ってみたときの感想

実験1の感想

- ・安定感がない
- ・危ない
- ・安心して全体重を預けることが出来ない

実験2の感想

- ・安定感がある
- ・安心感がある
- ・通常時の時と同じくらいのホールド感がある

○実験結果 簡単に作れて簡単に使えるトイレが出来た

○提案&まとめ

- ・段ボールレシピを避難所に置く
- ・段ボールレシピを学校において、災害意識を高める
- 一人ひとりの災害に対する意識を高めることが大切

あるものを活用して作れる！→



○ほかの段ボールレシピ

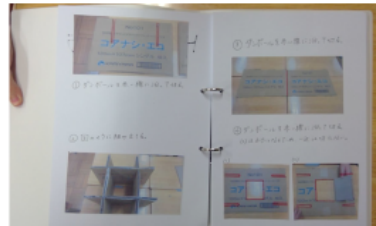
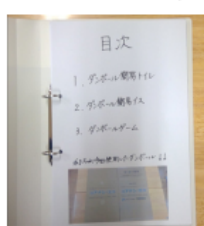


段ボールテーブル・いす



段ボールゲーム

○段ボールレシピの完成



今後の展望

①段ボール便器の改良→市役所の方に感想をいただき、「便器の水漏れ対策」、「強度」についてのアドバイスをいただいた。それらを踏まえトイレの「安全・安心・迅速」の面について改良していく。

②レシピの設置→学校に設置することで日頃から災害への意識を高めることができる

避難所に設置することで、災害が起こった時に、段ボールで簡易トイレ便器や簡易テーブル・いすを作成し、避難所での生活をなるべく快適なものにすることができる。

出典・参考資料

総合防災課 | 美の国あきたネット
防災安全対策課 | 秋田市公式サイト
食事をする時などに簡易テーブル | 家電と地球温暖化 | 地球温暖化と対策 | 省エネ家電 DE スマートライフ - 温暖化の影響と防止 - (一般財団法人 家電製品協会)

謝辞

秋田市役所総合防災安全課に、ご指導、ご助言を賜り、感謝申し上げます。また、椅子の体験に協力していただいた聖霊学園高等学校教員のみなさまにも感謝申し上げます。

(1) 探究学習年間計画

1) 1年

月	学 習 活 動
6	ガイダンス「探究とは」、探究の手法を学ぶ（探究シミュレーション）
7	探究の手法を学ぶ（東北芸工大ワークショップ）、探究テーマを模索する（校内探索）
8	探究テーマを模索する（グループワークショップ）
9	1・2年合同発表会、探究テーマを模索する（希望シートまとめ）
10	ゼミ分け、アイスブレイク、ゼミ内ガイダンス
11	グループ分け、課題の設定、グループワーク
12	グループワーク、中間発表（1）
1	グループワーク
2	グループワーク、中間発表（2）
3	自己評価・振り返り

2) 2年

月	学 習 活 動
4	昨年度の振り返り・今年度のスケジュール確認、各グループ課題の見直し
5	情報分析（整理・分析）
6	発表準備（全体）外部講師
7	発表準備・リハーサル、発表・学年ポスターセッション、代表選出
9	発表・代表者プレゼンテーション（1・2年合同）
11	探究活動（個人）・ガイダンス
12	探究活動・個人探究を進めるにあたって、3学年代表の発表を視聴、テーマ設定
1	探究活動（個人）・テーマ設定
2	探究活動（個人）・情報収集
3	探究活動（個人）・今後のスケジュール

3) 3年

月	学 習 活 動
4	個人探究 情報収集・整理分析
5	個人探究 情報収集・整理分析
6	個人探究 情報収集・整理分析
7	個人探究 情報収集・整理分析・まとめ
8	個人探究 まとめ
11	発表準備（発表用スライド作成）、クラス発表
12	クラス発表、学年発表会（各クラス代表1名）、振り返り（活動全体を振り返る）
1	振り返り（活動全体を振り返る）

(2) 探究課題設定

1) 1年生

「学校を良くしよう」というテーマから、現状を調べ、改善したいテーマを考えた。同じテーマを考えた生徒同士でグループを編成し、テーマに関する課題をグループごとに自由に設定した。楽しめる学校行事の提案や校内の美化などグループごとに探究を深める活動になった。

2) 2年生

前期は昨年度から継続のグループ活動（SDGs17のテーマごとに分かれてのゼミ形式）。まとめとして学年全体でのポスターセッション、さらに1・2年合同での代表グループ発表を実施した。後期は個人探究。SDGsの枠を外し、個人の興味関心・問題意識に応じてのテーマとした。



図1. 2学年全体でのポスターセッション

3) 3年生

2年次後半からスタートした個人探究活動をさらに深めるために、探究のサイクルを繰り返した。自分の進路に関わる分野を中心に課題を探っていったことにより、自分事として強くとらえることができ、進路意識の向上にもつながった。

(3) 指導過程

1) 1年生

東北芸術工科大学の学生からテーマ設定に関してアドバイスをもらった。また、テーマごとにゼミの担当教員を決めて、クラスの枠を超えて、学年全体で指導した。

2) 2年生

各クラスの担当教員は2～3名、複数の目でアドバイスを与えながらの展開としている。昨年度に引き続き、東北芸術工科大学の学生にも直接アドバイスをしてもらう機会を設けた。

3) 3年生

1クラスに3名の教員を割り当て、担当する生徒を決めて指導にあたった。少人数を担当することにより、きめ細やかな指導を行うことが出来た。

(4) 今後の課題と次年度への展望

1) 1年生

教員間で指導技量に差があることが課題だと感じる。教員同士の情報交換を頻繁に行い、指導力向上を図っていきたい。

2) 2年生

教員の関わり方、指導スキルに差があること。担当任せになっていること。

3) 3年生

専門的な知識がないと指導できないと思っている教員が多い。生徒の取り組みに単純に質問していきながら、生徒が主体的に取り組むきっかけを作ればよいと思う。

ゴミはこれからもゴミなのか！？ ～住み続けられるまちづくりを～

八鍬七奈子

渡辺美七海

鈴木拓真

研究背景

洪水の後の最上川にゴミが散乱する
様子に驚いた

➡ 環境破壊

ゴミを減らすための工夫を

考察

1、2より

生活系のゴミが多い

→生活系のゴミのポイ捨てを少なくすることが
解決につながる。

私たちにもできること

ゴミ箱を投票箱にする

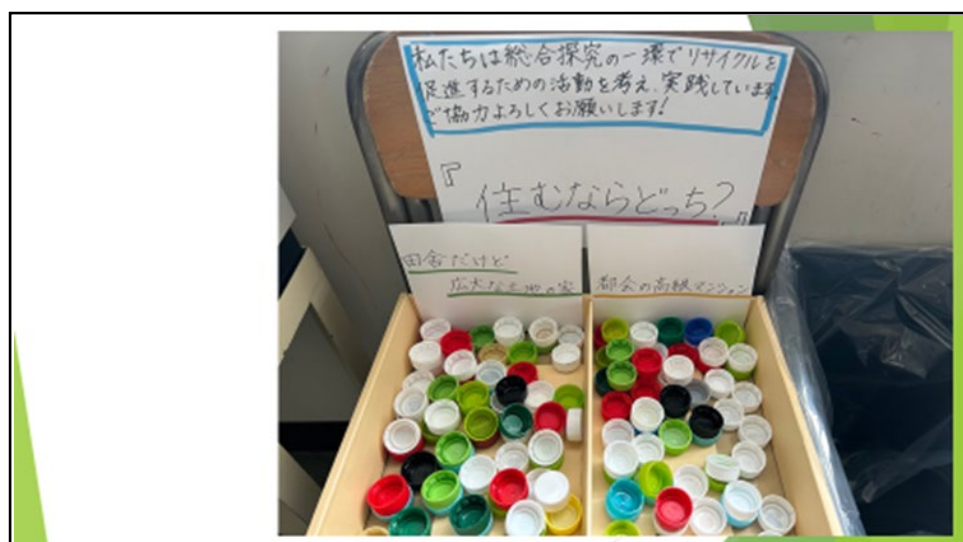
タバコの吸い殻入れを投票箱にするというイギリス発の
ユニークな取り組み(Ballot Bin)。

投票箱には思わず投票したくなる質問が書いてある。

(例)「ロナウドとメッシ、どちらがうまいサッカー選手？」

参考 <https://elemenist.com/article/1967>





水平リサイクルとは？

ペットボトルを回収



ペットボトルに再生



結論

私たちがゴミを正しく分別し、
回収する



ゴミがゴミではなくなる

(1) 探究学習年間計画

本校は「普通コース」「文理選抜コース」「特進コース」「一貫コース」という4つのコースがあり、それぞれのコースがある程度の独自性をもって探究活動を実施している。本報告では「普通コース」で実施している探究活動における年間計画を報告する。1年生・2年生の普通コースについては、年度の最後に「自分の興味のある分野・進路として考えている分野に対する探究発表」を行うことをふまえて年間計画を作成した。

1) 探究基礎①(7月)

株式会社エナジードの教材である「エナジード・コア」について、1年生はボリューム1を、2年生はボリューム3を用いて探究活動を実施するための基本的なマインドセットを学んだ。

2) 探究基礎②(12月)

株式会社エナジードの教材である「エナジード・コア」について、1年生はボリューム2を、2年生はボリューム5を用いて探究活動を実施するための基本的なマインドセットを学んだ。

3) 探究演習①(12月～1月)

1年生においては、自分自身の身近な課題(部活・学習・人間関係など)に焦点を当てて、ゴールから逆算する逆算思考をベースに課題を分析する「自己探究」を実施した。2年生については、自分の進路について「どのような分野において、どのような活動をするか」といった「進路探究」を行った。

4) キャリア探究「社会人対話」(12月)

社会人62名を本校に招き、「これまでにどのような人生の選択を行ってきたか」「どのような価値観を大切にしているのか、それを選択したのか」についての対話を行った。

5) 探究演習②(2月～3月)

「自己の探究」を深めるとともに、「どのような社会課題に取り組んでいきたいのか」ということに関するまとめ・発表を行った。

(3) 探究課題設定

探究課題については「自己探究」および「どのような社会課題に取り組んでいきたいのか」というものを大テーマとし、各個人の興味・関心のなかでそれぞれに課題を設定していった。1年次においては「自分自身が抱える身近な課題」について、その課題をどのように解決すればよいのか、これまでの自分にはなかった視点を取り入れつつ、一人ひとりがそれぞれに課題を設定した。また、2年次には、研修旅行などを通じて見ることができた様々な社会課題に対して、「どの

ように自分に関わっていくのか」という観点で、自分自身の進路をふまえつつ、一人ひとりがそれぞれに課題を設定した。

(3) 指導過程

1) 探究基礎について

株式会社エナジードが提供している「エナジード・コア」を、探究活動に対するマインドセットをつくることを目的として取り組んだ。ボリューム1においては、「次の時代に求められる人の力」をいうテーマで「感覚的に気づく力」「原因から発案する力」「巻き込み実現する力」について、ボリューム2では「描いた未来を実現する力」をテーマに、「捉え方を変える力」「ゴールを決め、逆算する力」「動く力」について指導を行った。新しい取り組みに対する負担感が反省としてあがっていたことから、指導ではクラス担任等をお願いするのではなく、学年に配属されている「探究・ICT推進部」のメンバーが学年全体を指導する体制をあえて取って実施した。

2) キャリア探究「社会人対話」について

生徒たちが「自己の探究」を深め、さまざまな社会課題についての実際の取り組みに、自分の五感で触れることを目的として、社会人62名・生徒475名で対話を行った。具体的には、社会人1名に対して生徒8名ほどの小グループを62個作成し、それぞれの対話者が「これまでの人生において、どんな選択をしたのか」「どのような価値観をもとに、その選択を行ったのか」について、60分程度で対話する場とした。今回の主眼を「選択と価値観」とし、職業そのものにはあまりフォーカスしない対話を、対話者にはお願いをした。「講話」ではなく「大人との対話」を行うことで、生徒たちには今までの人生で触れたことのない新しい視点を得ることにつながり、その後の探究活動に生きる取り組みとなった。

3) 探究演習について

1年生では「自己探究」、生徒が自分自身の身近な課題（部活、学習、人間関係など）に焦点をあて、課題を解決するための逆算思考を学んだ。まずは、それぞれの課題を洗い出し、その解決策をゴールから逆算して考える方法を実践することによって、生徒は問題解決の道筋を明確にし、自己管理能力を高められたように感じる。次に、2年生では進路に関する「進路探究」を取り組み、生徒が自分の興味や適性を学び自己分析を行った後、具体的な職業や進学先に関する情報を調査し、進路選択に必要な準備を意識した。この探究活動によって生徒は進路に対する不安を軽減し、自分の将来に対して主体的に姿勢を育むことができた。

(4) 今後の課題と次年度への展望

今年度の課題は、総合的な探究の時間において探究的な活動を行うための時間確保が難しい点である。このため、エナジードと社会人対話といった活動を総合的な探究の時間とは分けて実施す

ることになり、時間配分の調整が必要であった。「探究・ICT 推進部」のメンバーを中心に実施する一方で、新しい取り組みに対する負担感が先生方に見られたことが反省点である。

探究活動の DX 化とともに深化を目的として、令和 7 年度の DX ハイスクール補助金に申請を行っている。また、総合的な探究の時間以外に課外活動として探究を行う土壌を形成していく予定である。これによって、これまでよりも深い探究活動を実施していくことができると考えている。



目次

- なぜマレーシアなのか
- 東北の地域文化と課題
- マレーシアの基本情報と歴史
- マレーシアのイスラム文化
- マレーシアにおける
宗教 伝統の継承方法
- 東北に生かしていくためには
- 結論



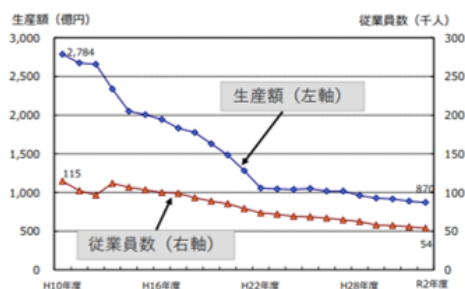
東北の地域文化における課題 ～伝統工芸品の課題～



課題点

- 東北に限らず日本全国で生産額従業員数が減少
- 職人の高齢化
- 若者の流出
- 後継者不足
- デジタル化の遅れによる情報発信不足

■ 伝統的工芸品の生産額・従業員数の推移



出典：一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会

マレーシアのイスラム文化

ポンドック

- ・伝統的な住込み制のイスラム教育のための塾。
- ・イスラム知識伝達の間

モスク

- ・イスラム教徒が礼拝する場所
- ・いくつかの種類がある
- ・子供たちの教育の間
- ・交流の間
- ・住民たちの知識や経験を共有する間
- ・コミュニティの間



マレーシアの伝統・宗教の継承方法

ポンドック

- ・生徒たちは寄宿し日常生活の中でイスラムの教えや倫理、生活習慣を実践的に学ぶ
- ・伝統的な口伝や実践を通じた知識の伝達が重視される。
- ・師との個人的な関係や生活全体での学びが大切にされる
- ・単なる宗教学校というだけでなく、地域コミュニティの中で伝統や文化を継承する役割も担っている



(1) 探究活動「向陵 Research（リサーチ）」年間計画（3 年計画）

「向陵 Plearning」は本校の総合的な探究の時間の呼称である。「向陵」（本校の所在地）の地で未来に向かって主体的に計画「plan」し、学び続ける「learning」の意が込められている。体験的・協働的な学びを大切にしており、2 年次にグループで大学・研究機関を体験する「アカデミックインターンシップ」を中軸に探究活動「向陵 Research（リサーチ）」を組み立てている。

1 年次：向陵 Research 入門：自分の興味関心と出会い、互いに伝え合う。「ビブリオバトル」

向陵 Research 基礎：自分の興味関心を互いに伝え合い、深める「ブックトークⅠ」

2 年次：向陵 Research：興味関心を育て、学問とつながる。

「ブックトークⅡ（グループ）」「アカデミック・インターンシップ」

3 年次：向陵 Research 完成：育んだ興味・関心をもとに未来への一歩を踏み出す。

「Personal Presentation」（個人探究・プレゼン）

1 年次		2 年次		3 年次	
回	内容	回	内容	回	内容
1	向陵 Plearning オリエンテーション	1	向陵 Plearning ガイダンス	1	向陵 Plearning オリエンテーション
2	キャリアプランニング （学問の分類を知る）	2	向 Research 向陵ブックトークⅡ （グループ探究）	2	向 Research 完成 personal presentation （個人プレゼン）
3		3		3	
4		4		4	
5		5		5	
6		6		6	
7	プレゼンレッスンⅠ	7	SDGs 学習会（世界を広げる）	7	向 Research 完成 personal presentation （個人プレゼン）
8	ライティングレッスン	8	向 R：AI プランニング①（ガイダンス）		
9	向 Research 入門 「ビブリオバトル」	9	向 Research アカデミックインターンシップ プランニング		
10		10			
11		11			
12	キャリアプランニング「オータムセミナー」	12	プレゼンレッスンⅡ		
13		13			
14	向 Research 基礎 「向陵ブックトークⅠ」	14	向 Research まとめ・中間発表会		向 Research 完成 personal presentation （個人プレゼン）
15		15			
16		16			
17	向 Research 基礎 向陵ブックトークⅠ	17	向 Research まとめ・中間発表会		
18		18			
19		19			
20		20	向陵オープンセミナー（探究発表会）		
21		21	向 Research 個人レポート作成		
22	向 Research 向陵ブックトークⅡ （グループ探究）	22			
23		23			
24		24	小論文レッスン		
25		25	向陵 Research 600 字小論文（要旨）		
26		26			
27		27			

(2) 探究課題設定

探究課題（テーマ）は、1 年次後半に結成するグループ毎に設定する。

テーマ設定の流れ

- ① 興味関心を共にする者同士をグルーピングする。例)「国際政治」「工学（機械）」
- ② グループ内で共通の興味関心探しをし、グループテーマを決める。
- ③ グループテーマに見合った新書を各自が読み、グループブックトークを行う。
- ④ テーマを深めるためのクエスチョン（リサーチクエスチョン）をあげる。
- ⑤ テーマを深めるために大学・研究室体験をし、研究者にインタビューする。
(アカデミック・インターンシップ)
- ⑥ テーマを再確認し、グループ毎に成果をまとめ、発表する。(中間発表)

(3) 指導過程

(1) の「探究学習年間計画」のプログラムに沿って、教師は各活動が円滑に進むように支援を行う。

- ① 各活動ごとに目標、方法を生徒と共有する。
- ② 各活動に要する時間、期限を生徒と共有し、促す。
- ③ テーマを深めるために訪問する（アカデミック・インターンシップ）大学・研究室候補を選定し、依頼する。
- ④ 生徒が深めたいテーマと連携先とをコーディネートし、アカデミック・インターンシップの内容を決定する。
- ⑤ 生徒スタッフ（向陵 Plearning 委員）が中間発表会を運営できるように、場の設定、および進行の支援を行う。
- ⑥ 発表内容をアカデミック・インターンシップで連携先と共有できるように仲立ちを行う。
- ⑦ 全校探究学習発表会「向陵オープンセミナー」の設定と運営補助を行う。

今回、参加した二つの班は、全校発表会「向陵オープンセミナー」での発表を経た代表班である。

(4) 今後の課題と次年度への展望

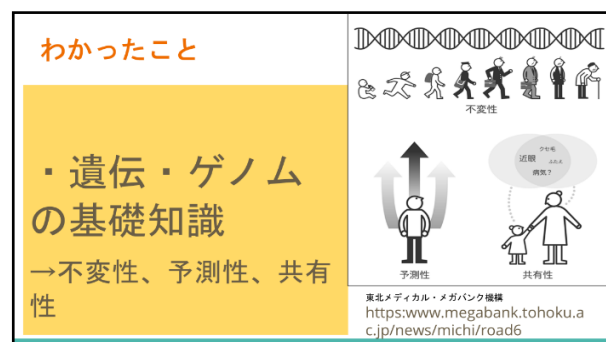
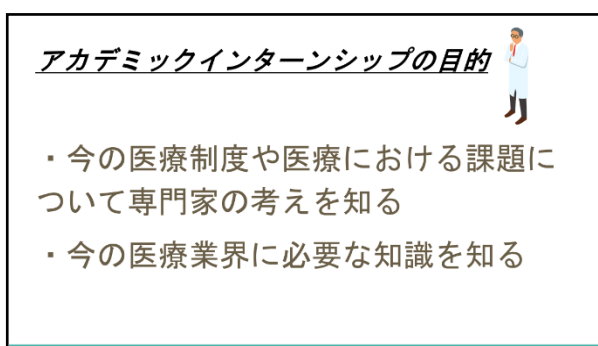
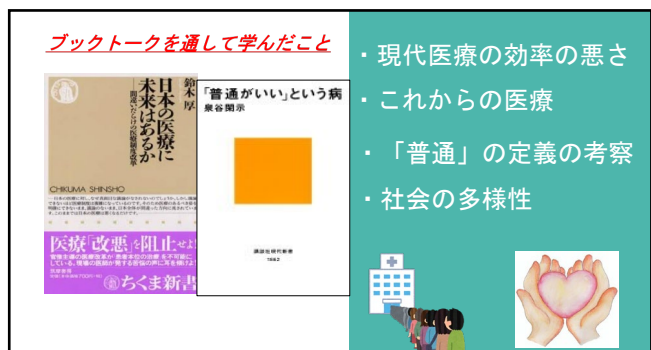
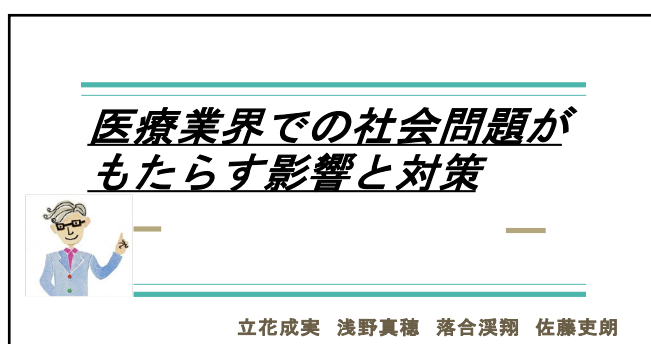
「向陵 plearning」は今年度から三菱みらい育成財団「心のエンジンを駆動させるプログラム」の採択を受け、地域・保護者・大学生とともに学ぶ場「放課後ゼミ」の開設、東京大学をはじめとした県外でのアカデミックインターンシップ実施等、学びの場をさらに広げることができた。普通科進学校ゆえの多様な興味関心、進路希望に対応し、キャリア形成に資する外部との連携企画を今後も積極的に取り入れていきたい。

代表班：医療業界での社会問題がもたらす影響と対策

【メンバー】立花成実 落合溪翔 浅野真穂 佐藤吏朗

【発表内容】

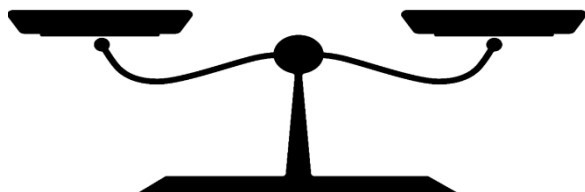
日本の医療は日々発展を続けている。しかし、その一方で多くの問題を抱えている。今回の発表では近年、注目されつつある「ゲノム医療」に焦点をあて、ゲノム医療とはなにか、具体的にどのような問題点があるのか。並びに、私達、医療を享受する国民にとってどのような影響をもたらすのか。そしてその問題を解決するためにはどう対応すればよいのかを東北メディカル・メガバンク機構でのアカデミックインターンシップとフィールドワークを通して考察した。



ゲノム医療とは...

個別化医療

個別化予防



ゲノム医学を可能にすると..

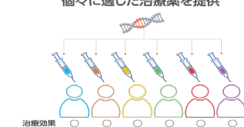
現行の治療アプローチ
(標準治療)

同じ病名には同じ治療薬を一律に提供



新たな治療アプローチ
(個別化治療)

同じ病名でも主にゲノム(遺伝子)を解析し、
個々に適した治療薬を提供



個別化治療の3つのメリット

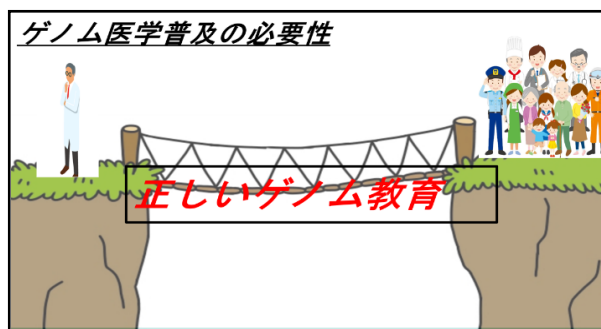
- ① 最適な治療の提供 (患者メリット)
- ② 試行錯誤的な治療選択からの回避 (医療従事者メリット)
- ③ 無効治療による医療費の削減 (社会的メリット)

出典: <https://neopt.jp/services/>

現在...



ゲノム医学普及の必要性



出生前診断の社会問題

ゲノム医学の専門知識を持たない医師



誤った情報を発信

提案「医療に関して学校教育でできること」

**学校教育における性教育
の
やり方を工夫する**

意識的な問題を解決すべき！！

～目的～

「女性の性周期」についての
認識の性差をなくす

+

気まずさを感じる必要はない

～メリット～

男性

女性

・ 将来のため
理解が必要

・ 産む性への
理解向上



暮らしの豊かさに繋がる

～結論～

女性の性周期について、理解増

➡間違った認識を改める教育



まとめ わかったこと



- ・ ゲノム医学普及の必要性
- ・ 遺伝・ゲノムについて
- ・ 正しい知識を子どもに与える

今後の課題



- ・ アカデミックインターンシップでの学びを深める
- ・ 医療の時事問題について調べる

連携校 7 宮城県仙台東高等学校 ～探究活動について～

(1) 探究学習年間計画

令和6年度 総合的な探究の時間 年間予定表									
	日	曜日	時数	1 学年	時数	2 学年	時数	3 学年	
4	16	火	1	ガイダンス (年間恒例行事等)	1	ガイダンス (年間恒例行事等)	1	ガイダンス (年間恒例行事等)	
	23	火	1	進路探究① (自己理解・職業理解)	1	学問探究	1	探究活動まとめ①2年生の探究の振り返り	
5	7	火	2	進路探究② キャリアセミナー	1	社会貢献プログラム① 課題発見Ⅰ	1	探究活動まとめ② ブラッシュアップ	
	21	火	1	進路探究③ 適性検査結果・文理選択	1	全体講座 講演 (宮城大)	1	探究活動まとめ③ ブラッシュアップ	
	28	火	1	国際理解探究① 全体的探究活動の進め方	1	社会貢献プログラム② 課題発見Ⅱ	1	探究活動まとめ④ 探究レポート1	
6	11	火	1	国際理解探究② 講演	1	社会貢献プログラム③ テーマ設定・仮説Ⅰ	1	探究活動まとめ⑤ 探究レポート1	
	25	火	1	国際理解探究③	1	社会貢献プログラム④ テーマ設定・仮説Ⅱ	1	探究活動まとめ⑥ 探究レポート1	
7	2	火	1	国際理解探究④	2	社会貢献プログラム⑤ 発表・テーマ設定・仮説	1	探究活動まとめ⑦ 探究レポート1	
	9	火	1	国際理解探究⑤ 課題発見	1	社会貢献プログラム⑥ テーマ設定の見直し・調査活動	1	探究活動まとめ⑧ 探究レポート1	
	16	火	1	国際理解探究⑥ テーマ設定	1	社会貢献プログラム⑦ 調査活動	1	探究活動まとめ⑨ 自己評価・キャリアサポート	
夏季休業				テーマ設定、仮説の設定		調査活動			
8	27	火	1	国際理解探究⑦ 全体講座	1	社会貢献プログラム⑧ 情報整理分析	1	探究活動まとめ⑩ 発表 (総合型選抜による発表)	
9	3	火	1	国際理解探究⑧ 発表	1	社会貢献プログラム⑨ 情報整理分析	1	探究活動まとめ⑪ 発表 (総合型選抜による発表)	
	10	火	1	国際理解探究⑨ テーマの見直し・調査活動	1	社会貢献プログラム⑩ 課題解決	1	社会課題事例研究 探究レポート2①	
	17	火	1	国際理解探究⑩ 調査活動	1	社会貢献プログラム⑪ 発表準備	1	社会課題事例研究 探究レポート2②	
10	1	火	1	国際理解探究⑪ 調査活動	1	社会貢献プログラム⑫ クラス発表1	1	社会課題事例研究 探究レポート2③	
	8	火	1	国際理解探究⑫ 情報整理分析	1	社会貢献プログラム⑬ クラス発表2	1	社会課題事例研究 探究レポート2④	
	15	火	1	国際理解探究⑬ 情報整理分析	2	社会貢献プログラム⑭ 全校発表3年生参加	2	2年生の発表会への参加	
	22	火	1	国際理解探究⑭ 課題解決	1	社会貢献プログラム⑮ 発表会の振り返り	1	社会課題事例研究 探究レポート2⑤	
	29	火	1	国際理解探究⑮ 発表準備	1	社会貢献プログラム⑯ 探究課題から進捗考える	1	社会課題事例研究 探究レポート2⑥	
11	5	火	2	国際講義会	2	国際講義会	2	国際講義会	
	12	火	1	国際理解探究⑯ 発表準備	1	全体講座 講演 (志望理由書・自己PR)	1	社会課題事例研究 探究レポート2⑦	
	19	火	1	国際理解探究⑰ 発表準備	1	進路探究はとめ① 志望理由書・自己PR作成	1	社会課題事例研究 探究レポート2⑧	
12	3	火	1	国際理解探究⑱ クラス発表	1	進路探究はとめ② 志望理由書・自己PR作成	1	探究活動まとめ (自己評価・キャリアサポート)	
	10	火	2	キャリアセミナー		修学旅行			
	17	火	2	国際理解探究⑲ 全校発表(2年生参加)	2	1年生の発表会への参加			
1	14	火	2	2年生の発表会への参加	2	社会貢献プログラム⑰ 発表会(1年生参加)			
	21	火	1	探究のまとめ①	1	探究のまとめ①			
2	4	火	1	探究のまとめ②(自己評価・キャリアサポート)	1	探究のまとめ②(自己評価・キャリアサポート)			

(2) 探究課題設定

1) 1年「国際的な視点から、社会が抱える課題の解決に取り組む探究活動」

国際的な視点を意識しながら、社会が抱える課題の解決に取り組み、探究活動の基礎を習得する。

2) 2年「社会貢献を意識しつつ、地域社会が抱える課題の解決を目指す探究活動」

1年で身につけた探究活動の手法を踏まえて、自分にとって関わりの深い地域社会の課題を発見し、その解決策を考えることで社会参画の意識を養う。

3) 3年「内容の高度化・自律化を目指した総括的な探究活動」

1・2年での探究活動を踏まえて、様々な視点から探究内容の高度化を図り、自律的に探究活動を進めることで探究する力をさらに深化させる。

(3) 指導過程

1) 1年《グループによる探究活動》

年度はじめにガイダンスを実施するとともに、テキストを活用しながら探究活動の方法について基礎的な知識を身に付けさせる。また講演会などの機会を設け、生徒が自ら考えるようになるきっかけを用意する。さらに生徒には数名ずつのグループを作らせ、そのグループごとによる探究活動として、課題発見から調査、情報整理分析およびプレゼンテーション・ソフトを用いた発表まで行わせる。

2) 2年《個人の探究活動》

年度はじめにガイダンスを実施するとともに、テキストを活用しながら探究活動の在り方について広範な知識を身に付けさせる。1学年で身に付けた探究活動の手法を踏まえて、個人で行う探究活動として、自分が将来関わる社会に関して課題を設定し、その解決策を探究する。発表に際しては、プレゼンテーション・ソフトを用いたスライドショーによって、より効果的な発表方法を工夫させる。

3) 3年《個人の探究活動をさらに深化・発展させる探究活動》

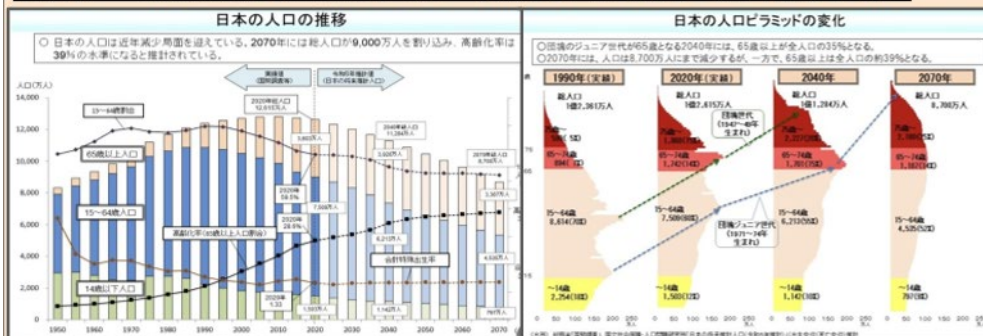
1・2学年での探究活動を踏まえて、さらに様々な視点から論理的・批判的に問題を分析することを意識して探究活動を行わせる。夏休み前までに、課題発見から調査分析、考察までの流れを完成させ、そこで得た気づきや学びをもとにして、夏休み後に再度、課題発見から調査分析、考察まで行わせる。

(4) 今後の課題と次年度への展望

本校の探究活動の特色として、1学年は「国際理解」、2学年は「社会貢献」をキーワードとしていることが挙げられるが、探究活動そのものに対する理解が足りず、いわゆる「調べ学習」とどまっている生徒も見受けられる。次年度においては、年度途中に振り返りの機会を設け、全ての生徒が本当の意味での探究活動を行えるようにしたいと考えている。

「訪問看護から考える看護の未来」

背景: 加速度的に増えていく総人口に対する高齢者割合



⇒高齢者増加に関して高齢者福祉を見直さなければならない
=関心のある訪問看護を調べたい

目的1)現在の訪問看護の現状を知り、問題点を探る

→仮説)看護職は需要>供給なので訪問看護でも人材不足が問題なのではないか？

↳インターネットや文献を対象に調査

目的2)現役の訪問看護と病院看護の仕事に関するアンケートを取り、双方の仕事を比較する

↳仮説)訪問看護の方が大変？

↳ベテランの訪問看護師(女性)1人

若い病院看護師(男性)1人

どちらとも利用している利用者1人

計三人

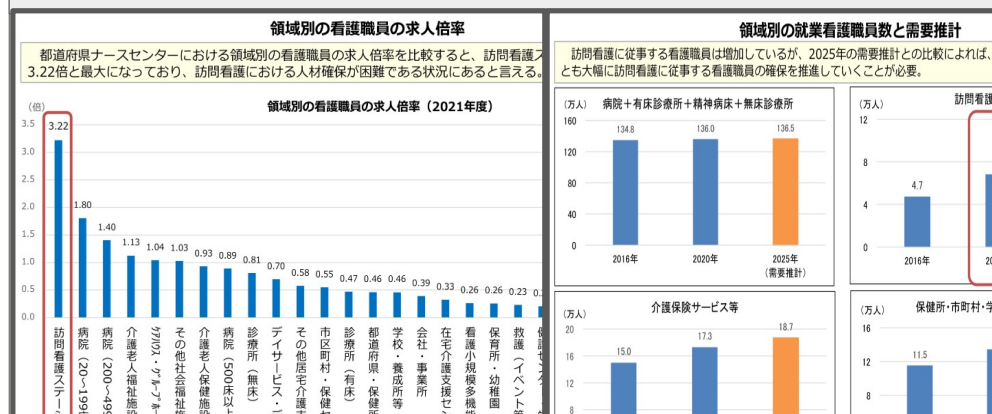
調査結果1

- 求人倍率 >1

⇨人材を探している企業が多い□ 需要>供給

· 求人倍率 <1

⇒仕事を探している人が多い□ 需要<供給



調査結果2

ベテラン訪問看護師(女性)

- ・ 人手不足だと感じる
- ・ 利用者1人1人の情報整理を看護師がしなければいけないので雑務が増えて大変

若い病院看護師(男性)

- ・ 人手不足だと感じる
- ・ 夜勤があるため体力的に大変

利用者

- ・ これ以上求めるものはない

調査結果1&2の分析

人材不足:病院看護師&訪問看護どちらとも

⇒看護を学べる専門学校や学科を今後も増やし、看護師を志す学生への支援を整え続ける



調査結果1&2の分析

仕事面:近年は医療DX化が進んでいる

⇒看護だけにとどまらず医療職全体の仕事効率上がり、仕事の負担が軽減され、より良質な医療やケアが受けられるようになる



連携校 8 宮城県泉高等学校 ～探究活動について～

(1) 探究学習年間計画

令和5年度の反省点として、3年間の系統性がないことと、教師から見ても生徒から見ても学習の見通しが立てにくいことが挙げられていた。そこで、令和6年度から探究学習の年間指導計画を見直し、3年間を見通すことができる指導計画を立て直した。

			1年生	2年生	3年生
前期中	4月	3	・オリエンテーション ・探究の基礎を学ぶ	・学問分野別研究	・レポート提出 ・進路探究
	5月	3	・地域探究Ⅰ	・学問分野別研究	・進路探究
	6月	3	・地域探究Ⅱ	・学問分野別研究	・進路探究□評価
前期末	6月	3	・地域探究Ⅱ	・学問分野別研究(中間発表①)	・志望理由書
	7月				研究発表会
	8月		(夏休み) ・地域探究Ⅱ(実践)	(夏休み) ・フィールドワーク	
後期中	9月	3	・地域探究Ⅱ(まとめ・発表)	・学問分野別研究	・進路、キャリア探究
	10月	4	・地域探究Ⅲ	・学問分野別研究□	・進路、キャリア探究
	11月	6	・地域探究Ⅲ	各種コンテスト応募	・進路、キャリア探究
後期末	12月	4	・地域探究Ⅲ(まとめ・発表)□評価	・進路関係	
			グループ研究発表		
	1月	3	・学問分野別研究(基礎)	・研究振り返り□評価 ・レポート作成	
	2月	3	・学問分野別研究(基礎)	・レポート作成	
	3月		(春休み) ・フィールドワーク	(春休み)	

表1 令和6年度泉高等学校 総合的な探究の時間 年間指導計画

(2) 探究活動の具体について(※紙幅の都合上、1学年と2学年のみ)

1) 1学年

- ① 地域探究Ⅰ:「中学生に泉高校の良さを伝えるためにできることを考えよう」というミッションを達成するために、中学生向けの学校紹介プレゼンテーションをグループで協力しながら作成した。各クラスの代表は、7月の中学生向け学校説明会でプレゼンを披露した。
- ② 地域探究Ⅱ:「学校がある泉区を活性化するためにできることを、高校生の視点から考えよう」というミッションを達成するために、生徒自身が企画・計画・実践(夏休みの期間を利用した地域でのフィールドワークを含む)・発表を行った。企画前には本校OBの泉中央駅前地区活性化協議会の久保さんに泉区の現状と課題について講話をしてもらうことで、泉区の現状と課題を踏まえて考えることができた。

※ 生徒の実践例) こども食堂でのボランティア活動、泉区民ふるさとまつりでのボランティア、泉区役所へのインタビュー、地域の子どもセンターの訪問・手伝いボランティア、泉警察署と連携した特殊詐欺防止呼びかけ運動、地域FMラジオへの出演など

- ③ 地域探究Ⅲ：NIEの実践指定校が利用できる新聞購読制度を活用し、地域課題や社会課題について調べ、自分の意見をまとめて発信する活動を行った。新聞の声欄への投書をするイメージで原稿を作成した。



図1：地域探究Ⅰでの発表の様子



図2：地域探究Ⅱでのディスカッションの様子

2) 2 学年

2年生では学術探究として、個人による学術探究活動を行った。全部で14の学問分野に分かれてゼミ形式で探究活動を行った。1月には1年生と合同の探究発表会を行い、各自の探究活動の成果を発表した。探究活動をまとめた企画書を作成し、約80名が探究活動の甲子園的な存在である「マイプロジェクト・アワード」「中高生探究コンテスト」に応募した。また、3月には「みらい東北高校生プレサミット第2回」で1名の生徒が探究活動の成果を発表する予定である。

※「マイプロジェクト・アワード」宮城県大会に出場した探究活動のテーマ

- ・「SNS上にある違法広告を見分けるためには」
- ・「仙台市の宿泊業を成功させるには」
- ・「震災の記憶と教訓を風化させないためには」



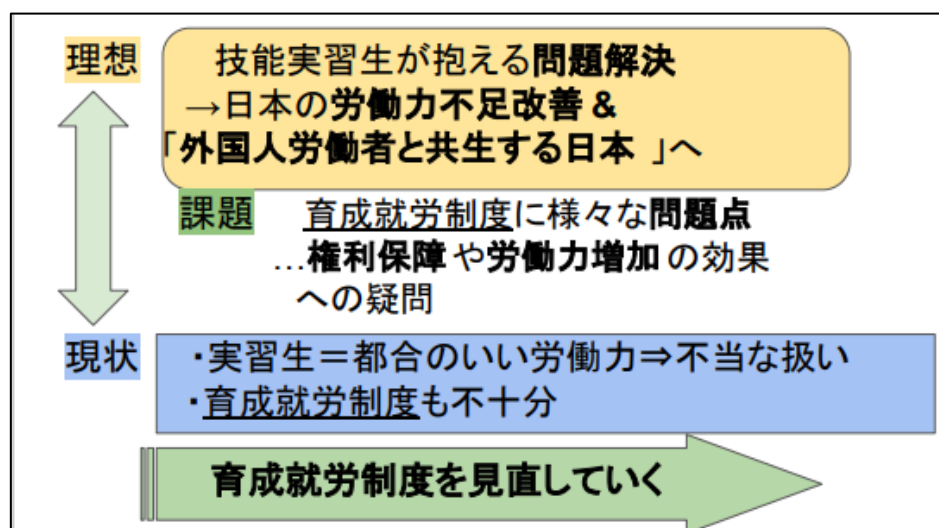
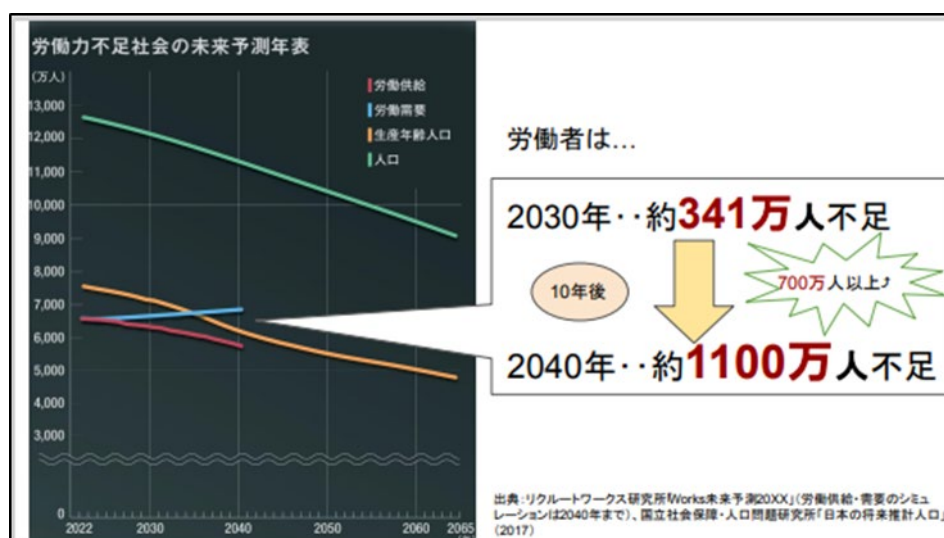
図3：マイプロ県大会での発表



図4：1、2年生合同探究成果発表会の様子

(3) 今後の課題と次年度への展望

令和6年度は、3年間の探究学習の指導計画を見直して実践した1年目であった。3年間を通して、調べ学習に終始する探究活動ではなく、地域で何らかのアクションを実行する探究活動が少しずつ増えてきている。令和6年度はNP0 まちすば仙台やベガルタ仙台との連携を模索した。令和7年度に向けてさらに外部との連携を深め、探究学習をさらに充実させていきたいと考えている。



◎解決に向けて

1、活動計画

～夏休み前

情報収集

夏休み中

インタビュー

夏休み後～

育成就労制度の具体的な問題点発見
&解決策考案



2、活動報告[インタビュー]

インタビュー先

宇部雄介 弁護士

(仙台中央法律事務所)

武山真志郎 行政書士

(仙台フォレスト法務事務所)

日時:8月2日

目的

外国人労働者からの相談事例
育成就労制度への意見



問題の実態把握
&
解決の方針確立

◎まとめ

・外国人労働者＝同じ国に生きる人・日本を支える存在
という認識が大事

・「日本人」「外国人」ではなく、「仲間」



(1) 探究学習年間計画

本校では「総合的な探究の時間」の年間計画を以下のように定めている。

	1 学年	2 学年	3 学年
科目名	探究基礎	探究Ⅰ	探究Ⅱ
科目のねらい	自己と多文化社会を見つめる	グローバル社会と学びをつなげる	サステナブル社会へ踏み出す
単位数	1	3	1
主な学習内容	【前期】 ライフデザインプログラム ○これから経験するライフステージと社会の変化を見据えながら、自己の考えを見つめ、多様な考えに触れる 【後期】 社会課題基礎調査 ○現代の社会課題を調べ、自分の主張を発表するとともに、文献・Web・アンケートによる調査方法の基礎を学ぶ	【前期】 地域リサーチプロジェクト ○地域の課題を調べ、SDGs とのつながりやその対策について発表するとともに、地域団体へのインタビュー調査を行う 探究ミニカレッジ ○大学の各学問分野での学びについて大学の先生から講義を受け、レポートを作成する 【後期】 地域アイディアプロジェクト ○これからのサステナブル社会に向けた課題を調べ、その解決策を発表するとともに、地域企業へのフィールドワーク調査を行う SDGs アイディアプロジェクト	【前期】 進路研究ゼミ ○今までの探究活動を通して将来の社会貢献をイメージし、進路希望達成に向けて主体的に行動する方法を学ぶ 【後期】 卒業論文作成 ○今までの探究活動を通してサステナブル社会への自分の主張と卒業後の自分の社会貢献を結び付けて論文を作成する

（２）探究学習指導計画と評価

１）探究基礎

【指導計画】

前期 １単位 約 15 時間			
ライフデザインプログラム「これからの未来と自分を考えよう」			
単元の目標 将来の社会の変化を見据えたライフデザインを作成する活動を通して、 今後予想される社会課題が自分たちの身近な生活に深く関わっていることを理解し、 自らの生き方や社会課題の解決に対して貢献するための行動について考えるとともに、 自ら社会に参画しようとする姿勢を身につける。			
観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価	超高齢社会での働き方や家族、地域の在り方について理解している。 今後広がりを見せるだろう社会課題や技術革新を見据え、持続可能な取り組みを創造していくことの大切さを理解している。 他者の生き方や学び・労働への考え方に触れ、多様な価値観を受け入れることの大切さを理解している。	今後変化していく社会状況を踏まえつつ、自らの生き方を社会貢献の視点から、論理的に表現し、学習活動を振り返って、学習や生活に生かしている。 グループに応じた関わり方を考え、円滑で活発な話し合いを目指した発言をしている。	活動を通して、自分の個性や特徴を見つめながら、多様な意見を受け入れ、尊重しようとしている。 社会の一員としての自覚を持ち、積極的に参画しようとしている。

【評価の観点】

小単元（回数）	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
将来の社会の変化を見据えたライフデザインを考えよう（12時間）	動画教材やプリントを活用しながら、ライフデザインワーク冊子に自分の考えを記入し、クラスメイトに考えを発表する。 ①人生を見通す ②自分を知る ③自立と共生を考える ④学ぶ ⑤働く ⑥二人で共に生きる ⑦子供を育む ⑧高齢社会を生きる ⑨人生の先輩に聞く ⑩将来設計図を考える	○	○	○	ライフデザインワークの記入状況 班での発表の積極性 他の意見に共感する姿勢
仕事とsoのやりがいについて考えよう（3時間）	Web サイト『キャリアガーデン』を活用しながら、将来夢宣言に自分の考えを記入する。	○	○	○	将来夢宣言の記入状況

2) 探究 I A

【指導計画】前期

前期 1 単位 約 15 時間			
地域リサーチプロジェクト「社会貢献について考えよう」			
単元の目標 社会の地域課題への取り組みについて調査するとともに、NPO などの団体訪問、ボランティア講演、ボランティア体験活動とプレゼンテーション発表を通して、 実際に地域課題に対して取り組まれている事例やその目的を理解し、 無償で他人に貢献することと、社会の中での自分自身の存在意義について考えるとともに、 社会貢献と働くことにやりがいを感じて、自発的に社会に参画していこうとする態度を身につける。			
観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価	自分たちの地域の課題に対してボランティア団体がどのように課題解決に取り組んでいるのか、またその取り組みの目的ややりがいについて理解している。 基本的な調査方法を理解し、目的に応じて適切に実施している。	社会の一員として、課題に対してどのような取り組みができるか考えることができる。 無償で他人や社会に貢献することの意義について、考えることができる。 グループに応じた関わり方を考え、円滑で活発な話し合いを目指した発言をしている。	活動を通して、自分の個性や特徴を見つめながら、多様な意見を受け入れ、尊重しようとしている。 社会貢献にやりがいを感じて、自発的に社会に参画しようとしている。また、学習や生活に活かそうとしている。 自分の意志で地域課題と向き合い、自他のよさを認めながら、協働的に意見をまとめようとしている。

【評価の観点】

前期

小単元（時数）	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
グループ決め （1 時間）	自分たちの興味のあるカテゴリを選択し、グループを決める。			○	班編成への積極性
地域・社会人調査 （4 時間）	訪問する法人や団体に関して、活動内容や目的などを調べる。	○			プリントの記入内容
質問準備・施設訪問 （2 時間）	調べた内容をもとに、活動目的やその他質問を準備し、実際に訪問し、インタビューする。		○	○	訪問・インタビュー活動の様子 経験からの振り返り
探究マップ作成 （2 時間）	事前調査、施設訪問を踏まえて社会人としてのやりがいや、働く意味を考え、まとめる。		○	○	探究マップの記入内容 班内の意見交換の活発さ
ポスター作成 （3 時間）	今までの調査内容をもとに Keynote でポスター資料を作成する。	○	○	○	ポスター資料の内容 班内での分担状況
ボランティア活動 （1 時間）	実際にボランティア講演・活動に参加し、社会貢献について考える。		○	○	ボランティア活動の様子 経験からの振り返り
ポスターセッション （2 時間）	各クラスでポスター資料を活用した発表活動を行う。			○	発表内容 聴講の姿勢 レポートと自己評価

【指導計画】後期

後期 1単位 約15時間			
SDGs アイディアプロジェクト「台湾と日本を比較し、これからの日本に必要なアクションを考えよう」			
単元の目標 SDGs と学問分野の学びを調査し、日本と海外で社会を良い方向に導いている取り組みを比較する活動を通して、世界全体で抱える課題やその課題解決のために社会の変革を担う人材が必要であることを理解し、自らが社会の変革を担う人材として今後どのような力が必要なのかを考えるとともに、積極的に社会に貢献しようとする姿勢を身につける。			
観 点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評 価	SDGs や大学での学び、社会的企業の活動などが全て社会の課題解決に向けて取り組まれていることを理解している。 比較考察を理解し、それに必要となる情報を適切に収集している。 日本と海外での取り組みの違いにはその国の文化や慣習、歴史などが深く関わることに気付いている。	SDGs や大学の学びのキーワードから日本と海外の取り組みを比較できる適切なテーマを見つけている。 様々な取り組みに触れる中で、今後の日本に必要な取り組みを導き出している。 自分たちの比較考察とその根拠としている情報の合理性をよく分析している。 相手や目的、意図に応じて、論理的に表現し、学習活動を振り返って、進路研究に結びつけている。	活動を通して、自分の個性や特徴を見つめながら、多様な意見を受け入れ、尊重しようとしている。 自分の意志で SDGs や興味ある学問分野と向き合い、自他のよさを認めながら、協働的に意見をまとめようとしている。 社会の一員としての自覚を持ち、積極的に参画しようとしている。

【評価の観点】後期

小単元（時 数）	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
グループ決め 学問分類選択 （2時間）	興味あるカテゴリーを軸に班編成を行う。 メンバーと座席を決めたのち、学問分類と関わる SDGs の目標を絞り込む。			○	班編成への 積極性
基本講演と事 前調査 （6時間）	SDGs の概要に関する講演を聞き、Web 調査を通して班の比較するテーマを絞り込む。	○			プリントの 記入内容
テーマ設定 探究マップ作 成 （8時間）	事前調査の情報をもとにテーマと比較する国を決める。Web 調査を基本としながら、比較国の文化や歴史などと比較内容を調査する。	○	○	○	探究マップ の記入内容 班内の意見 交換の活発 さ
台湾研修旅行 （約4時間）	全体行程を通して、テーマとの関連を探る。 SDGs コースにてカテゴリーの内容を学ぶ。		○	○	インタビュー の内容 経験からの 振り返り
発表スライド 作成 （7時間）	今までの調査内容をもとに Keynote で発表資料を作成する。	○	○	○	ポスター資 料の内容 班内での分 担状況
発表動画作成 （3時間）	発表動画を録画して提出。			○	発表内容 発表の姿勢 レポートと 自己評価

3) 探究 I B

【指導計画】前期

前期 2単位 約30時間			
探究ミニカレッジ「大学の学びに触れよう」			
単元の目標 様々な学問分野の大学の先生から、各学問分野の概要となる講演を聞き、レポートを作成することを通して、多様な学問分野があり、その専門性を深めていく大学での学びや論文作成の基礎を理解し、大学で学ぶことと社会課題とのつながりについて考えるとともに、先を見据えて計画的に物事を進める姿勢を身につける。			
観 点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評 価	大学での学びには多様な学問分野があり、その専門性を深めていくことの必要性を理解している。 論文やレポート作成の基礎を理解している。 講義の内容から重要語句を選び出し、その語句についての自ら学びを深めている。	大学で学ぶことと社会課題とのつながりを考えることができる。 講義と自分で調べた内容のつながりや違いを考え、体系的に整理することができる。	活動を通して、自分の個性や特徴を見つめながら、多様な意見を受け入れ、尊重しようとしている。 社会貢献にやりがいを感じて、自発的に社会に参画しようとしている。また、学習や生活に活かそうとしている。 先を見据えて計画的に物事を進める姿勢を身につけようとしている。

【評価の観点】前期

小単元（時 数）	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
様々な学問分野の大学の先生から、学問分野の概要と最先端研究を学び、レポートを作成することを通して、進路研究を深めよう	○1校時目に大学の先生からキーワードの学問分野の最先端では、どのようなことが研究テーマとなっているのかを聞く。 ○2校時目に講義内容から重要語句を選び、それについて自分で調べてレポートにまとめる。 講義① AI （東北工業大学） 講義② ロボット （東北工業大学） 講義③ 建築 （東北工業大学） 講義④ 環境・エネルギー （東北工業大学） 講義⑤ 産業デザイン （東北工業大学） 講義⑥ チーム医療 （東北文化学園大学） 講義⑦ 看護と地域包括ケアシステム （東北文化学園大学） 講義⑧ まちづくり （東北工業大学） 講義⑨ 国際・インバウンド （東北工業大学） 講義⑩ 経済・経営 （東北福祉大学） 講義⑪ 教育 （東北福祉大学） 講義⑫ 健康・スポーツ （東北工業大学） 講義⑬ 居住環境デザイン （東北工業大学）	○	○	○	講義の様子 レポートの記入状況 進路研究の手まり

【指導計画】後期

後期 2単位 約 27 時間			
地域アイデアプロジェクト「地域社会の課題解決につながる研究アイデアを考えよう」			
単元の目標 企業フィールドワークでの経験を活かしながら地域の課題とその解決アイデアを考える活動を通して、実際に働いている人が感じている課題やその要因、現状での対応を理解し、 今まで学んできた SDGs や社会課題とのつながりや課題解決のアイデアについて考えるとともに、 社会に変革を起こす行動を自ら提案する姿勢を身につける。			
観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価	今まで学んできた社会課題と実際に働いている人が感じている課題とのつながりを理解している。 課題の要因と解決に向けたアイデアにつながる情報を適切に収集している。 フィールドワークを通して、働いている人が感じている課題や対応策と Web からの情報にはギャップがあることに気付いている	関心ある職種分野が抱える課題とフィールドワーク先の企業と自ら考えた解決アイデアとのつながりを想定し、計画性のある調査を進めている。 課題の要因や現状での対応を調査し、よく分析したうえで解決アイデアを提案している。 相手や目的、意図に応じて、論理的に表現し、学習活動を振り返って、進路研究に結びつけている。	活動を通して、自分の個性や特徴を見つめながら、多様な意見を受け入れ、尊重しようとしている。 自分の意志で関心ある職種分野と向き合い、自他のよさを認めながら、協働的に意見をまとめようとしている。 社会の一員としての自覚を持ち、積極的に参画しようとしている。

【評価の観点】後期

小単元（時 数）	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
グループ決め 学問分類選択 （2時間）	興味ある職種分類を軸に班編成を行う。 メンバーと座席を決めたのち、職種分類と関わる6Qsを絞り込む。			○	班編成への積極性
事前調査 （6時間）	Web調査を通して班でその職種が抱える課題を絞り込む。	○			プリントの記入内容
テーマ設定 探究マップ作成 （8時間）	事前調査の情報をもとに解決アイデアを考える課題とフィールドワークする企業を決める。Web調査を基本としながら、解決アイデアにつながる情報を収集する。	○	○	○	探究マップの記入内容 班内の意見交換の活発さ
企業フィールドワーク（4時間）	探究マップをもとにフィールドワークを行い、自分たちの調査過程を基にインタビューする。		○	○	フィールドワーク・インタビュー活動の内容 経験からの振り返り
ポスター作成 （7時間）	今までの調査内容をもとに Keynote でポスター資料を作成する。	○	○	○	ポスター資料の内容 班内での分担状況
ポスターセッション （3時間）	1学年と合同でポスター資料を活用した発表活動を行う。			○	発表内容 聴講の姿勢 レポートと自己評価

（３）今後の課題と次年度への展望

これまでの探究発表並びにポスターセッションなどを通し、本校生徒の課題として、「発表のスキルの不足」という問題が浮かび上がってきた。発表を聞いている相手に対する配慮不足によって、声の小ささや資料の見にくさが生じている。これには大きく３つの要因があると考えられる。１つ目は、生徒への徹底した指導がなされていないことだ。時間が足りないなどの理由から、細かな資料の細部などへの指導が行き届いていないことがある。２つ目は、細かな部分の指導は担当教員に一任せざるを得ないという現実的な現場事情である。担当教員が複数いるため、担当教員の裁量で進まなければならない部分がどうしても出てきており、それがプレゼンテーションの完成度に差が出る原因となっていると考える。３つ目は、前年度の課題で挙げた教員間の意識の共有や方針共有の不徹底である。昨年度の反省点から、ミーティングを多く実施したためある程度の方針共有に一定の効果はあったものの、細部に至るまでの方針共有はなかなかできなかった印象である。

この問題に対しての次年度以降の展望として、大きく２点の改善策をあげる。１点目は、「プレゼンテーションスキルの生徒指導」に関する教職員対象の研修会を実施することである。意識共有だけではなく、プレゼンテーション指導のノウハウの共有を教職員同士で行う機会を作ることによって、教職員のスキルアップにつながるのではないかと考えている。２点目は、指導方法のシステム化である。なるべく指導をシステムチックにすることで、教員間での指導方法の際が小さくなり、すべての生徒が高いレベルで指導を受けることが出来る効果が見込まれる。また、本校は私立高校であり、人事異動がほぼないため、ブラッシュアップを重ねながらサイクルを回すことが出来れば、持続可能な指導が可能になると考えられる。



豊かな自然と "もしも"の公園

仙台城南高校
2年デザインゼミ

中村心海
大沼紗来

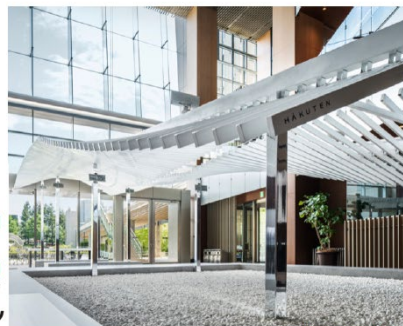


はじめに

空間デザイン × 防災

空間デザインとは

- 建物の設計、室内設計、空間を演出するインテリアコーディネートなど建物の中から外までの空間を演出すること



東京ミッドタウン

私たちが注目した課題点

震災を直接経験した 子供が少ない

assignment points

過去と同じ過ちを犯さないように、災害時に適切な判断と行動力を身につける場が必要



A 桜 B 桜 C 桜 D 桜

02

防災公園を作ろう

普段は防災も学べる公園 地震発生時には避難場所にもなる公園



04

もっと知ってもらうために

公園で防災イベントを企画

子どもたちに防災を知ってもらう機会をつくる

公衆電話や給水所など展示してある使用ガイドを参考に
体験してもらう



まとめ

普段から使っていたものが"もしも"地震などの災害が起きた時に役立つ公園が今後宮城県にも増えてほしい



10. カリキュラムアドバイザーより

カリキュラムアドバイザー報告

カリキュラムアドバイザー 中島夏子

東北工業大学 総合教育センター（教職課程部門）准教授

（１）カリキュラムアドバイザーの活動報告

本事業の拠点校である仙台城南高等学校の委嘱を受け、昨年度に続き、カリキュラムアドバイザーとして携わっている。令和６年度は、「第２回みらい東北高校生プレサミット」の実施に向けた助言や同イベントでの講評を担当した。

（２）令和６年度のWWL コンソーシアム構築支援事業について

令和６年度の本事業の活動は、「第２回みらい東北高校生プレサミット」に向けた準備を中心として、AL ネットワーク形成、カリキュラム開発、国際交流、そして事業に関連する情報収集等の活動が行われた。今年度からは、拠点校と連携校から選出された生徒によって、「みらい東北高校生プレサミット」の実行委員会が作られ、彼らがその企画と運営に携わるようになったことで、サミット当日だけではなく、年間を通じた学校間の交流が行われた。

３月１５日（土）に東北工業大学で行われた「みらい東北高校生プレサミット」は、「デジタル線路 ― 未来を乗せて―」をテーマとして行われた。実行委員会の生徒及び発表参加生徒合わせて１３０名を超える高校生の参加があり、その中には県内外の複数の協力校や台湾の高校生の参加もあった。WWL 事業の国際性を体現する取組として、仙台城南高校の生徒による英語の探究活動報告が冒頭行われ、台湾の高校生からオンラインでコメントを受けた。分科会Ⅰの探究活動成果発表では、各校の発表に対して積極的な質問やコメントが出された。分科会Ⅱでは、異なる学校の生徒でチームが編成され、科学、環境、文化・教育、まちづくり、国際理解というテーマに関して、課題とその解決策を考えるというワークショップが行われた。限られた時間内であったが、2040 年という未来を展望した意欲的な提言が多く出された。

全体を通して、生徒実行委員を中心として、参加した生徒間の連帯が深まり、探究活動の成果発表やワークショップを通して相互に刺激を受けている様子が見られた。こうした学校の垣根を越えたコミュニティ形成がこの事業の目的の一つであるが、現段階で着実にそうした成果が表れている。

（３）令和７年度のWWL コンソーシアム構築支援事業に向けて

令和７年度に向けて、来年度のサミットと各校の探究活動に関して二つの提案を行いたい。まず、来年度のサミットに向けての提案は、国際交流と発信の機会を充実させることである。今年度のプレサミットでは台湾の二校が参加し、仙台城南高校の生徒による英語の研究報告に対してオンラインでコメントをする等の機会が設けられた。しかし、技術的な課題や言語の壁により、その機会を十分に活かすことができなかった面もあった。次年度はこうした海外の連携校との連携をさらに増やしつつ、オンライン交流の質を高めるための工夫や準備を充実させることが望まれる。

また、各校の探究学習についての提案は、テーマを絞り、深めるというプロセスを大事にするということである。今年度のプレサミットでの発表は、どれもが意欲的なテーマではあったが、その範囲が広すぎるために、論点が不明瞭になっているものも多く見られた。身近で些細なテーマであっても、その探究活動ならではの発見や見解があることが重要である。そのためには、定期的にテーマのブラッシュアップを図ることが効果的であろう。こうした取組は基本的には各学校で行うことになるが、そのための方法が学校間で共有される等の取組がコンソーシアム内で行われることが期待される。

11. 次年度に向けて

次年度に向けて

昨年度、この後書きで「『私たちがつくるみらい東北』をスローガンにして、東北六県の高校生の『ネットワーク作り』を重視したつもり」であったが、「連携強化まではなかなか進めないままに年度末を迎えてしまった」と反省の弁を述べた。また、次年度は「生徒同士のネットワーク作りはもちろんのこと、大人同士も腹を割って互いの強み弱みをオープンにし、互いの学校が日本国内にとどまらず、世界に向けてたくましく生き抜く生徒の育成に努めていきたい」と書かせていただいた。

それから、1年。令和7年3月15日に、「第2回みらい東北高校生プレサミット」を開催させていただいた。その運営の原動力になったのが各連携校3名ずつ、計27名の生徒で構成された「生徒実行委員会」である。

生徒の力を信じること。教員としてあたりまえのことなのに、そこから1歩のみならず、何歩も引いてしまったのが、1年目のやり方であったかもしれない。その反省に立ち、今年度は、8月に生徒実行委員会を立ち上げた。もちろん、7月下旬には、オンラインで顔合わせをして、それなりの自己紹介は済ませておいたのだが、8月にいざ第1回の対面式の実行委員会を開催したときは、さてどうなるものやらと、どうしても心配が先に立った。しかし、その心配も杞憂で終わり、集まってくれた各校の生徒達は、アイスブレイクを経て、すぐさまお互いの距離を縮め、積極的に係り分担に名乗りを上げ、実に前向きな姿勢を持って実行委員会に関わってくれた。現代の高校生を「内向きの高校生」などと評するのがどれほど偏見に満ちたものであるか、改めて思い知らされた。その生徒達が運営の中心となり、また、その友人達のバックアップを支えにして、各校から派遣された発表生徒(チーム・個人)が6年度の探究活動の成果を一生懸命に発表してくれた。また、午後のワークショップにおいても、2040年の東北をイメージして、お互いに知恵を絞りあって見事にまとまりのある意見を発表してくれた。限られた時間内でのワークショップであったにも関わらず、2040年の東北をイメージするのに、他人事ではなく、自分事として課題に向き合う高校生の姿に心を揺さぶられた。改めて、大会を大いに盛り上げてくれた実行委員と各校の発表生徒のみなさん、そして助言者、運営指導委員・検証委員・カリキュラムアドバイザーの各委員の方々、各連携校、参加協力校の先生方、さらには、大会会場借用にご快諾いただいた、事業協働機関である東北工業大学の関係のみなさんにもお礼を申し上げたい。

次年度は、いよいよ本事業の最終年度である3年目となり、「みらい東北高校生国際サミット」を開催予定である。この「国際」にどこまで迫れるかが大きな課題である。今年度、第2回のプレサミットの際は、幸い台湾の姉妹校である2つの学校からオンライン参加をいただいた。これをどこまでスムーズにつなぎ、リアルなものに迫れるか。これもまた、次年度の重要な課題である。また、今年企画したように、生徒が英語だけで発表し、英語で意見交換する場面を、どんな形でどれくらいそろえれば「国際」にふさわしいものになるのか、そのあたりも今後計画段階で議論したいところである。

さらには、外国の高校生との交流や意見交換を、オンラインではなく、実際に参加してもらって実施できないものなのか。このあたりもせつかく東北六県からさまざまな人脈を持つ連携校が集まってネットワークを構築しているわけであり、今後議論を重ねたいと思っている。

今年度は、連携校のみならず、協力校として遠く石川県や山梨県、そして本県からも参加いただいた。改めて感謝申し上げたい。東北ブロックをさらに拡大して北陸、関東にネットワークを広げ、東日本を広くカバーするようなネットワークに一步近づけたかもしれない。日本各地の高校生が世界とつながり、未来の課題について、真摯に向き合い意見交換を行う場面に立ち会えること。これは教育に携わる者として、大きな喜びである。改めて関係のみなさんに、感謝申し上げ、本稿の結びとしたい。

仙台城南高等学校 教頭
遠藤 吉夫

12. 御礼

編集に協力いただいた運営指導委員、検証委員、カリキュラムアドバイザー、及び各連携校の先生方

所属	役職	氏名
宮城県 総務部 私学・公益法人課 副参事	運営指導委員	長田 晃明
東北大学 教育・学生支援部 特任教授		青山 勝
金沢大学附属 特別支援学校長		中澤 宏一
ゆずりは法律事務所 弁護士	検証委員	北島 みどり
ベネッセ東北支社 学校事業統括責任者		大竹 裕貴
東北工業大学 総合教育センター 准教授	カリキュラムアドバイザー	中島 夏子
仙台向山高校	教頭	佐々木 良彦
	主幹教諭	早坂 晴子
仙台東高校	教頭	曳田 雅史
	主幹教諭	渡邊 哲
泉高校	教頭	関口 聡
	主幹教諭	渡邊 伸明
八戸工大第二高校	教頭	出町 昌則
	教諭	田代 誠
盛岡白百合学園高校	教頭	菅原 浩
	教諭	成田 奈穂
聖霊学園高校	教諭	工藤 啓之
	教諭	福原 知恵
東北文教大学山形城北高校	専任講師	細野 敏明
福島成蹊高校	教諭	水谷 朋之

お忙しいところ、ご協力いただき、ありがとうございました。

拠点校のWWL 事業担当スタッフ

仙台城南高校	主幹教諭	脇坂 晴久
	主幹教諭	鈴木 理恵
	教諭	相澤 茂紀
	教諭	千葉 俊哉
	教諭	藤井 久美
	教諭	表 潤一
	教諭	高橋 和輝
	事務主任	大學 麻子
	事務主任	伊藤 まり子
	事務職員	佐藤 ひなた